

青森県埋蔵文化財調査報告書 第112集

上尾駮(1)遺跡 A地区

昭和 62 年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第112集

かみ お ぶち
上尾駮(1)遺跡A地区

- むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 -

昭和62年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は昭和61年度に、むつ小川原開発に伴い、その予定地内に所在する2遺跡5地区の記録保存を図るため、発掘調査を実施しました。

上尾駸(1)遺跡A地区からは、縄文時代早期末葉の集落跡が検出され、それに伴う多数の土器、石器等、当時の人々が日常生活に用いた道具が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

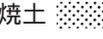
最後であります。調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位からの御協力、御指導を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

昭和63年3月

青森県教育委員会

教育長 **本 間 茂 夫**

例 言

1. 本報告書は、昭和61年度に実施したむつ小川原開発事業に係る上尾駮(1)遺跡A地区の発掘調査報告書である。
2. 執筆者の氏名は文末に記してある。
3. 挿図の縮尺は、遺構(1/60)、土器(1/2.5、1/3)、石器(1/2.5、1/2、1/3)等統一をはかり、それぞれスケールを付した。また挿図中で使用したスクリーン・トーンの表示は次のとおりである。
石器使用痕 タタキ・クボミ  スリ  遺構・焼土  地山 
遺物分布図を(土器.....、石器.....)
4. 土層観察に用いた色調は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1979)を参考にして表記した。
5. 縄文原体については『日本先史土器の縄紋』(山内清男：1979)を参考にして記載した。
6. 資料の鑑定並びに分析については、下記の方に依頼した。
石器石質鑑定 青森県立八戸高等学校教諭 松山 力
7. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の諸氏から御教示、御指導を得た。
丹羽 茂、石岡憲雄、小田野哲憲、岡村道雄、熊谷常正、高橋与右工門、大沼忠春、藤沼邦彦、小井川一夫、野村 崇、工藤竹久
8. 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と刊行西暦年で示した。(例、青森県教委：1988)

目 次

序

例 言

第 1 章 調査に至る経過と調査要項	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査要項	2
第 2 章 調査の概要と周辺の関連遺跡	4
第 1 節 調査の方法	4
第 2 節 調査の経過	4
第 3 節 周辺の関連遺跡	6
第 3 章 遺跡の地形と層序	8
第 1 節 遺跡周辺の地形及び地質	8
第 2 節 遺跡の層序	9
第 4 章 検出遺構と出土遺物	12
第 1 節 第 1 号竪穴住居跡と出土遺物	12
第 2 節 第 1 号土壌	16
第 3 節 焼土遺構	16
第 5 章 遺構外出土遺物	17
第 1 節 土器	17
第 2 節 石器	44
第 3 節 土製品	68
第 6 章 分析と考察	70
第 1 節 第 1 群土器の編年上の位置づけと課題	70
第 2 節 出土石器について	74
第 7 章 まとめ	79

第 章 調査に至る経過と調査要項

第 1 節 調査に至る経過

北太平洋に面した上北郡六ヶ所村周辺は、小川原湖のほか沼沢や森林が多く大変自然に恵まれた地域である。

昭和44年度、国は新全国総合開発計画を策定し、その中にむつ小川原地域を有力候補地と定めた。同年本県ではその計画に即応して「陸奥湾・小川原湖地域の開発」を計画し発表した。

昭和46年度には第一次基本計画として「むつ小川原地域開発構想の概要」を発表した。同時に県教育委員会では、開発に伴って破壊の恐れのある遺跡の所在や範囲を確認するため、分布試掘調査を実施してその成果の概要を発表してきた。

昭和49年度には、むつ小川原開発第二次基本計画の骨子が発表され、幹線道路を含む工業基地利用図が公表された。昭和52年3月、むつ小川原開発第二次基本計画に係る環境影響評価報告（環境アセスメント）が住民に示され、同年8月閣議了解を経て開発は本格的に着工の見通しとなった。

以来、この開発事業に係るむつ小川原開発株式会社所有地内の発掘調査は昭和49年、50年に実施した新住区建設に伴う千歳(13)遺跡を初め昭和54年55年には石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン敷設に係る表館、発茶沢の両遺跡、昭和56年57年の石油備蓄基地消火用水確保に係る弥栄(2)遺跡、昭和59年にはむつ小川原開発工業用地に所在する大石平遺跡、沖附(1)(2)遺跡、昭和60年には大石平(1)遺跡A、B、C、D地点、弥栄平(4)遺跡、上尾駸(2)遺跡A、B地区、の発掘調査が実施された。本遺跡は昭和60年10月むつ小川原開発株式会社からむつ小川原開発工業用地内に所在する本遺跡の発掘調査の依頼があった。そこで青森県教育委員会は同年11月発掘調査依頼を受託する旨回答し調査計画に組み入れた。本遺跡は昭和61年9月1日から同年10月31日まで、上尾駸(2)遺跡A、B、C地区、発茶沢遺跡と共に青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当し実施することになった。

(市川 金丸)

第2節 調査要項

1. 調査目的

むつ小川原開発事業実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

2. 調査期間

昭和61年9月1日から同年10月31日

3. 遺跡名及び所在地

上尾駸(1)遺跡 上北郡六ヶ所村大字尾駸字上尾駸

4. 発掘面積

6,000m²

5. 調査委託者

むつ小川原開発株式会社

6. 調査受託者

青森県教育委員会

7. 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8. 調査協力機関

六ヶ所村

六ヶ所村教育委員会

上北教育事務所

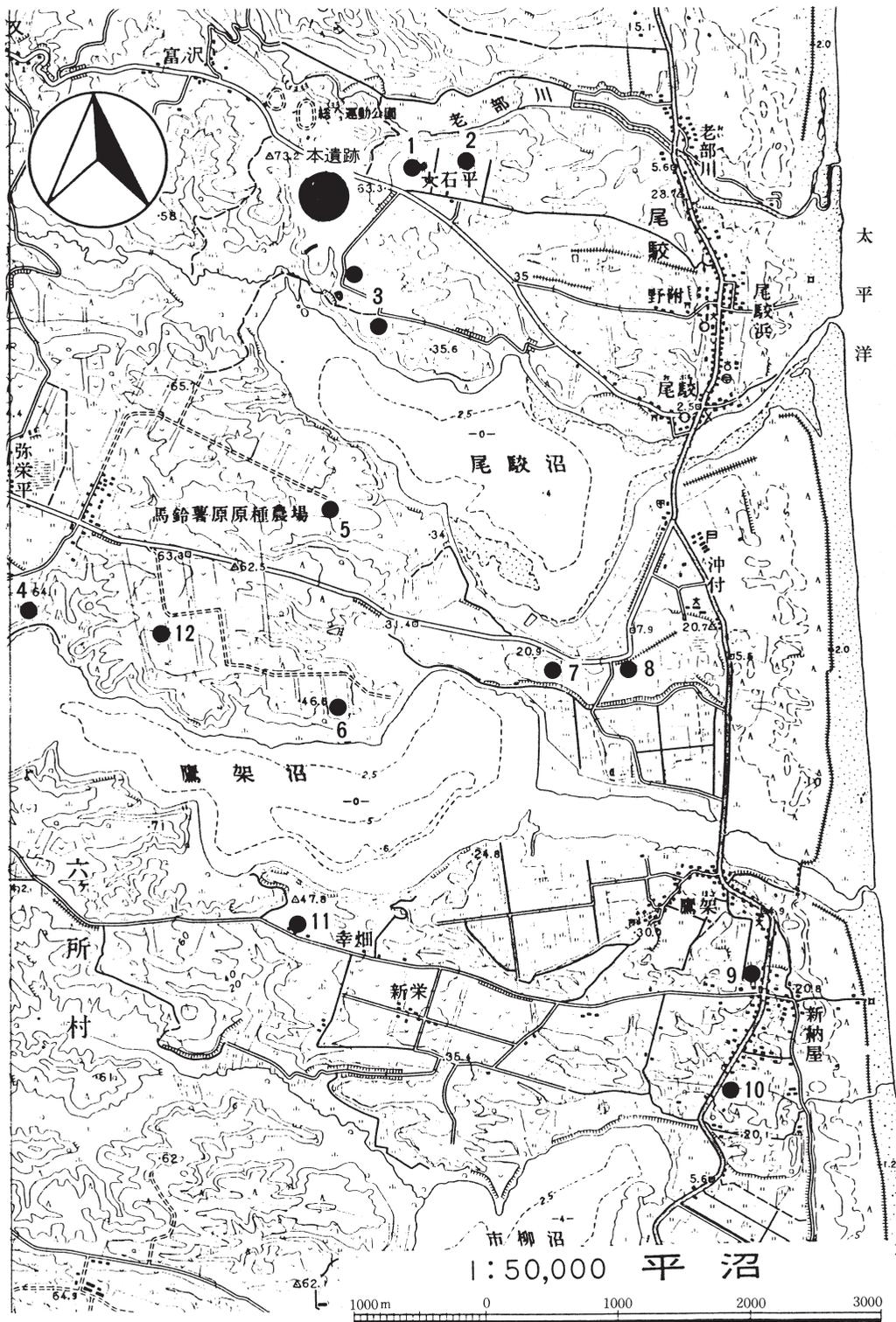
9. 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教授
調査協力員	田中 澄	六ヶ所村教育委員会教育長
調査員	小山陽造	八戸工業高等専門学校教授
	滝沢幸長	八戸市文化財保護審議委員
	佐藤 巧	青森県立郷土館学芸員

調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

総括主幹 調査第一課長 事務取扱	新谷 武	(現青森県立木造高等学校稲垣分校教頭)
調査第三課長	市川金丸	(現調査第一課長)
総括主査	三浦圭介	
主事	赤平智尚	(現主査)
調査補助員	木村隆文、畠山文彦、故金枝律明、葛西直子	



(国土地理院発行の50,000分の1地形図を複製)

図1 上尾駸(1)遺跡A地区とその関連遺跡

第 章 調査の概要と周辺の関連遺跡

第 1 節 調査の方法

昭和60年度には本地点を含む約 6 万平方mを対象に方眼を組み試掘調査を実施した。この調査では20m×20mの大グリットを基本にし、その交点に、4 m×4 mの小グリットを設定し、この部分を試掘している。

今回の発掘調査では、試掘調査の成果を最大限活用するために、この試掘調査時のグリットをそのまま踏襲して調査区を設定した。しかし、呼称については調査範囲が狭いため便宜上、東西・南北に新たな基軸線を設定し、この交点を A - 100とし、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を組み合わせて使用した。

調査は試掘調査の結果を踏まえ、分層発掘に重点を置いた。第 層を除去した後、遺物包含層の主体層である 層及び a層では出土層位の観察に力を注いだ。また、この 層及び a層中では遺物出土状況等から竪穴住居跡の存在が予想されたので、各層中及び層理面での遺構の存否を確認した。

遺構は、竪穴住居跡を四分法、他は二分法で精査した。実測は平板測量と簡易遣り方測量を併用した。また、縮尺は20分の1を原則としたが、細部に関しては10分の1、5分の1を使用した。

遺物は、グリット単位でしかも種類ごとに数字を付し、出土層位名を記して収納した。この方法は遺構内出土の遺物に対しても採用した。一括廃棄の状態にあるものは5分の1の平面図及び断面図を作成した後取り上げた。

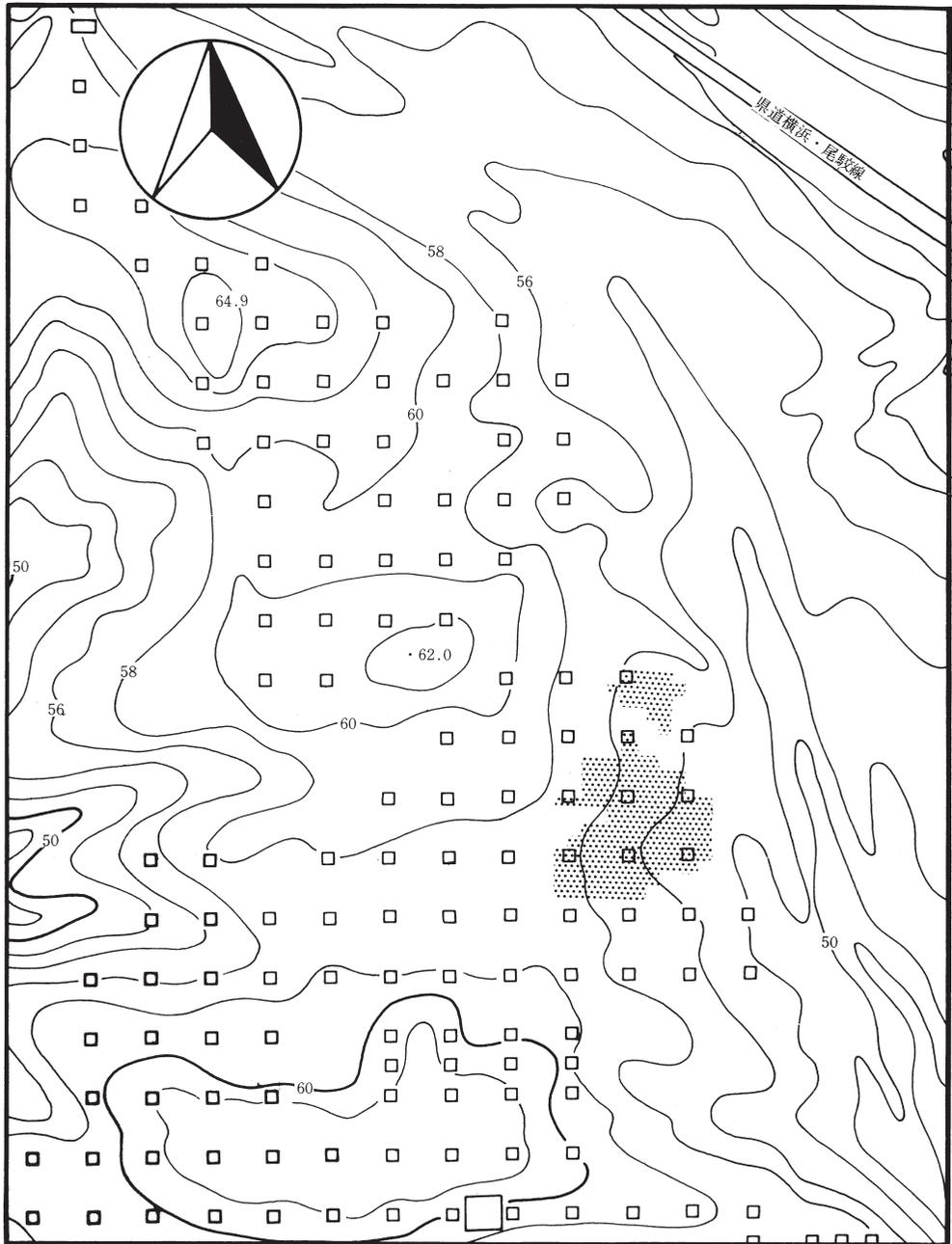
また写真の撮影は35mmのモノクローム、リバーサルフィルムを併用し、作業の進展に伴い、必要に応じて行った。

第 2 節 調査の経過

昭和61年 9 月 1 日に現地に発掘調査のための器材を搬入すると同時に、現地作業を開始した。調査予定地は大部分が原野のため雑草が生い繁っており、この草刈り作業から開始した。この作業の進行に伴い、翌 2 日からはグリット設定作業に入った。

粗掘り作業は 9 月 3 日から開始した。本地区の中で遺構及び遺物が最も集中すると予想された調査区 A - 100区周辺から始めた。

同日にはこれと並行し、大石平地区の三角点 (63.3m) よりレベル原点の移動 (ベンチ・マークの設定) を行った。A - 100のグリット基準杭をベンチ・マークに併用した。このベンチ



調査範囲



昭和60年度試掘調査範囲



図2 上尾駸(1)遺跡A地区地形図

・マークは55.40mである。

粗掘り作業開始から時を経ずして遺物が出土しはじめた。縄文時代早期末葉の表裏縄文系土器群と、縄文時代前期の竹管文土器群である。特に前者の土器破片が出土遺物の主体を占めた。

この早期末葉の遺物の量は、粗掘り及び精査作業が第 a 層に到達した時にピークに達した。この頃、第 a 層上面で、北海道東部に文化の中心を置く東釧路 式土器 1 個体分が在地の早稲田 5 類土器群と重なり合って出土した。これは、東北地方北部と北海道の土器編年の対比を行う上で注目すべき資料と言える。

調査予定期間も終盤にさしかかった10月中旬には第 b 層及び第 層上面の精査に入った。この時点で調査区 A - 101区周辺で、縄文時代早期早稲田 5 類期の竪穴住居跡 1 軒、土壌 1 基、焼土遺構 2 箇所等の各遺構を検出した。

10月30日には各遺構の精査も終了し、翌31日には調査器材、出土遺物をセンターに搬入し、現場での全作業を終了した。

(三浦 圭介)

第3節 周辺の関連遺跡

上北郡六ヶ所村管内の埋蔵文化財については、昭和44年の新全国総合開発計画の発表以来、むつ小川原開発事業の進展に伴い、これまで多くの遺跡で、分布・試掘・発掘の各調査が県教育委員会によって行われてきた。この結果、六ヶ所村管内に所在する125遺跡のうち、試掘調査、発掘調査が実施された遺跡の全遺跡数に占める割合は約 3 割で、全国的にも注目される高い数値と言える。

これらの遺跡の大半は、小川原湖、鷹架沼、尾駮沼を中心とする大小の湖沼群周辺の海岸段丘上に立地する。このうち、本遺跡の営まれた時期と直接関連する縄文時代早期末葉から同前期初頭までの時期の遺跡を見ると12遺跡であり、村内所在の全遺跡数に占める同期の割合は極めて高い。この時期は汎世界的な海進期でもあり、我国では「縄文海進」とも称している時期に相当する。

このような傾向は当該時期のみならず、縄文時代中期末葉から後期中葉の時期においてもみられる現象である。

以下に本遺跡と直接関連すると見られる遺跡の概要を表にまとめておく。

(三浦 圭介)

上尾駱(1)遺跡A地区と周辺の関連遺跡

遺跡番号	遺 跡 名	遺跡の概要(関連時期)	文 献	調査年度(昭和)
1	大石平 (1)	遺物散布地	県埋文90集、97集、103集	58、59、60年
2	大石平 (2)	遺物散布地	県埋文90集、97集、103集	58、59、60、61年
3	上尾駱 (2)	遺物散布地	県埋文48集(旧102号遺跡)	60、61年
4	弥栄平 (3)	遺物散布地	県埋文24集、28集、94集(旧弥栄平(2)遺跡)	
5	沖 付 (4)	遺物散布地	県埋文48集、101集	
6	発茶沢 (2)	遺物散布地	県埋文48集	
7	発茶沢 (1)	遺物散布地	県埋文3集、9集、24集、50集、67集、96集	
8	表 館 (1)	住居跡を含む集落跡・貝塚	県埋文3集、42集、61集、91集	
9	新納屋 (2)	遺物散布地	県埋文42集、46集	
10	新納屋 (1)	集落跡	県埋文62集	54年
11	幸 畑 (7)	遺物散布地	県埋文94集	59年
12	弥栄平 (2)	遺物散布地	県埋文28集	50年

県埋文…青森県埋蔵文化財調査報告書

第 章 遺跡の地形と層序

第 1 節 遺跡周辺の地形及び地質

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあつて、この付近には北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸にはこれらの湖沼を閉塞するような形で天ヶ森砂丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200mの幅で分布し、さらに内陸側には標高5～23mにも及ぶ古砂丘が同じく南北方向に200～300mの幅で分布している。現在、古砂丘は松林となつていて防風・防砂林の役割を果たしている。また、この付近は海岸砂丘の発達も顕著であつて、およそ4段の段丘面が確認できる。このうち、本遺跡が立地しているのは、下位から2段目の千歳段丘（標高60～100m）である。

本遺跡の位置する地域は、北方には東流して太平洋に注ぐ老部川があり、南方には湖沼群のうち最北に位置する尾駮沼があつて、いずれも急峻な段丘崖で臨んでいる。その南北の幅はおよそ2kmである。また、本地域の中央部及び西端には浸食谷があつて、いずれも尾駮沼に注いでいる。この地域に広く分布している段丘は最下位の七鞍平段丘であり、北西方には千歳段丘が広く分布する。この七鞍平段丘は2～3段に段化して、全般的には比較的平坦な地形である。本遺跡の立地する千歳段丘とは比高約10mの急傾斜な浸食斜面でもって接している。また、千歳段丘は浸食谷の発達でかなり開析され起伏に富む状況であつて、小丘地状の地形を呈している。

本遺跡は現汀線より約3.7km内陸側の、標高54～56mの地点に位置している。遺跡周辺は本地域のほぼ中央部を南東流する浸食谷の谷頭部にあたり、西方約100m付近に分布する小丘地状の千歳段丘からこの谷に向つて東傾斜する斜面上に本遺跡が立地している。このため、遺跡内は低湿地の状態であつて、湧水量が多い。ただ、本遺跡から検出された縄文時代早期末の竪穴住居跡は斜面上のやや地形的な高まりを示す場所に位置している（図3）。

下北半島の頸部を構成する地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層と第四系下部洪積統の野辺地層である。泊安山岩類は安山岩質溶岩と同質角礫岩及び集塊岩からなり、老部川や尾駮沼に臨む段丘崖にみられるが、主に遺跡北方の山岳地に広く分布している。なお、遺跡内から出土する礫石器等で安山岩製のものはほとんど本層中の安山岩と同質であると考えられる。鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあつて、鷹架沼を中心にほぼ南北に分布している。浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位層を不整合におおっている。また、野辺地層は全体的に砂とシルトの互層から

なり、下位の新第三系を不整合におおい、ほぼ水平に堆積している。なお、本層は段丘構成層におおわれている。

本遺跡の立地する千歳段丘の構成層は段丘砂礫層と火山灰層とからなり、野辺地層を不整合におおっている。段丘構成層のうち、火山灰層はよくしまった粘土質の褐色火山灰とその上位の黄褐色ラピリ質（lapilli）浮石からなる。層厚は50～100cmと薄く、特にlapilli質浮石は尾駮沼以北では局部的に堆積するのみである。本遺跡においては、千歳段丘を浸食した谷の斜面上に位置するために、斜面の上位に火山灰層が堆積しているほかは野辺地層を不整合におおう段丘砂礫層を確認できるのみである。

第2節 遺跡の層序

遺跡内及び周辺遺跡の土層とその対比を図4に示した。また、遺跡内の東西セクションを図6に示した。各層の概略は次のとおりである。

層 黒褐色土層（15～20cm）表土及び耕作土である。草根を多量に含み、多少かたさはあるが、しまりに欠ける。全体的にやや砂質である。

間層1 黒色腐植質土層（0～8cm）低地においてレンズ状に堆積する。粘性、湿性が多少あり、かたくしまっている。乾くと灰黒色に変色し、亀裂の大きいクラック（crack）が多少発達する。本層は大石平遺跡 区の 層に対比される。

間層2 暗黒褐色土層（0～20cm）低地にのみ堆積する。粘性、湿性があり、かたさ、しまりに欠ける。やや砂質である。本層は上尾駮（1）遺跡C区の間層、大石平遺跡 区の 層に対比される。なお、B-94の風倒木と考えられる痕跡において、本層中に歴史時代の降下火山灰層が2枚堆積しているのを確認できた。上位の灰褐色細粒火山灰は本層最上部に位置し、レンズ状（1～2cm）に堆積していた。下位の青灰色細粒火山灰はその痕跡の凹部の小ブロックとして密集した状況で堆積していた。この2枚の降下火山灰はその特徴からみて、苫小牧火山灰Tm、十和田a降下火山灰To-aと考えられる。

層 黒色砂質土層（15～20cm）粘土質でしまりがある。湿性が充分でcrackの発達が少なく表面がなめらかである。低地においては黒色粘土質に層相が変化し、砂の含有が少なくなる傾向がある。本層は上尾駮（1）遺跡C区の 層、大石平遺跡 区の b層に対比される。なお、本層は縄文時代前期初頭の遺物包含層である。

層 黒褐色砂質土層（30～50cm）多少しまりはあるものもろい。下位層の混入状況により2層に分層できる。 a層は粒子状の火山灰及び小ブロックの砂を含み、土壌化

がかなり進行している。 b層はブロック状の火山灰及び砂を多量に含んでいる。本層は低地において黒褐色粘土質土に層相が変化し、層に漸移している。本層は上尾駱(1)遺跡C区及び大石平遺跡 区の 層に対比される。なお a層上部は縄文時代早期末の遺物包含層である。

層 暗灰褐色砂質粘土質(0~30cm)低地にのみ堆積する、低湿地帯の堆積物である。斜面上位にかけては粘土質砂層の薄層へ層相が変化している。

層 褐色火山灰層(0~30cm)かたくしまった粘土質火山灰である。多少砂質である。竪穴住居跡の位置する A-101付近の地形的に高まっている場所で確認できた。低地では浸食されて堆積していない。本層は上尾駱(1)遺跡C区の 層に対比される。

層 砂層(50cm以上)中粒砂で、礫を含まない。段丘砂礫層の上部に位置する。

(総括主査 山口 義伸)

〔引用・参考文献〕

近野遺跡()	1975	青森県教育委員会(第22集)
千歳(13)遺跡	1976	" (第27集)
発茶沢遺跡	1982	" (第67集)
鶉窪遺跡	1983	" (第76集)
大石平遺跡	1984	" (第90集)
大石平遺跡	1985	" (第97集)
大石平遺跡	1986	" (第103集)
上尾駱(1)遺跡C区	1987	" (第113集)
上尾駱(2)遺跡B・C区	1987	" (第115集)
科学Vol.51 9	1981	町田・新井・森脇
古文化財教育研究報告 12	1983	三辻・松山・山本・高林

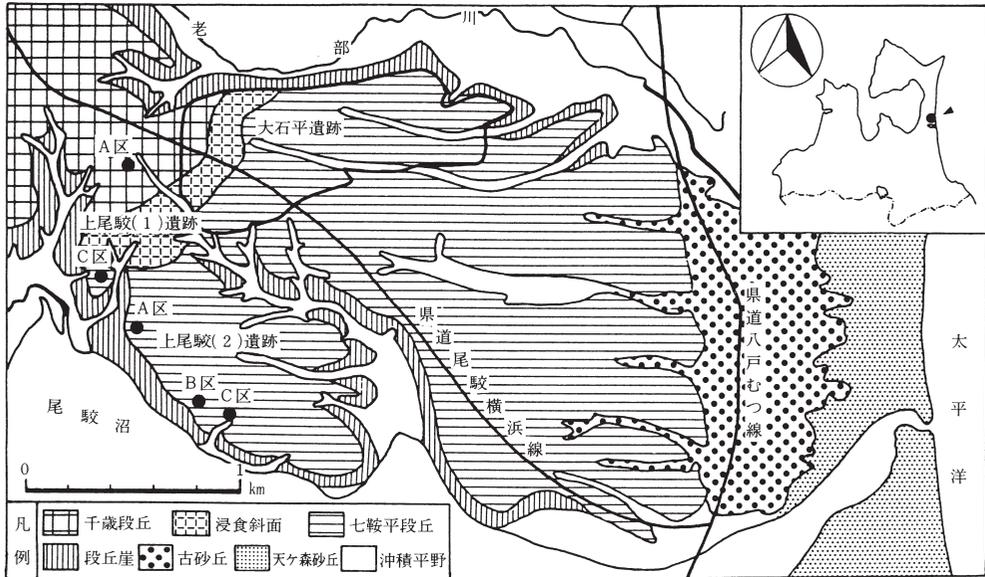


図3 遺跡周辺の地形分類図

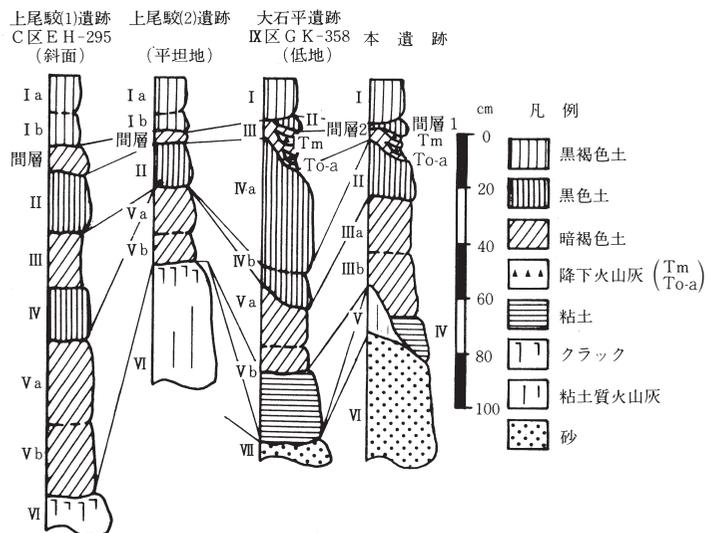


図4 遺跡内及び周辺遺跡の土層の模式柱状図

第 章 検出遺構と出土遺物

本遺跡の調査で検出できた遺構は、縄文時代早期末葉の竪穴住居跡 1 軒と、時期不詳の土壌 1 基、焼土遺構 2 基である。以下に、その概要を述べる。

第 1 節 第 1 号竪穴住居跡と出土遺物

【位置と確認】 調査区のほぼ中央部である A - 101区で検出された。堆積土の土性及び土色がローム層に極めて類似するため、当初、平面で確認することができず、基本層序図の作成段階で初めて竪穴住居跡と確認できた。

この位置は北方に向かって緩傾斜している面のほぼ中央部である。

【堆積土】 断面観察では、基本層序第 層中に掘り込み面を有する。堆積土は 4 層に細分され、第 1 層の黒色の腐植土、第 2 ~ 4 層は腐植土と黄褐色の砂質シルトの混合土である。

【平面形・規模】 【位置と確認】の項で述べたように、本住居跡の北側の壁及び床面の約 3 分の 2 は検出できなかったため、全体の形状及び総面積を知ることができない。しかし南側の約 3 分の 1 は緩傾斜の上位にあたることから壁及び床面を検出することができた。遺存する部分から推定すると、一辺約 5 m の隅丸方形であろう。

【壁】 竪穴住居跡の掘り込み面は第 層中であることから、第 ~ 第 層を壁面としている。残存する南壁での床面からの立ち上がりは極めて緩い。

【床面】 床面は、竪穴住居跡の南側での基本層序の第 層の黄褐色ローム層、他は第 層の砂質土層を、直接利用している。なお、硬さは、南壁寄りではローム層とほとんど違いがないが、中央部寄りやや踏み固めた痕跡が確認された。

【炉】 竪穴住居跡のほぼ中央部に直径 40cm 程の円状に焼土が検出された。この焼土は、二次的なものではなく、この位置で恒常的に火を焚いたものである。掘り込みは認められず、床面上を直接利用したものである。

【柱穴】 竪穴住居跡及びその周辺で検出できたピットは 4 個である。しかし、位置や規模からみると、これのみで上屋を支えることは不可能である。

【出土遺物】 竪穴住居跡内からは、土器、土製品、石器が出土した。(図 7、8)

土器は約 50 片出土したが、いずれも細片で、略完形等の器形の全体を知れるものは無い。このほとんどは床面及び床面直上のものである。すべて第 群土器(早稲田 5 類)である。

土製品は 2 点出土したが、いずれも土器片を再利用した円盤状のもので図 7 - 16 は中央部に深さ 0.2cm の盲孔が、また、図 7 - 15 は中央部に径 0.6cm の穿孔がある。

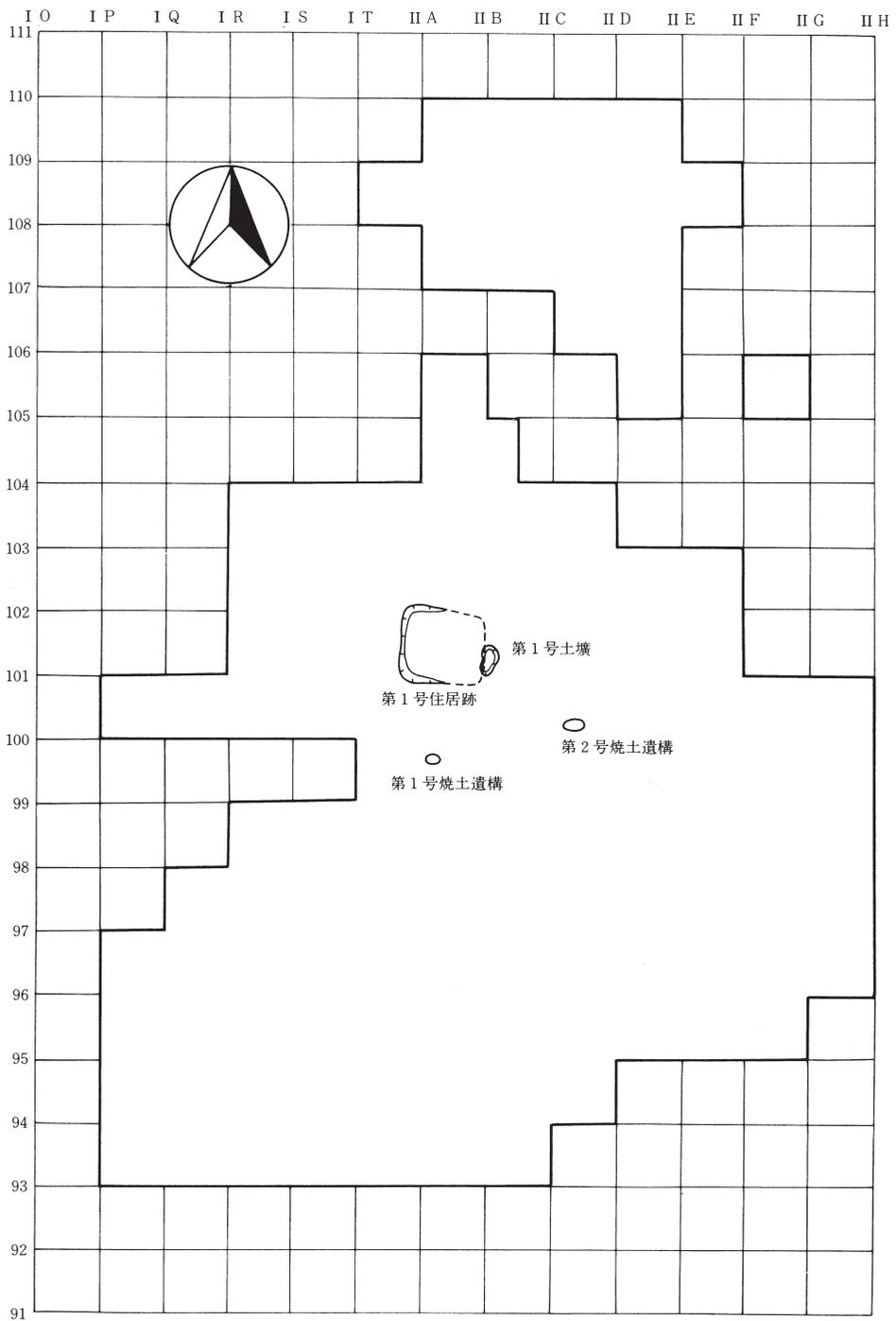
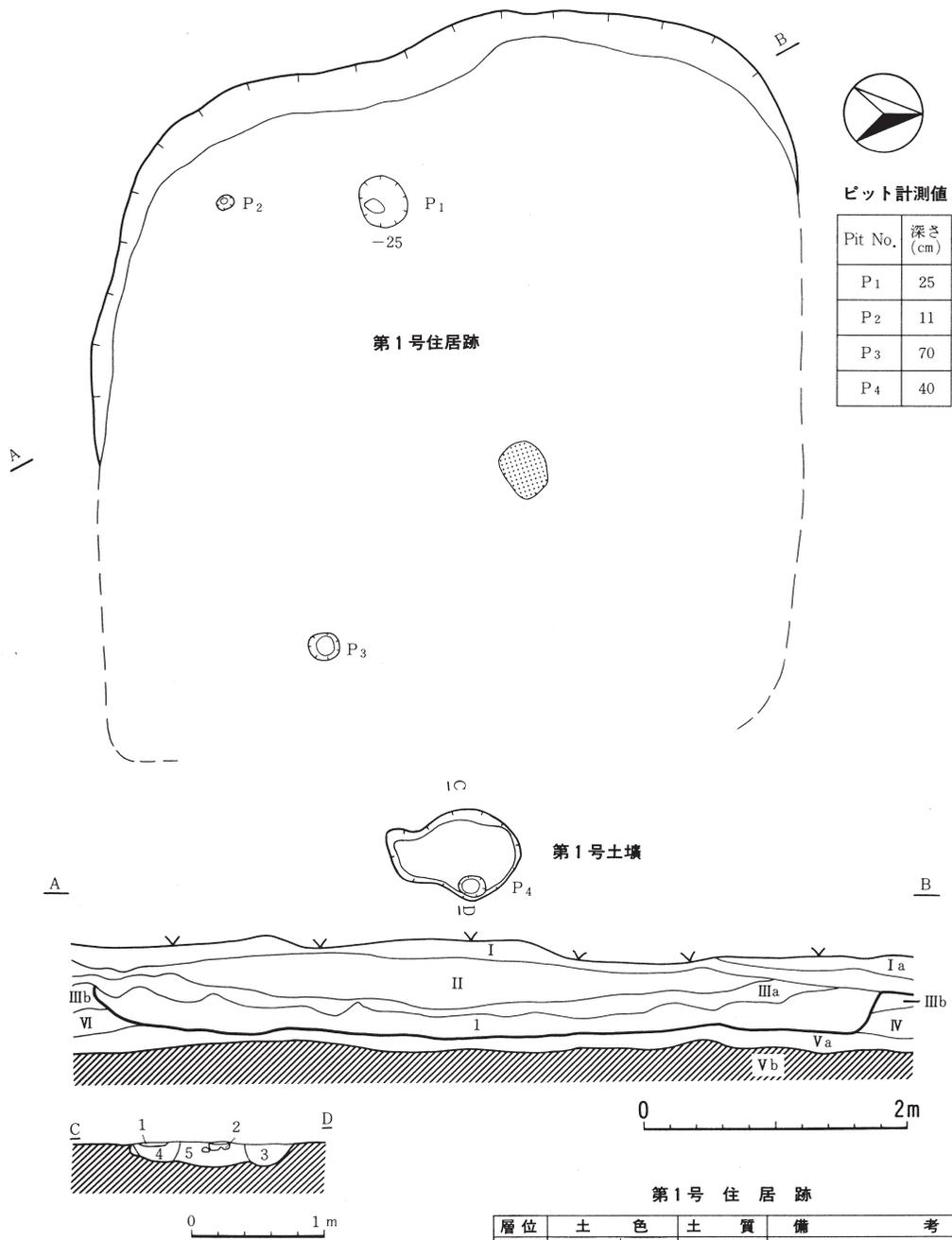


図5 上尾駁(1)遺跡A地区遺構配置



ピット計測値

Pit No.	深さ (cm)
P1	25
P2	11
P3	70
P4	40

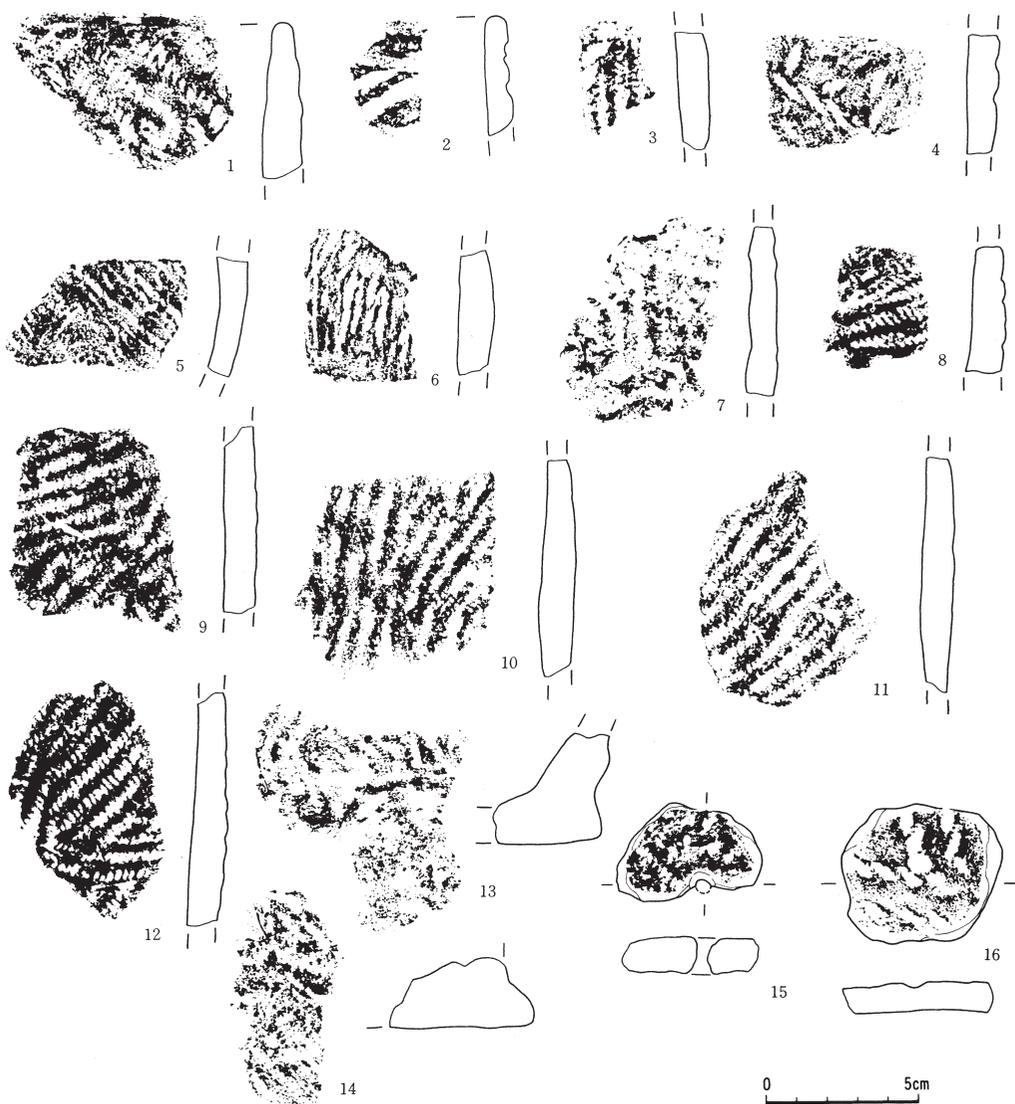
第1号住居跡

層位	土色	土質	備考
I層	10Y R ^{1/2} : 黒色	シルト	表土
II層	10Y R ^{2/4} : 黒色	シルト	上部平安期、下部縄文前期
III a層	10Y R ^{2/4} : 黒褐色	シルト	縄文早期 (I群土器)
III b層	10Y R ^{2/4} : 黒褐色	砂質シルト	
IV層	10Y R ^{2/4} : 明黄褐色	細砂	
V a層	10Y R ^{2/4} : 黄褐色	砂	酸化鉄が薄くみられる
V b層	10Y R ^{2/4} : 褐色	ローム	
1層	10Y R ^{2/4} : 褐色	砂質シルト	竪穴堆積土

第1号土坑

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R ^{2/4} : 赤褐色	シルト	焼土混入
2層	10Y R ^{2/4} : 暗褐色	シルト	ロームブロック
3層	10Y R ^{2/4} : 黄褐色	シルト	ロームブロック
4層	10Y R ^{2/4} : 赤褐色	シルト	炭化物混入
5層	2.5Y ^{2/4} : 暗オリーブ	シルト	炭火物少量混入

図6 第1号住居跡・第1号土坑実測図



第1号 住居跡出土土器・土製品観察一覧

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	1 H床面	口縁	1B4	結束第1種 (O段多条)	1
2	1 H覆土	口縁	1A1	竹管工具による沈線文	19
3	1 H床面	胴	1A4 a	結束第1種の側面圧痕文・同回転文	10
4	1 H床面	胴	1A4 b	L R側面圧痕文	17
5	1 H覆土	胴	1B?	無節	11
6	1 H床面	胴	1B?	無節	15
7	1 H床面	胴	1B4	結束第1種回転文	4
8	1 H覆土	胴	1B?	単節縄文	20
9	1 H床面	胴	1B3	L R単節縄文 (10~13は同一個体)(O段多条)	6
10	1 H床面	胴	1B3	L R単節縄文 (O段多条)	3
11	1 H床面	胴	1B3	L R単節縄文 (O段多条)	8
12	1 H床面	胴	1B3	L R単節縄文 (O段多条・羽状構成)	2
13	1 H床面	底部	1B3	L R単節縄文 (O段多条・底外面同一文様)	22
14	1 H床直	底部	1B3	L R単節縄文	21
15	1 H床面	土製品	1B	結束第1種? 縄文	土製品①
16	1 H床面	土製品	1B	直前段合擦の側面圧痕	土製品②

図7 第1号住居跡出土遺物 (土器・土製品)

表面の文様は16が縄の側面圧痕、15が0段多条のRL縄文である。いずれも早稲田5類土器の再利用である。

(三浦 圭介)

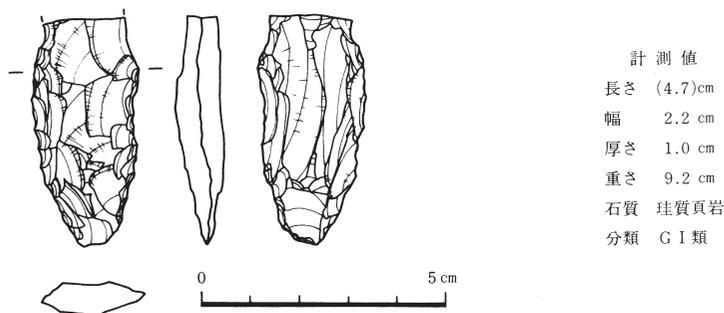


図8 第1号竪穴住居跡出土石器

第2節 第1号土壌

調査区 B - 101区の第 層上面で検出した。この地点は第1号竪穴住居跡の東壁付近に位置する。平面形は長軸102cm、短軸71cmの不整な楕円形である。主体となる堆積層はローム・ブロック混じりのシルト層である。底面及び壁面は凹凸が多く、踏み固められた痕跡はない。第1号住居跡に付随するとみられるP₄と重複関係にあり、本遺構が古い。

堆積土内からは早稲田5類期(本遺跡第 群土器)の土器片と礫石器が出土した。

第3節 焼土遺構

基本層序第 a層上面で2箇所焼土遺構を検出した。第1号焼土遺構は A - 99区第2号焼土遺構は C - 100区である。いずれも第 a層の黒色シルトが火熱のため暗赤褐色に変化したもので、一次的な焼土である。この地点で焚火をした結果であろう。2箇所の焼土の厚さは最も厚い所で3cmである。焼土中からの遺物はない。

(三浦 圭介)

第 章 遺構外出土遺物

第 1 節 土 器

土器は復原可能なもの16個体（図上復原も含む）、口縁部片445片87個体分、底部片192片45個体分、とこれらに対応する胴部片が多数出土した。

これらの土器は縄文時代早期末葉（第 群土器・第 群土器）、同前期初頭（第 群土器）、同中期中葉（第 群土器）に位置づけられるものである。

第 群土器

三沢市早稲田貝塚出土土器を標式とする縄文時代早期末葉の早稲田 5 類（佐藤他：1958）に相当するもので、近年の該期遺跡での長七谷地貝塚（長七谷地 群 b 類）、売場遺跡（売場 群）和野前山遺跡（和野前山第 6 群）が本群類似の良好な資料を出土している。

（1）出土層位と出土状況

本群が分布するのは調査区 T ~ H - 94 ~ 103の約1,000m²強の範囲である。この中でも取り分け B ~ F - 96 ~ 101の約300m²に濃密な分布を持つ。この部分は微地形的に見ると、遺跡全体が片方に緩傾斜する中でもわずかな谷部を形成している地区である。

また、本群が包含される層位は第 層（黒色腐植土）であるが細片等の一部は第 層中からも出土した。しかし第 層全体に渡って包含されているものではなく、層厚20cm前後のうち上部約10cm中に含まれている。また、同一層同一地点から第 群土器が散在した状態で本群土器と共伴した。

（2）胎 土

本群土器は素地土及び混入物において、他の時期の土器群と比較して極めて特徴的である。素地土は個体により差があるものの、概ね、極めて細かい粒子の粘土を用いている。従って、個体に単に触れるだけで器表面の粉末が手に付着する程である。素地土採取後に一度水に晒し、沈殿させ、粒子の細かい上部の粘土を使用したものとも思える。

また、混入物には多量の植物性繊維や少量の砂粒がある。植物性繊維の含有量には個体差があるが、概ね、砂粒の含有量が少ないもの程多いようである。この繊維は口縁部から底部までほぼ均一的に胎土全体に含まれるが、中には繊維が束として入り込むものもある。

砂粒の混入も全体的に見られるが総じて少ない。粒径は0.5mm ~ 1.5mmが多いが中には 5 mm大のものもある。この他、白色を呈する凝灰色の細粒も混入されているのが本群の特徴でもある。

(3) 成形及び調整

一般的に器形の成形は粘土紐を螺旋状に積み上げ、これを接合することの繰り返しによって行われるが、この場合の粘土紐と、その厚さ、幅等は器形の法量に関する。すなわち、法量の大きいもの程、厚さ、幅の値が大きくなる。しかし、本群の場合は必ずしもこの関係が成立しない。器厚は法量に関わりなく総じて厚手であり、しかも16mm～7mmと幅が大きい。破片に見られる厚さは9mm～12mmのものが多数を占める。この場合一破片中でも最大厚と最少厚では概ね30%前後の差があるものが多い。すなわち断面は下底が上底より長い台形をなす。これは、粘土帯の接合方法に直接関係するものである。

粘土帯の幅は、個体差や、同一個体内の部位差があるが、3(1.8cm)や、12(2.5cm)のように狭いものから5、16のように5cmを越えるものもある。総じて3.5cm前後のものが多い。

粘土帯と粘土帯との接合面が明瞭に観察できるものは図9に示したように15片ある。同一個

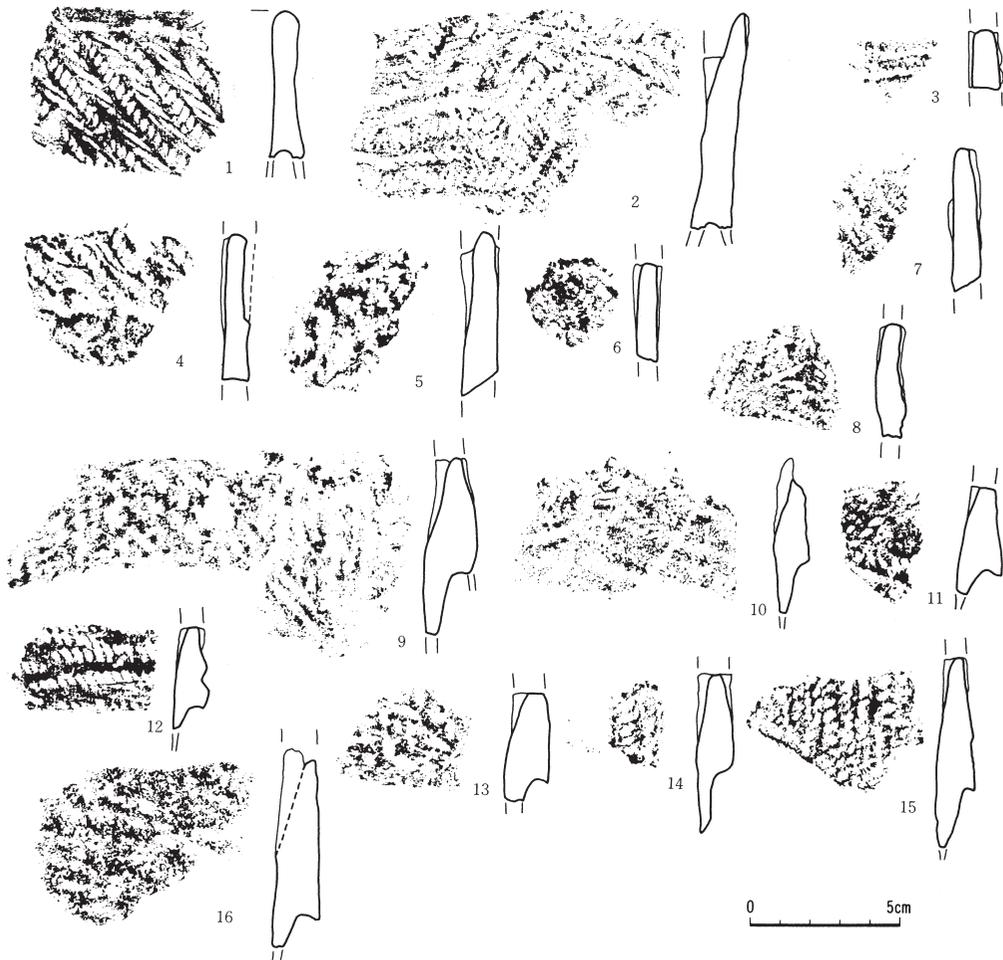


図9 粘土帯接合資料

体のものは無く、いずれも別個体である。すなわち15個体分と言える。しかし粘土帯の上端部（口縁部側）下端部（底部側）を同時に観察できるものは無く、1～8が上端部、9～15が下端部を残すものである。接合面はいずれも破損面のような細かな凹凸がなく滑らかな面を形成している。

下端部を残すものは全て断面が凹面を形成し、しかも平面的には内側が一段低い「段」をなす。この「段」は粘土帯の中心部に次の粘土帯の中心部を当てがうのではなく、器壁の中心部よりやや外側（器表面側）に位置づけ、上位の粘土帯の両端を引き上げて接合することによって生ずるものである。この場合、8個体のものは土器内面での接合に重点を置いていることが理解できる。これは外傾する器形を径の小さい底部寄りから成形する場合、上位の粘土帯は径が大きい由に常に外方への力がかかる。これを制止するための最も効率的な方法である。

また、上端部と確認できる資料のうち2は上記の内容をより明瞭に物語っていよう。

（4）器 形

本群土器は器形上でも大きな特徴がある。以下各部位毎にその特徴を記す。

口縁部から口唇部にかけては軽く外反するもの（図10 - 1、図11 - 2、図12 - 1等）が多いが、直線的に立ち上がるもの（図11 - 1、3）、緩やかに内湾するもの（図10 - 3）もある。

また極めて稀ではあるが頸部が内側に逆「く」字状に屈曲するもの（図19 - 1）もある。

頸部から胴部にかけては軽く膨らむものが多いが図11 - 3のようにほぼ直線的なものもある。

また、胴下部の径は口径や胴径の割に極めて小さく外観上は不安的な印象を受けるものが多い。因に図12 - 1は口径：胴最大径：胴下部径が3：3.2：1である。

底部は外方に張り出すものが一般的である。図22、23に示したように胴下部で極端にすぼめられたために、土器全体の安定性の上で意図的に接地面を広げたものであろう。

（5）施文文様

本群の土器には全てのものに口縁部から底面に至るまで外面文様が施文されている。またその中の一部には内面にも見られるものもある。文様は部位によって異原体を使用するものもあるので、以下、口縁部・胴部・底部・内面（裏面）に分けて記載する。

〔口縁部〕

本群の土器の器表面には全て縄文が主体的に施文されている。この他付随的ではあるが指頭圧痕・爪状工具による圧痕・スタンプ状圧痕・棒状工具による刺突文・沈線文・縄端刺突文等

がある。

特に縄文には絡条体の回転文・同圧痕文・縄自体の回転文・圧痕文があり、それらの原体には「正の撚」「反の撚」「合の撚」があり、文様に種々の変化をつけている。

以下に施文文様の構成方法や施文原体の種類により、これらの土器を分類し、更に各々の類の全個体に占める割合を述べる。(この場合、接合関係にある破片は一片として数える。)

A：胴部文様とは意識的に異なる文様(異原体を使用する場合や同一原体で施文方法が異なる場合がある)を施文し、「口縁部文様帯」を形成するもの。これは以下の8類に細別できる。

1類：竹管様工具による沈線文が施されるもの(図14-1~3)(2個体分)2.4%

幅広い口縁部帯を形成し平行沈線を組合せて幾何学的文様を構成する。図14-1の下端にはわずかに単節の縄文が見られることから胴部以下は全面縄文施文であろう。3の口唇部には細かい刻目が施されている。

2類：単軸絡条体による横位平行の圧痕文が施されるもの(図14-4~7)(2個体)2.4%
2個体共軸に直径1.5mm程の極めて細かい撚紐を等間隔に巻きつけた原体を器面に押し当てることによって施文したものである。この場合、軸となるものは4、6、7が2段の撚紐一本、5が0段の撚紐を4~5本束ねたものを用いている。なお4には絡条体圧痕文直下に0段多条の単節縄文が施されている。また、前者の個体には口唇部上面に撚紐の圧痕が施文されている。

3類：頸部に太い貼付隆帯を1条器面に貼り付け、口縁部文様帯と胴部文様帯を区切るもの(図10-2)(1個体分)1.1%

貼付隆帯の幅は細い部分で1.0cm、広い部分で1.5cm(この箇所は指頭圧痕の部分)であり、隆帯上にはほぼ等間隔で指頭圧痕文が施される。この隆帯中には円筒下層a式に一般的に見られる植物性繊維の束は無い。図10-2ではこの隆帯の上下文様が0段多条のLR・RLの2原形結束(結束第1種)による羽状縄文である。構成は縦位である。

4類：縄の側面圧痕のもの(図10-1、図14~16)(19個体)23.1%

本類で使用される原体は種類が豊富である。これらは以下に再細分される。

4類a：LR・RLによる結束第一種の側面圧痕のもの(図14-8~13)(5個体)6%

文様の構成は8が6条以上の横位平行、9は粗な斜位、縦位の構成である。12は胴部の回転縄文に用いられているものと同一体である。他の個体も同様であろう。いずれも0段多条である。

4類b： $R < \frac{1}{L}$ あるいは $L < \frac{R}{R}$ の単節縄文の側面圧痕のもの(図10-1、図15-1~4)(4個体)4.9%

RLが3個体、LRが1個体である。図15-1は上下を2条横位の圧痕、その間を縦の圧痕で構成している。また2の基本構成は1と類似する。中間では縄を環にした側面圧痕である。

図10 - 1 は復原可能土器で口縁部に0段多条の $L < \frac{R}{L}$ の原体を縦位に、頸部には同一原体を横位に押しつけている。なお縦位のもは口唇部側で縄端を用いている。

4類c： $R < \frac{L}{R} \cdot L < \frac{R}{L}$ の直前段合燃の原体側面圧痕のもの（図15 - 5 ~ 12）（6個体）7.3%
5・11・12は $L < \frac{R}{L}$ と同一の表記であるが見かけが大きく異なる。11はLの節もRの節も大きさが近似するが、5・12（同一個体）は片方が極端に延びる。これは直前段の燃り方の違いによるものである。前者は直前段で極めて弱く燃るのに対し、後者は強く燃るため縄としては安定したものができ、Lに燃り戻しがかかり個々の節が極端に長くなる。文様は横位数条の平行のもの・縦位・横位を組合せるものがある。

4類d：直線段合燃の原体ではあるが直前段で3本の原体を使用した側面圧痕のもの（図15 - 13 ~ 16、図16 - 1、3）（4個体分）4.9%

いずれも0段多条であるが $R < \frac{L}{R}$ （図15 - 14）、 $L < \frac{R}{L}$ （図15 - 15）、 $L < \frac{R}{L}$ （図16 - 1）の違いがある。

直前段の燃り方は極めて緩く、方向の異なる1段の原体を束（Band1）に近いものである。また、図16 - 3のように、体部文様では異原体を $R < \frac{L}{R}$ を回転させ施文している。

文様構成は図16 - 3では口縁下部が曲線を、上部では縦位、斜位の平行圧痕である。口唇直下では縄端の側面圧痕となっている。

5類：指頭圧痕・縄端による馬蹄形状の圧痕・スタンプ状工具による圧痕が施されるもの（図10 - 3、図11 - 1 ~ 3）（5個体）6%

いずれも直前段合燃の側面圧痕との組合せである。図11 - 1は $R < \frac{L}{R}$ の回転文地に、同一原体による縦位の側面圧痕と指頭押文の組合せ、図16 - 2、4（同一個体）は直径2.4cmの円形のスタンプ状工具の圧痕文を口縁部直下に横位に巡らせたものである。図11 - 2は $R < \frac{L}{R}$ の側面圧痕と同一原体の縄端による馬蹄形状の圧痕文である。これは側面圧痕文を狭み上下2段に施文されている。

B：口縁部、胴部での文様上の区別を行わず、体部全体を同一原体で同一文様を施文するもの。これには原体の種類及び施文方法により以下の10類に細別できる。

1類：単軸絡条体の回転文が施されるもの（図16 - 5、図21 - 8）（1個体）1.1%

5は横位方向の回転で同じ箇所を数回重ねて施文している。縄の原体は比較的細いものを使用している。

2類：直前段反燃の縄文原体の回転文が施されるもの（図16 - 6 ~ 9）（1個体）1.1%
原体は $R < \frac{R}{L}$ で直前段の燃は緩い。全体的には軽く燃り戻しをかけた原体である。0段は3本以上の多条であろう。口唇部上面には爪状工具による刻目が施されている。

3類：単節縄文が施されるもの（図12 - 2、図17 - 1 ~ 13、図21 - 4、7）（10個体）12.1%

器面全体に同一原体による斜縄文が施されるもの(図17-1)や同一原体で縦位・横位と施文方向を変えて羽状を構成させるもの(図12-2、図17-11、12、13)羽状を目的として $R < \frac{L}{R}$ ・ $L < \frac{R}{L}$ の2種類の原体を使用し、同一方向に回転施文するもの(図17-3、10)がある。全て0段多条である。図17-5、11の2個体が口唇上端に同一原体による回転施文がみられる。

4類： $L < \frac{R}{L}$ 、 $R < \frac{L}{R}$ による結束第1種の回転文が施文されるもの(図12-1、図18-1～3、図21-2)(6個体)7.2%

異方向の原体結合のための回転縄文は羽状を呈するが、図18-1、2のように横位方向に羽状が転回するものと、図18-3、図12-1のように縦位方向のものがある。しかし後者の場合でも胴部以下は前者のように横位方向に段状施文される。全て0段多条である。

5類：直前段合撚の回転文が施文されるもの(図13、図18-4～14、図19、図20-1～14、図21-1、3、5、6)(34個体分)41.4%

この類は本群土器の主体を占める。しかしこの中には直前段の縄が2本、3本、4本のもがあり、しかも撚り方が強く、安定した縄になったものの回転施文や、撚りが極めて弱いため縄の束(Bundle)の回転施文に近いもの等、バラエティに富む。

5類a：撚りの方向の異なる $R \cdot L$ の2本を合撚した原体もの(図13-1、図18-4～14、図19-1～5、7～9、11、図20-1～5、図21-3、6)(24個体)29.2%

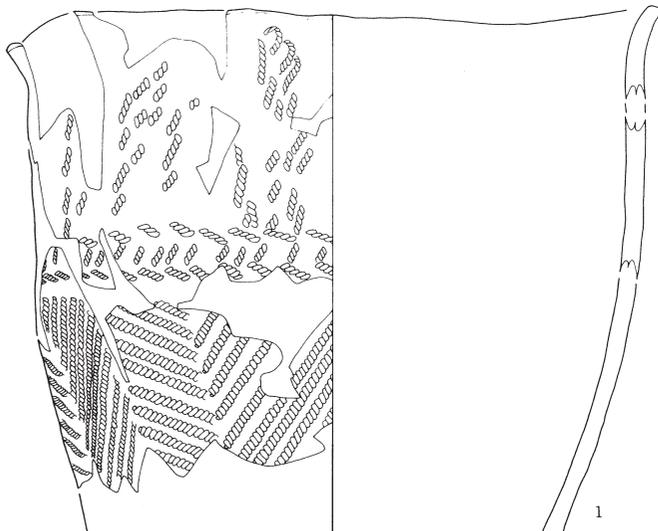
24個体は全て $R < \frac{L}{R}$ で、最終の撚りは R であり、逆の $L < \frac{R}{L}$ は無い。この場合1段目の R に撚り戻しを加えることによって $R < \frac{L}{R}$ の原体は極めて安定したものが可能であるが、本類の場合最後の撚りが弱いため、縄の束(bundle)の回転施文に似た文様となる。結果的には L の条 R の条が交互に現われ、しかも R の節が L の節よりやや延びたものとなる。綾杉状縄文(佐藤他：1958)と呼称されているものである。

5類b：1段の撚りを3本(2本は同方向の撚、他の1束は異方向の撚)用いた直前段合撚の原体を使用するもの。(図20-6～9)(4個体)4.9%

これには $R < \frac{L}{R}$ (3個体)、 $L < \frac{R}{L}$ (1個体)がある。6、7、9は $R < \frac{L}{R}$ で2条おきに R の圧痕が現われる。8は $L < \frac{R}{L}$ で撚りの方向が前者とは異なるが各々の節の太さに大きな違いがない。すなわち、 RR 、あるいは LL になった条では撚り戻しがほとんど行われていない。結果としては5類aのように原体の束(bundle)の回転に近いものと言える。これも綾杉状の文様をなす。

5類c：直前段に極めて強い撚りをかけるため、完全な撚り戻しが行われた原体を使用するもの(図13-2、図20-10、11、図21-1)(3個体)3.6%

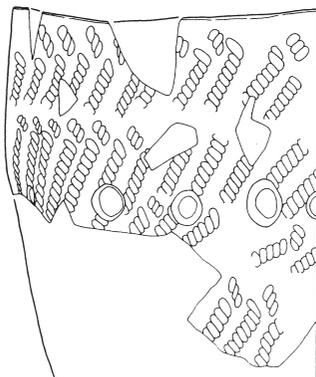
この場合、反撚となる条はそれ自体で節を構成しなくなり、段の異なる条との撚り合わせと同一になる。図13-2、図20-10、11の3個体は $R < \frac{L}{R} < \frac{R}{L}$ で結果的には $R < L < \frac{R}{L}$ の原体で



番 号：1
 地区・層位：ⅡC-96、Ⅲ層上
 時期・分類：ⅠA 4b類
 外面文様施文の特徴
 単節縄文・側面圧痕（縦位）
 縄端圧痕
 L < R
 登録番号：2



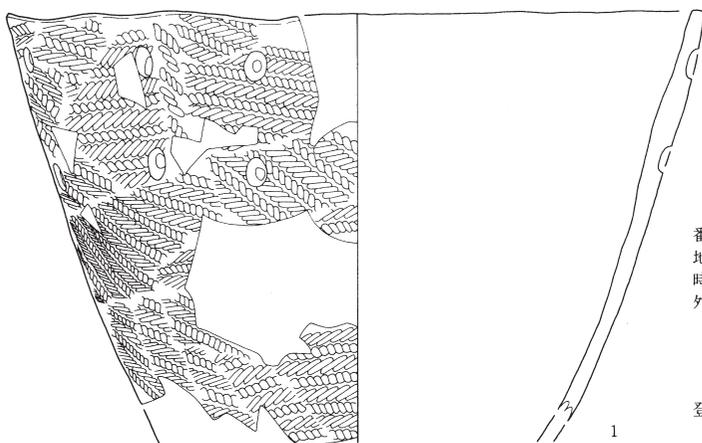
番 号：2
 地区・層位：ⅡC-96、Ⅲ層上
 時期・分類：ⅠA 3類
 外面文様施文の特徴
 貼付隆帯・指頭圧痕
 結束第1種縄文
 登録番号：17



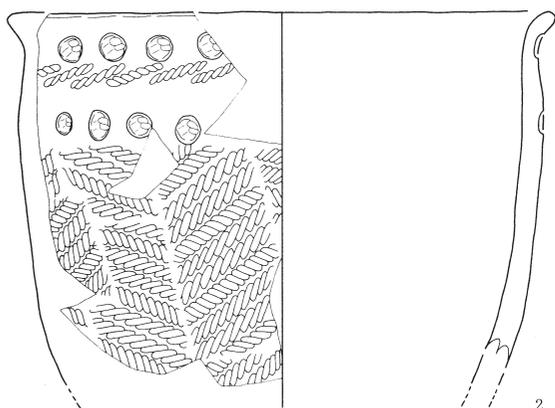
番 号：3
 地区・層位：ⅡA・ⅡB-93、ⅡC・ⅡD-96
 Ⅲ層上
 時期・分類：ⅠA 5類
 外面文様施文の特徴
 指頭圧痕
 結束第1種縄文
 登録番号：7



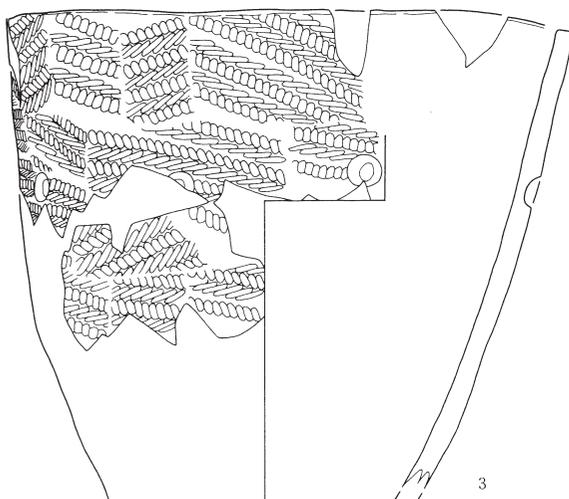
図10 遺構外出土土器（第Ⅰ群）



番 号：1
 地区・層位：II E-98・99、III層上
 時期・分類：I A 5
 外面文様施文の特徴
 指頭圧痕
 直前段合燃（綾杉状、O段多条）
 $R < \begin{matrix} L \\ R \end{matrix}$
 登録番号：8



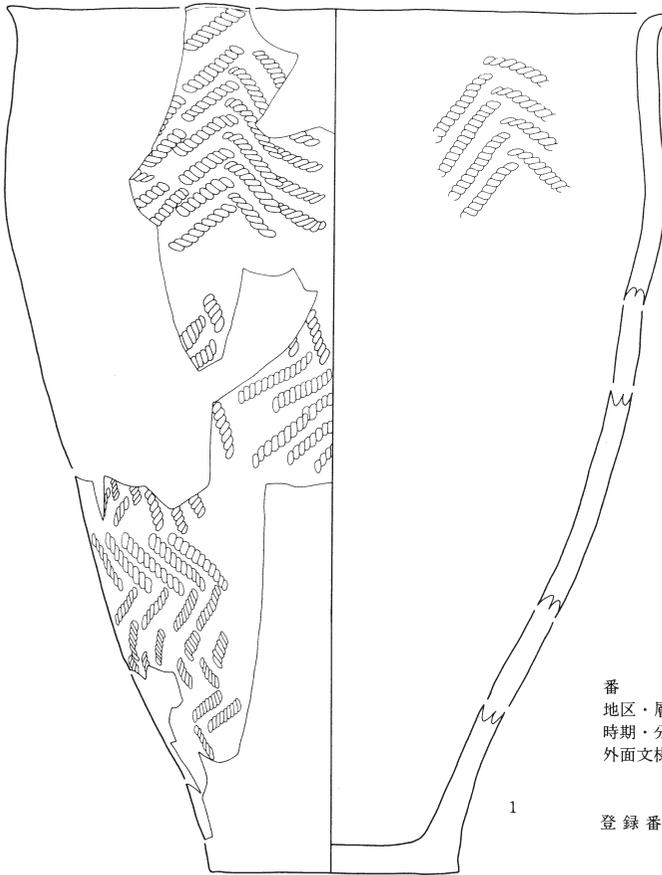
番 号：2
 地区・層位：II B-99、III層上
 時期・分類：I A 5
 外面文様施文の特徴
 指頭圧痕
 直前段合燃（綾杉状、O段多条）
 $R < \begin{matrix} L \\ R \\ R \end{matrix}$
 登録番号：18



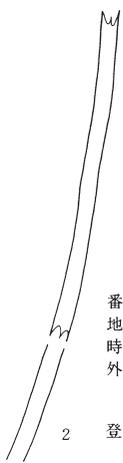
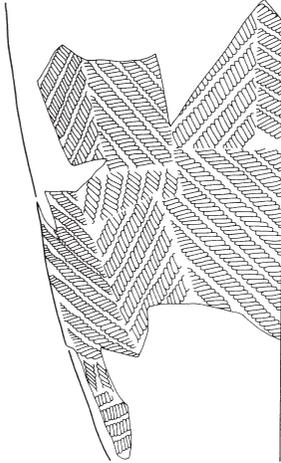
番 号：3
 地区・層位：II C-97、III層
 時期・分類：I A 5
 外面文様施文の特徴
 指頭圧痕
 直前段合燃（綾杉状）
 $R < \begin{matrix} L \\ R \end{matrix}$
 登録番号：3

0 10cm

図11 遺構外出土土器（第I群）



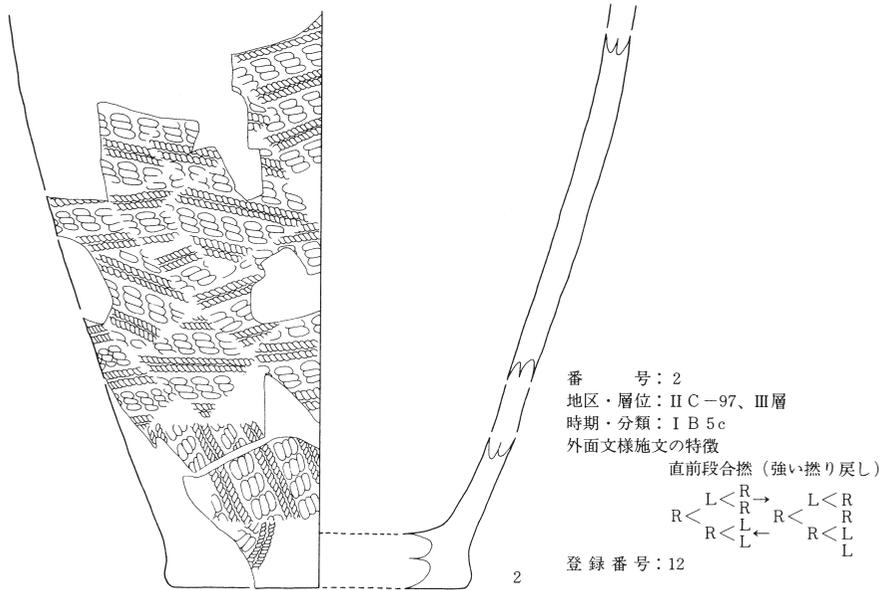
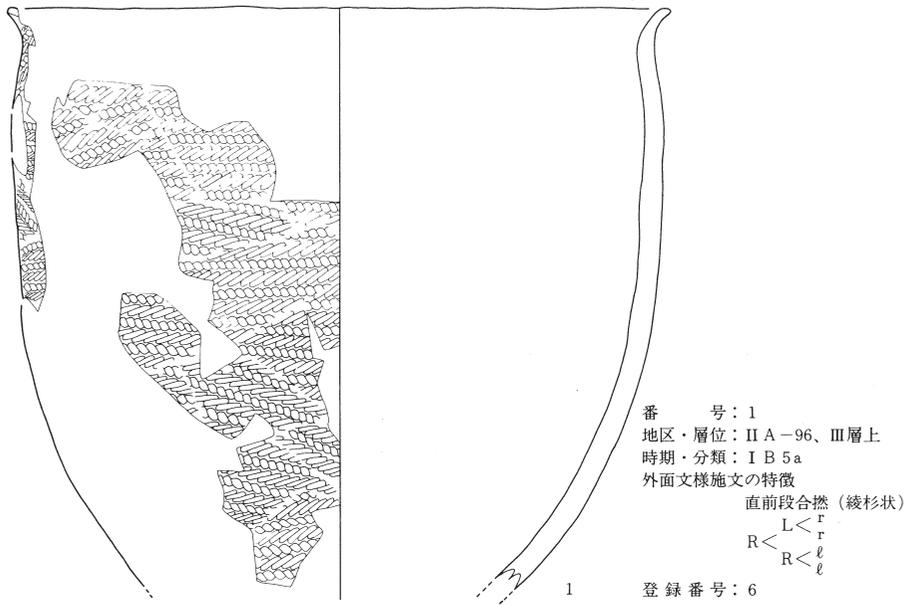
番 号：1
 地区・層位：II E-95、III層
 時期・分類：I B 4
 外面文様施文の特徴
 結束第1種（縦位・横位の羽状縄文）
 O段多条
 登録番号：5



番 号：2
 地区・層位：II B-94、III層上
 時期・分類：I B 3
 外面文様施文の特徴
 L < R 単節縄文
 (O段多条・菱形文構成)
 登録番号：9

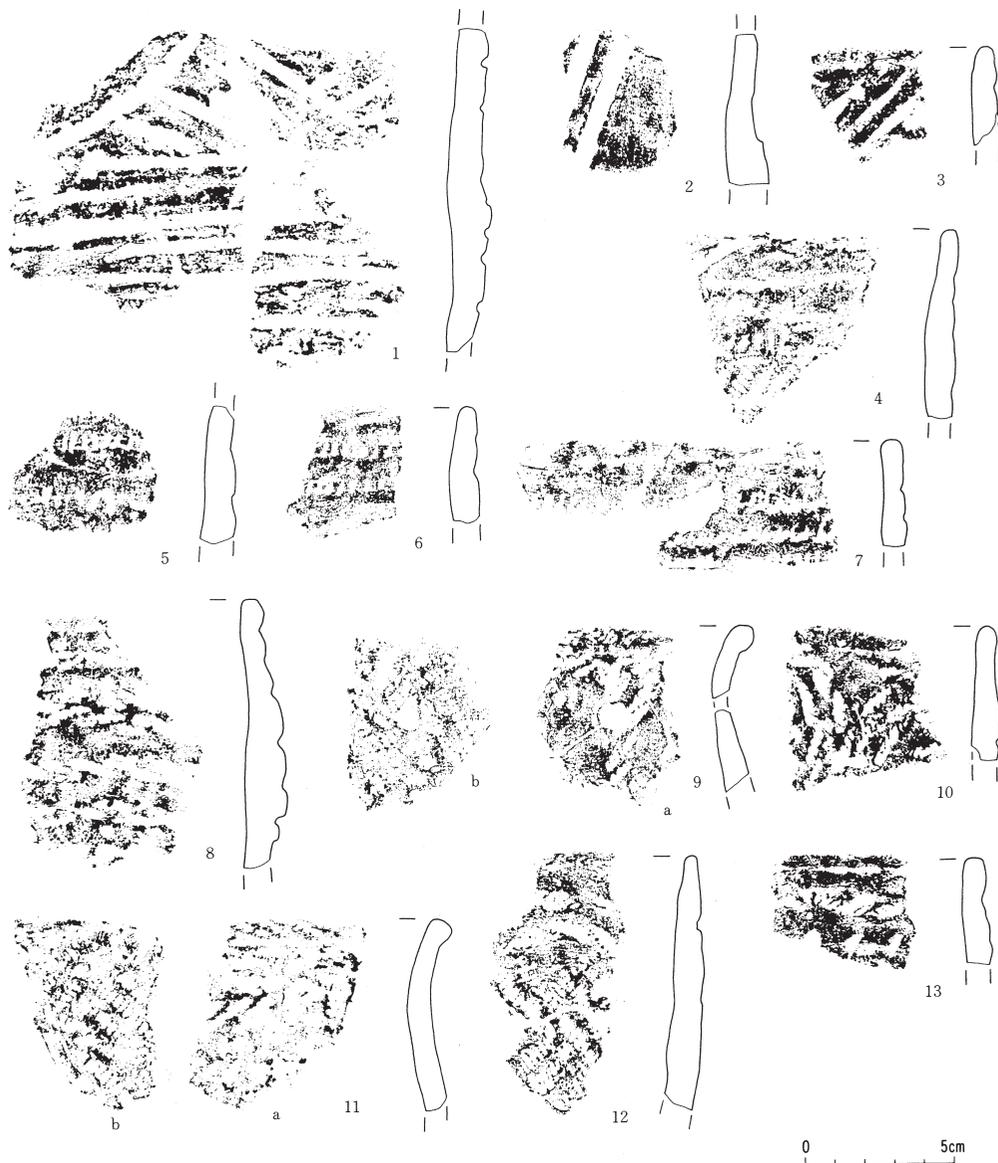
0 10cm

図12 遺構外出土土器（第I群）



0 10cm

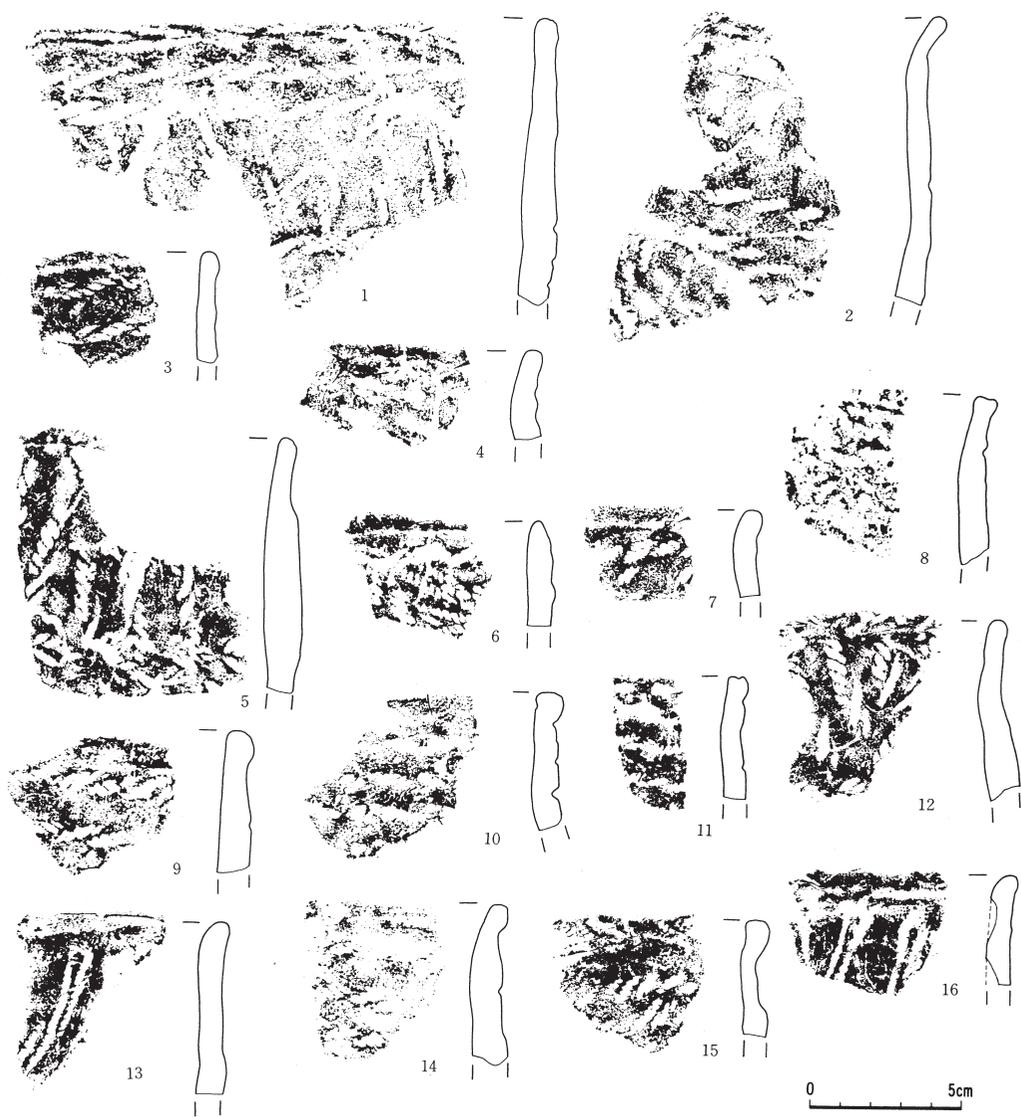
図13 遺構外出土土器（第I群）



土器観察一覽 No. 1

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	II E - 96・III層上	胴上	A1	沈線による幾何学文様	235
2	II G - 99・III層上	胴上	A1	沈線による幾何学文様	126
3	II D - 95・III層上	口縁	A1	沈線による幾何学文様	41
4	II F - 99・III層上	口縁	A2	絡条体压痕文 (LR縄文・O段多条)	159
5	II G - 100・III層上	胴	A2	絡条体压痕文	151
6	II G - 100・III層上	口縁	A2	絡条体压痕文	155
7	II F - 99・III層上	口縁	A2	絡条体压痕文	176
8	II B - 96・III層上	口縁	A4 a	結束第1種原体の側面压痕	231
9	II D - 95・III層上	口縁	A4 a	結束第1種原体の側面压痕	81
10	II F - 96・III層上	口縁	A4 a	結束第1種原体の側面压痕	20
11	II E - 95・III層上	口縁	A4 a	結束第1種原体の側面压痕	228
12	II F - 96・III層上	口縁	A4 a	結束第1種原体の側面压痕	58
13	II A - 101・III層上	口縁	A4 a	結束第1種原体の側面压痕	30

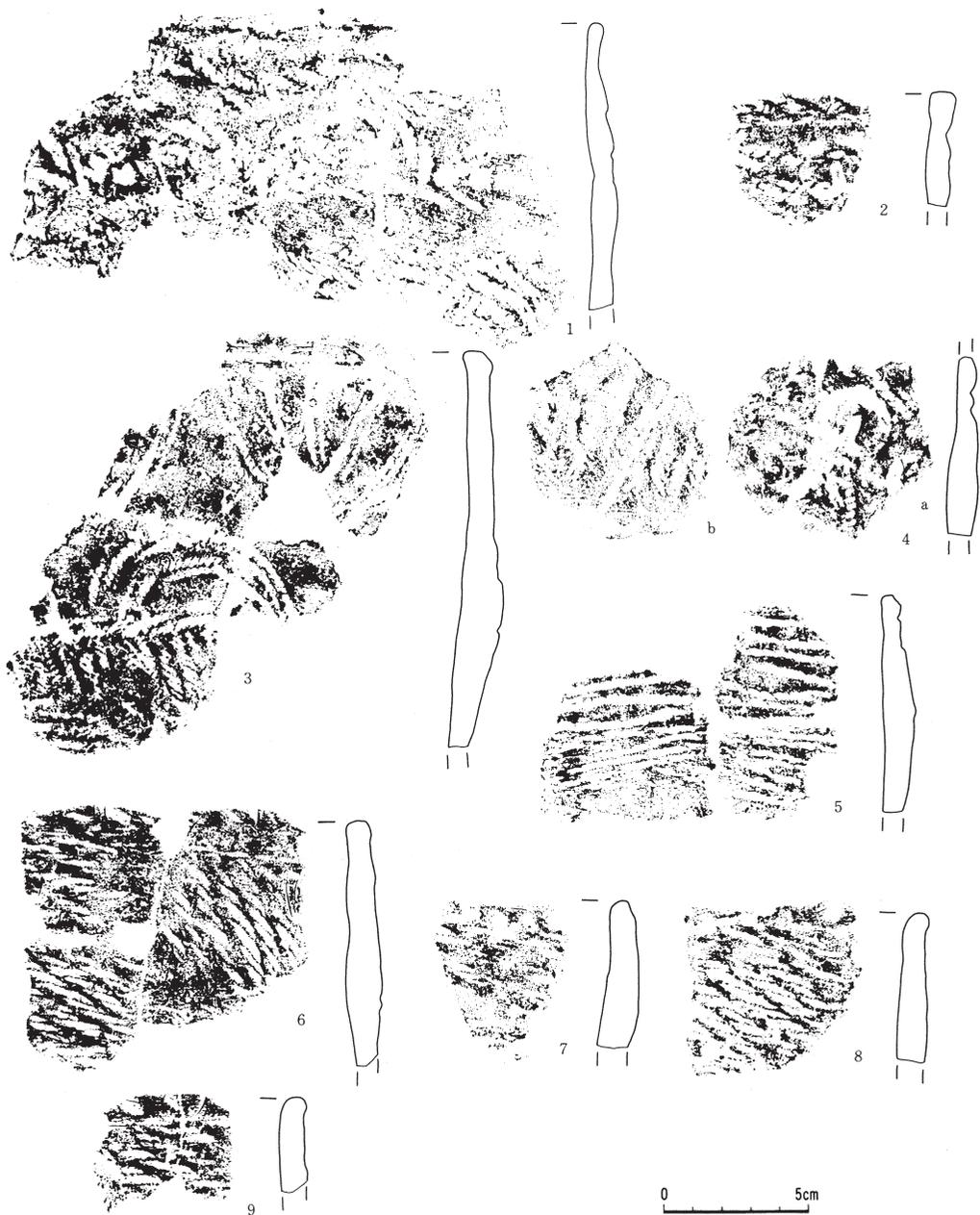
図14 遺構外出土土器 (第I群)



土器観察一覧 No. 2

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	IIB - 95・Ⅲ層上	口縁	A4b	R Lの側面圧痕	88
2	IIA - 101・Ⅲ層上	口縁	A4b	R Lの側面圧痕	83
3	IIG - 96・Ⅲ層上	口縁	A4b	R Lの側面圧痕	61
4	IIB - 94・Ⅲ層	口縁	A4b	L Rの側面圧痕	98
5	IIG - 100・Ⅲ層上	口縁	A4c	$L < \frac{R}{L}$ の側面圧痕 (直前段合捺・強い撚り反し)	91
6	IIC - 97・Ⅲ層	口縁	A4c	$R < \frac{L}{R}$ の側面圧痕 (直前段合捺)	32
7	IIF - 97・Ⅲ層上	口縁	A4c	$R < \frac{L}{R}$ の側面圧痕 (直前段合捺)	50
8	IIC - 98・Ⅲ層	口縁	A4c	$L < \frac{R}{L}$ の側面圧痕 (直前段合捺・強い撚り反し)	230
9	IIG - 96・Ⅲ層上	口縁	A4c	$R < \frac{L}{R}$ の側面圧痕 (直前段合捺)	272
10	IIG - 99・Ⅲ層上	口縁	A4c	$L < \frac{R}{L}$ の側面圧痕 (直前段合捺・強い撚り反し)	8
11	IID - 97・Ⅲ層	口縁	A4c	$L < \frac{R}{L}$ の側面圧痕 (直前段合捺)	47
12	IIG - 100・Ⅲ層上	口縁	A4c	$L < \frac{R}{L}$ の側面圧痕 (直前段合捺・強い撚り反し)	52
13	IIE - 96・Ⅲ層	口縁	A4d	直前段3本の合捺原体の側面圧痕	224
14	IIG - 96・Ⅲ層上	口縁	A4d	直前段3本の合捺原体の側面圧痕	229
15	IID - 97・Ⅲ層	口縁	A4d	直前段3本の合捺原体の側面圧痕	21
16	IIE - 96・Ⅲ層上	口縁	A4d	直前段3本の合捺原体の側面圧痕	22

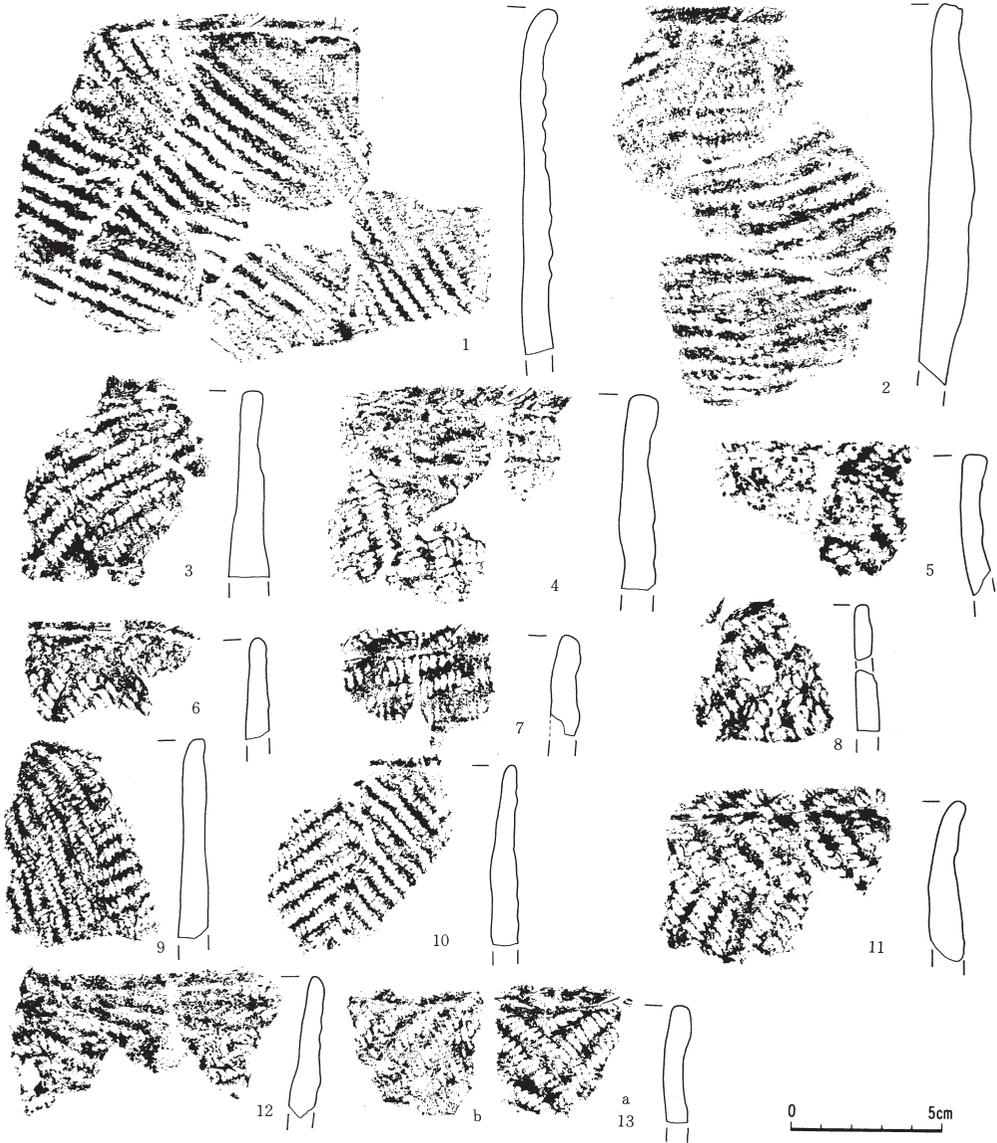
図15 遺構外出土器 (第I群)



土器観察一覧 No. 3

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	II G-100・III層上	口縁	A4d	直前段合摺(3本)の側面圧痕(O段多条)	298
2	II E-98・III層上	口縁	A5	直前段合摺回転文地に円形スタンプ状圧痕	15
3	II E-96・III層	口縁	A4d	直前段合摺圧痕文・回転文(O段多条)	225
4	II E-98・III層上	胸部	A5	直前段合摺回転文地に円形スタンプ状圧痕	169
5	II F-96・III層上	口縁	B1	単軸絡条体回転文(第1類)	237
6	II D-96・III層上	口縁	B2	直前段反摺(O段多条)(口唇部刻目)	90
7	II E-96・III層	口縁	B2	直前段反摺(O段多条)	241
8	II C-96・III層上	口縁	B2	直前段反摺(O段多条)	240
9	II D-95・III層上	口縁	B2	直前段反摺(O段多条)	94

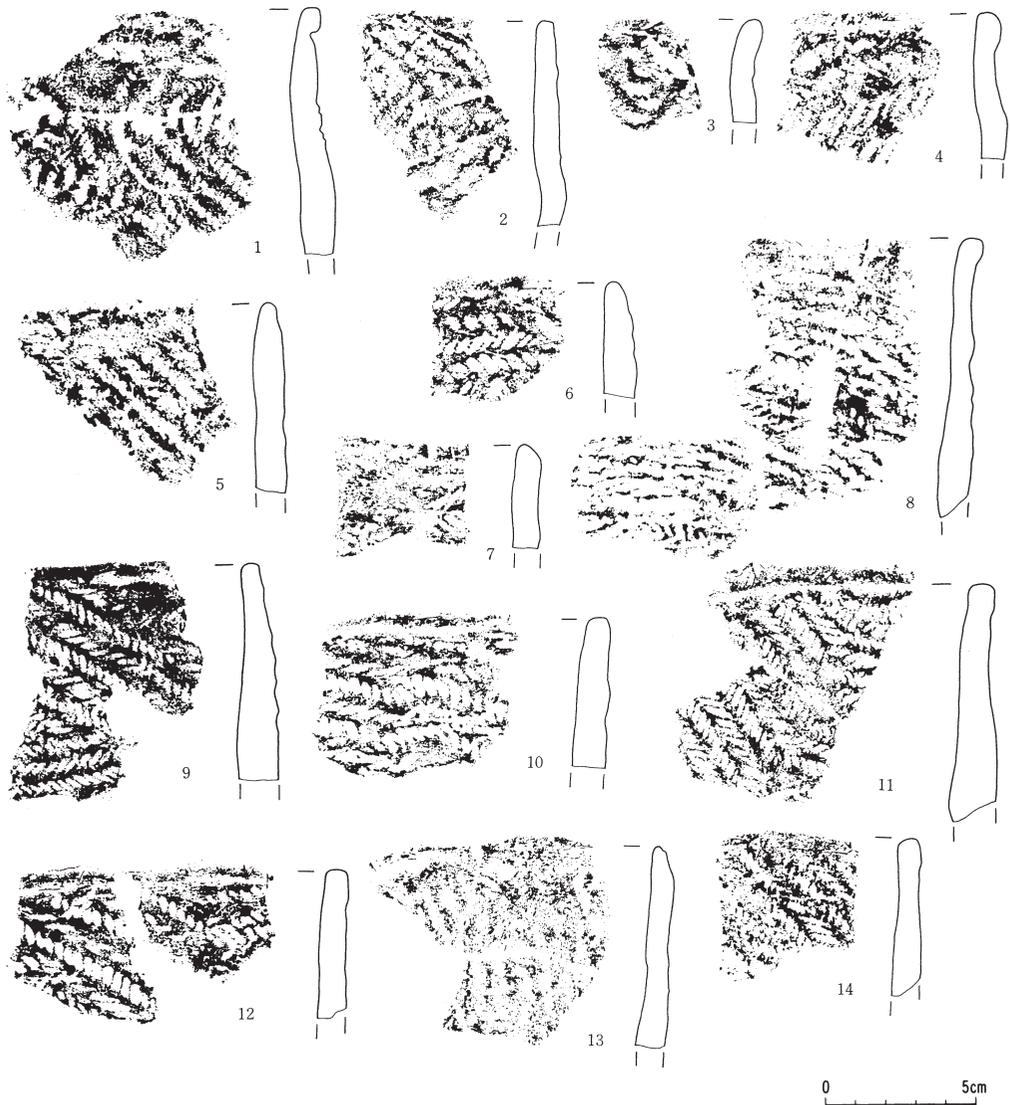
図16 遺構外出土土器(第I群)



土器観察一覧 No. 4

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	IIG-96・Ⅲ層上	口縁	B3	L R単節縄文 (O段多条)	71
2	IIE-95・Ⅲ層上	口縁	B3	R L単節縄文 (O段多条)	105
3	IIC-97・Ⅲ層上	口縁	B3	L R単節縄文 (O段多条)	6
4	IS-98・Ⅲ層上	口縁	B3	R L単節縄文 (O段多条)	75
5	IIG-100・Ⅲ層上	口縁	B3	L R単節縄文	80
6	IS-98・Ⅲ層上	口縁	B3	L R単節縄文 (O段多条)	85
7	IS-98・Ⅲ層上	口縁	B3	L R単節縄文 (O段多条)	100
8	IIE-96・Ⅲ層上	口縁	B3	L R単節縄文 (O段多条)	5
9	IIA-94・Ⅲ層	口縁	B3	L R・R Lの2種類の原体による羽状縄文 (O段多条)	9
10	IIA-94・Ⅲ層上	口縁	B3	L R・R Lの2種類の原体による羽状縄文 (O段多条)	99
11	IIG-100・Ⅲ層上	口縁	B3	L R単節縄文 (O段多条)	53
12	IIC-97・Ⅲ層	口縁	B3	R L単節縄文 (O段多条)	55
13	IS-98・Ⅲ層上	口縁	B3	R Lの原体による羽状縄文	

図17 遺構外出土土器 (第I群)



土器観察一覽 No. 5

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	ⅡF-96・Ⅲ層上	口縁	B4	結束第1種 (O段多条)	97
2	ⅡC-97・Ⅲ層	口縁	B4	結束第1種 (O段多条)	67
3	ⅡD-97・Ⅲ層	口縁	B4	結束第1種 (O段多条)	45
4	ⅡF-96・Ⅲ層上	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	7
5	ⅡD-97・Ⅲ層	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	11
6	ⅡG-98・Ⅲ層	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状)	34
7	ⅡA-99・Ⅰ層	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状)	18
8	ⅡE-99・Ⅱ層上	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	236
9	ⅡB-97・Ⅲ層	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	37
10	ⅡF-96・Ⅲ層上	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状)	26
11	ⅡF-97・Ⅲ層上	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	16
12	ⅡF-96・Ⅲ層上	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状)	86
13	ⅡA-103・Ⅲ層上	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	89
14	ⅡF-96・Ⅲ層上	口縁	B5a	直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	13

図18 遺構外出土土器 (第I群)



土器観察一覧 No. 6

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	II F - 97・III層上	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	51
2	II F - 96・III層上	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状)	25
3	II C - 97・III層上	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	63
4	II E - 100・III層	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	84
5	II G - 97・III層	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状)	92
6	II G - 99・III層上	口縁	B5e	直前段合摺 (4本摺・綾杉状)・裏面刺突文	102
7	II D - 98・III層	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	60
8	II A - 97・III層	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	10
9	II E - 99・III層	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	54
10	II F - 96・III層上	口縁	B5e	直前段合摺 (4本摺・綾杉状)	103
11	II F - 97・III層上	口縁	B5a	$R < \frac{L}{R}$ 直前段合摺 (綾杉状)	65
12	II F - 97・III層上	口縁	B5e	直前段合摺 (4本摺・綾杉状)	42

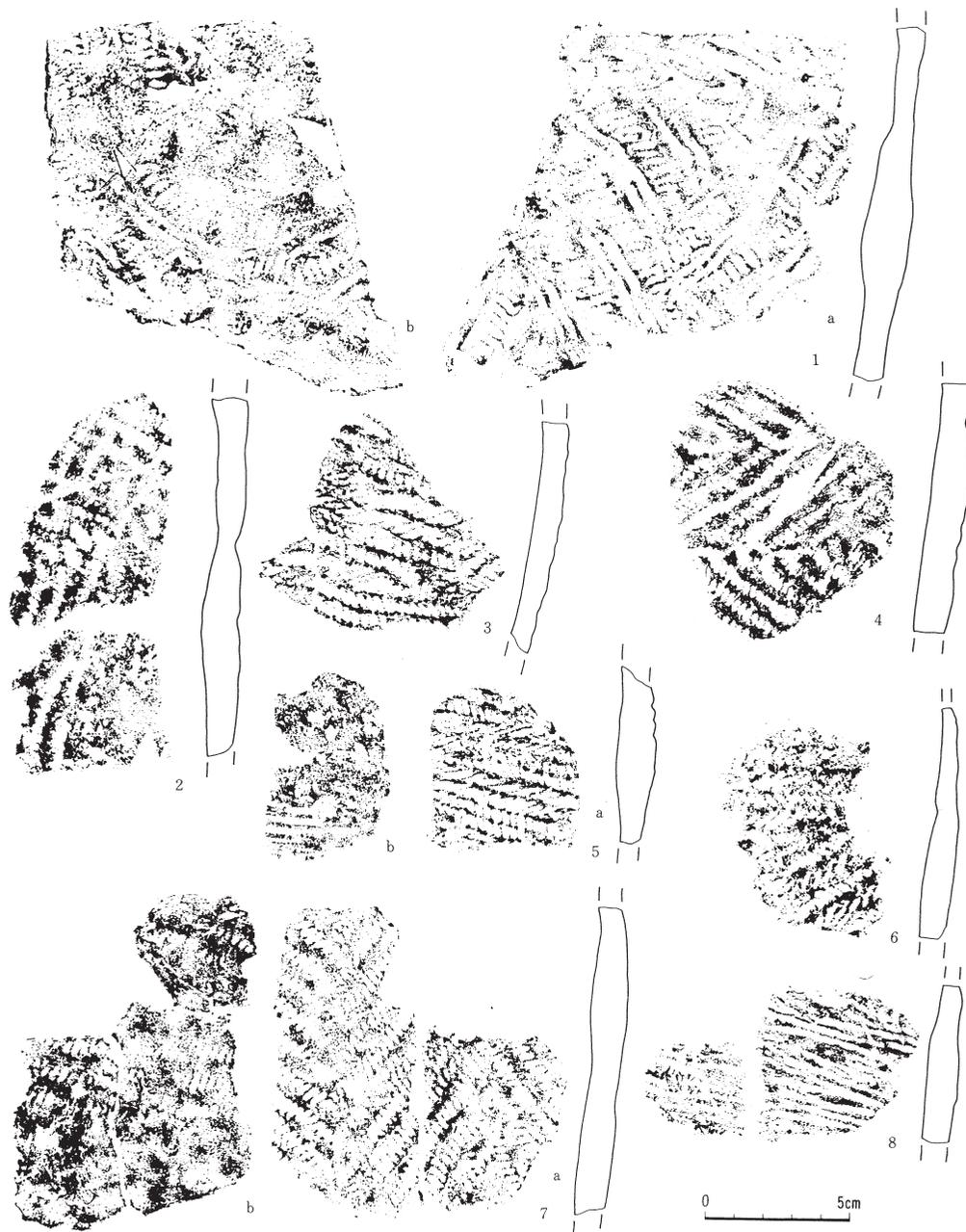
図19 遺構外出土器 (第I群)



土器観察一覽 No. 7

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	II F - 97・III層上	口縁	B5a	R < $\frac{1}{2}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	36
2	II D - 99・III層	口縁	B5a	R < $\frac{1}{2}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	104
3	II A - 99・III層	口縁	B5a	R < $\frac{1}{2}$ 直前段合摺 (綾杉状)	101
4	II F - 96・III層上	口縁	B5a	R < $\frac{1}{2}$ 直前段合摺 (綾杉状)	40
5	II E - 99・III層上	口縁	B5a	R < $\frac{1}{2}$ 直前段合摺 (綾杉状・O段多条)	64
6	II E - 98・I層	口縁	B5b	直前段合摺 (3本摺・綾杉状)	35
7	II D - 98・III層	口縁	B5b	直前段合摺 (3本摺・綾杉状)	46
8	II C - 101・III層上	口縁	B5b	直前段合摺 (3本摺・綾杉状)	76
9	II D - 95・III層上	口縁	B5b	直前段合摺 (3本摺・綾杉状)	59
10	II G - 100・III層上	口縁	B5c	直前段合摺 (強い摺り戻し)	27
11	II G - 100・III層上	口縁	B5c	直前段合摺 (強い摺り戻し)	62
12	II G - 100・III層上	口縁	B5d	直前段合摺 (前々段反摺・強い摺り戻し)	79
13	II B - 96・III層上	口縁	B5e	直前段合摺 (4本摺・綾杉状)	107
14	II G - 98・III層	胴	B5e	直前段合摺 (4本摺・綾杉状)	87
15	I T - 94・III層	口縁	B6	段の異なる原体	233

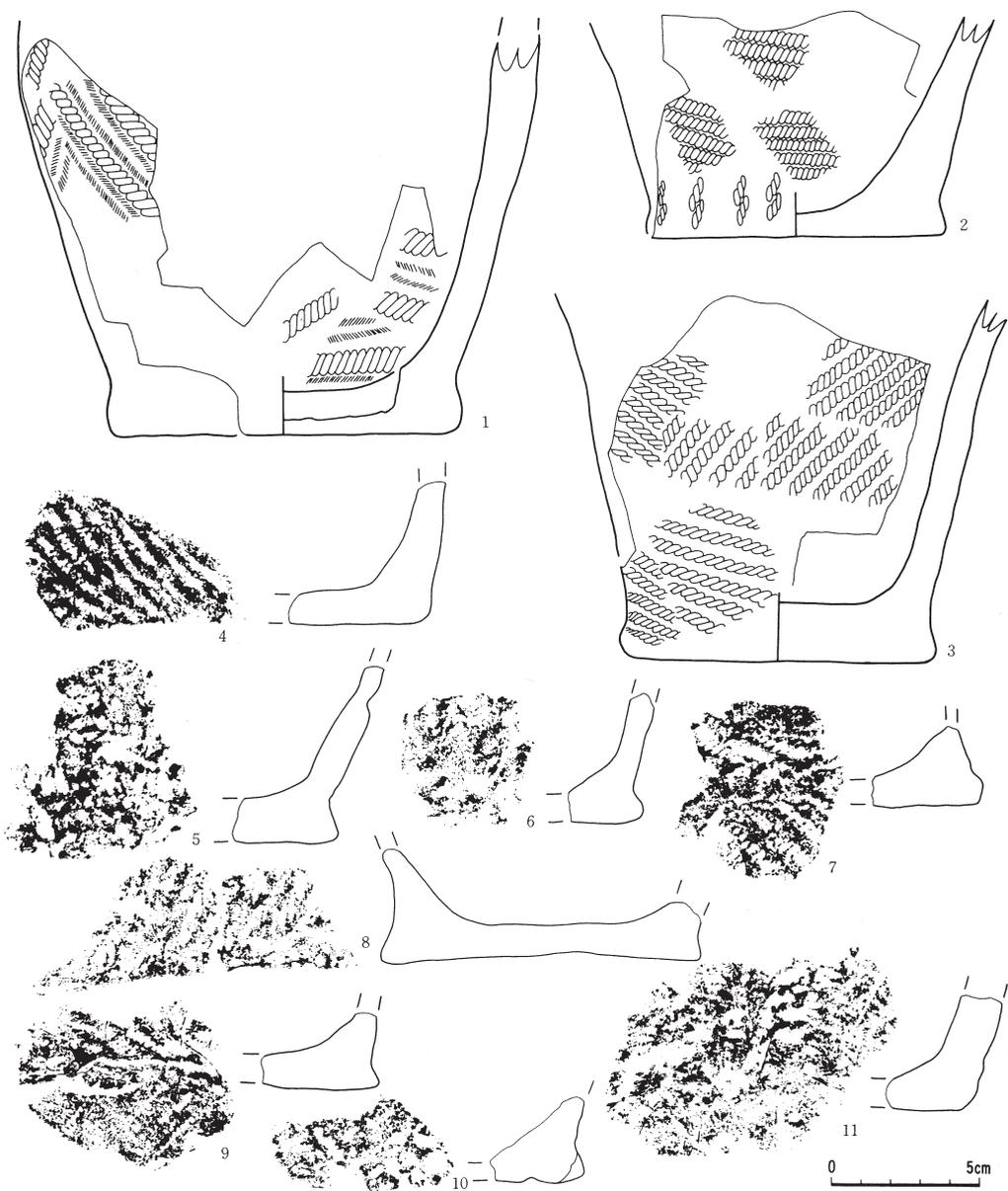
図20 遺構外出土土器 (第I群)



胴部片土器観察一覧

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	IIG-100・III層上	胴	B5c	直前段合捺(強い撚り反し)(内面同一施文)	186
2	IIA-101・III層上	胴	B4	結束第1種(羽状縄文)	219
3	IID-95・III層上	胴	B5a	直前段合捺(綾杉状縄文)	118
4	IIB-96・III層上	胴	B3	R L単節縄文(縄端回転文・同一原体による羽状縄文)	134
5	IIC-101・III層上	胴	B5e	直前段合捺(綾杉状縄文・4本の原体による)	165
6	IIE-99・III層上	胴	B5a	直前段合捺(綾杉状縄文)	275
7	IS-98・III層上	胴	B3	L R単節縄文(縦位の羽状縄文)	211
8	IIB-96・III層上	胴	B1	単軸絡条体回転文	135

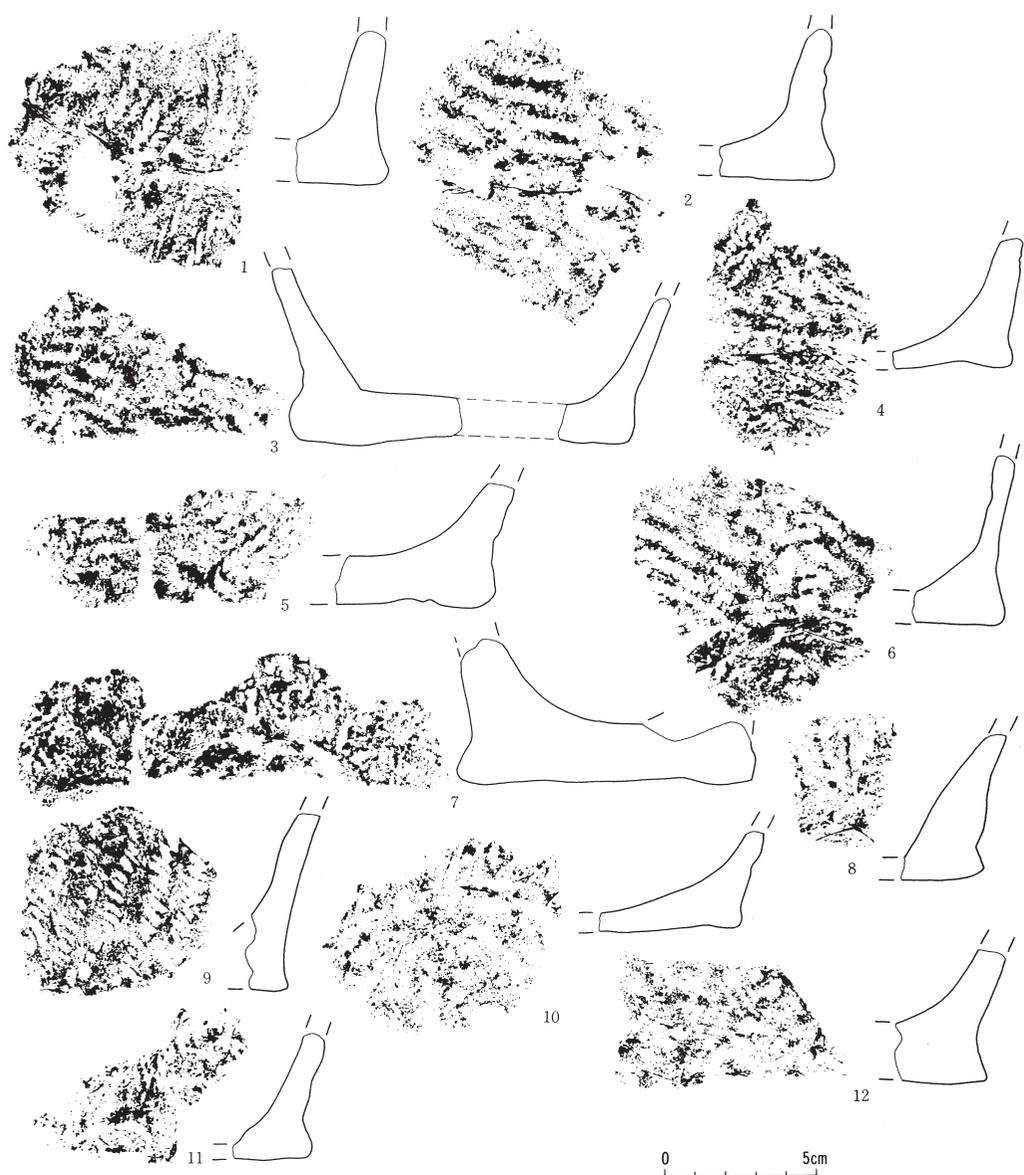
図21 遺構外出土土器(第I群)



底部土器観察一覧(1)

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	《底外面》	登録番号
1	II G-100・III層上	底部	I群	直前段合捺(前々段反捺・強い撚り反し)	《同一文様》	No.16
2	II G-100・III層上	底部	I群	L R単節・同一原体の側面圧痕	《無文》	No.15
3	II G-100・III層上	底部	I群	L R単節	《同一文様》	No.14
4	IID-97・III層	底部	I群	L R単節(0段多条)	《不明》	259
5	II F-97・III層上	底部	I群	縄文	《不明》	264
6	IID-98・III層	底部	I群	縄文	《無文》	265
7	IS-98・III層上	底部	I群	L R単節	《同一文様》	261
8	II E-99・III層上	底部	I群	直前段合捺(綾杉状)	《無文》	258
9	II C-98・III層上	底部	I群	縄文	《同一文様》	246
10	表採	底部	I群	縄文	《同一文様?》	257
11	II F-97・III層上	底部	I群	結束第1種	《不明》	249

図22 遺構外出土土器(第I群)



底部土器観察一覽(2)

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様	施文の特徴	〈底外面〉	登録番号
1	II E - 96・III層上	底部	I群	R $\frac{1}{2}$直前段合燃	(綾杉状)	《同一文様》	260
2	II C - 96・III層上	底部	I群	L R単節	(O段多条)	《同一文様》	250
3	II E - 98・III層	底部	I群	L R単節		《不明》	270
4	II B - 94・III層上	底部	I群	直前段合燃	(綾杉状)	《同一文様》	247
5	II A - 97・III層	底部	I群	直前段合燃	(綾杉状)	《同一文様》	266
6	II A - 93・III層	底部	I群	結束第1種		《同一文様》	274
7	II D - 100・III層上	底部	I群	縄文	(綾杉状?)	《同一文様?》	269
8	II C - 98・III層上	底部	I群	縄文			254
9	II B - 94・III層上	底部	I群	L R単節	(O段多条)	《同一文様?》	253
10	II A - 93・III層	底部	I群	結束第1種		《同一文様》	268
11	II D - 95・III層上	底部	I群	縄文		《不明》	262
12	II C - 97・III層	底部	I群	直前段合燃	(強い撚り返し)	《不明》	245

図23 遺構外出土器(第I群)

第 群土器 (図24 - 1)

縄文時代早期末葉から前期初頭にかけて位置づけられる土器である。東北地方北部の土器型式には存在しない土器である。

(1) 出土層位と出土状況

本群に属するのは図24 - 1の復原可能な1個体のみである。A - 99区を中心にC - 98区A - 98区等の極めて狭い範囲に分布していた。

出土層位は基本層序第層上面である。第群土器(早稲田5類相当)と一部は重なりあって出土した。本土器の出土地点には遺構がなく、土器も一括廃棄のような状況にあることから第群土器の廃棄と時間的にはほとんど差がないものと把握される。

(2) 胎土・焼成・成形

胎土中には細砂粒の混入があるが植物性繊維は認められない。細砂粒の中でも黒雲母の量が目立つ。また焼成は比較的良好と言える。

本土器の大きな特徴の一つに器厚の問題がある。口径3.5cm程の大型の土器にもかかわらず器厚は5mmと極めて薄手である。粘土帯の幅は2.5cm～3cmである。

(3) 器形と文様

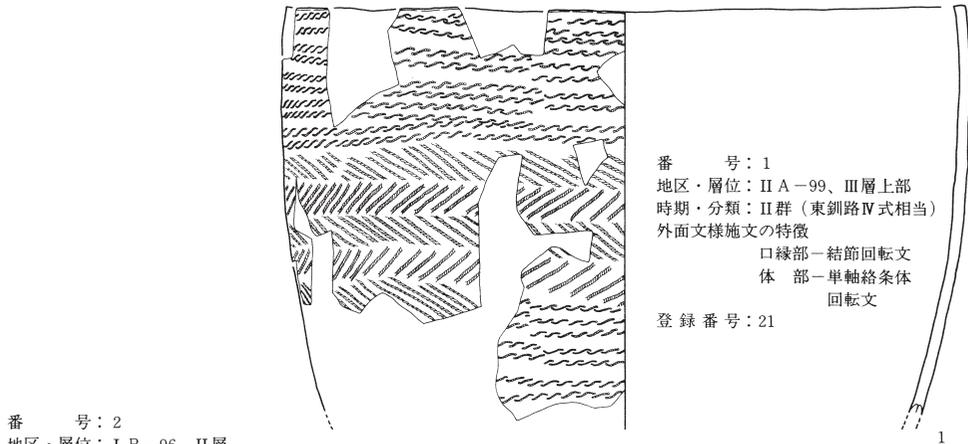
器形は口径35cmの大型の深鉢形である。胴下半部が欠損しており全体は知り得ないが、胴部中位から口縁部にかけては緩く内湾しながら立ち上がる。口縁部は平口縁である。

口唇部は軽く波打っているが波状口縁を意図したものではなく、粘土帯の調整時のものであろう。

外面文様は結節回転文(綾絡文)と絡条体回転文の組合せによる。口縁部には結節回転文が10条、土器面を巡る状態で施文されている。原体は極めて細い撚紐を用いた2条1単位の結節である。この結節回転文の帯は胴部中央にも認められる。

結節回転文間には単軸絡条体回転文による羽状縄文が充填される。原体は2種類使用される。一方は $R < \frac{l}{2}$ を単軸に右巻きしたもので、他方は縄は $R < \frac{l}{2}$ を用いるが左巻きしたものである。これらの原体を横位に交互に回転施文することによって文様は羽状をなす。この縄は極めて細いものを使用している。

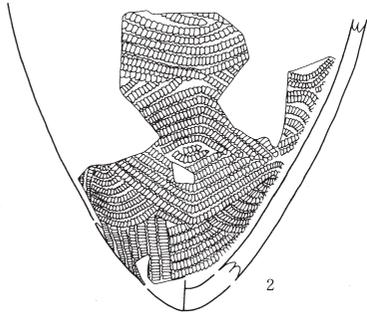
(三浦 圭介)



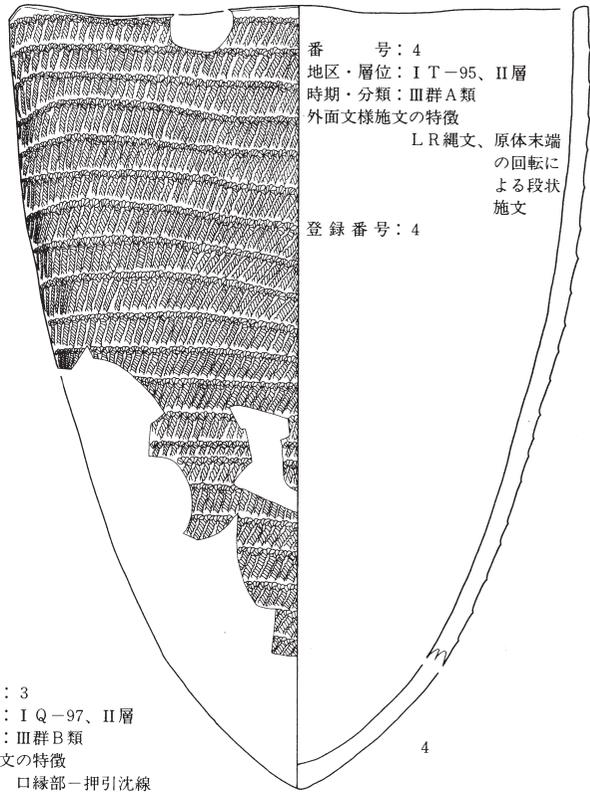
番 号：1
 地区・層位：II A-99、III層上部
 時期・分類：II群（東鉏路IV式相当）
 外面文様施文の特徴
 口縁部—結節回転文
 体 部—単軸絡条体
 回転文
 登録番号：21

1

番 号：2
 地区・層位：I R-96、II層
 時期・分類：III群C類
 外面文様施文の特徴
 全面押し沈線による幾何学文様
 登録番号：10



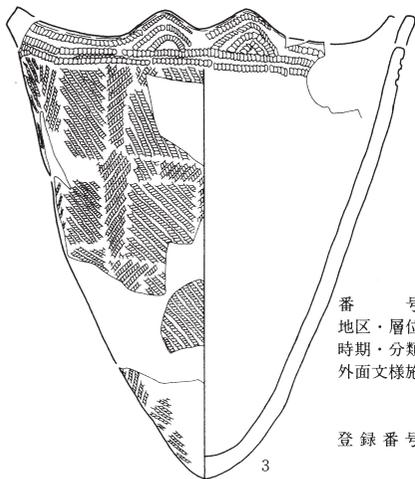
2



番 号：4
 地区・層位：I T-95、II層
 時期・分類：III群A類
 外面文様施文の特徴
 LR縄文、原体末端の回転による段状施文

登録番号：4

4



3

番 号：3
 地区・層位：I Q-97、II層
 時期・分類：III群B類
 外面文様施文の特徴
 口縁部—押し沈線
 体 部—LR縄文
 登録番号：1

0 10cm

図24 遺構外出土土器（第II群、第III群）

第 群土器

縄文時代前期初頭早稲田 6 類（佐藤他：1958）に相当するもので、一部では尾駁式、姉沼式（佐藤：1961）とも呼称されたものに類する土器群である。

（1）出土層位と出土状況

本群に属する個体数は少なく、4 個体分より出土していない。このうち 3 個体は復原可能なものである。

分布するのは I P ~ I T - 93 ~ 94 区の約 40m² の狭い範囲である。この地点は台地の上位面から北方に傾斜する緩斜面の中でもやや傾斜の強い地点でもある。出土層位は 層下部で、第群土器が包含される第 層上面とは 10cm ~ 20cm のレベル差がある。

（2）胎土・焼成

素地土は極めて均一的である。混入物としては少量の植物性繊維、砂がある。砂は 0.5mm 前後の細砂で 1 mm 以上の粗砂は含まない。また、植物性繊維は細いものを使用しておりしかも均一的に含まれる。

焼成は全体的に良好で、堅緻な焼き上がりとなっている。

（3）成形及び調整

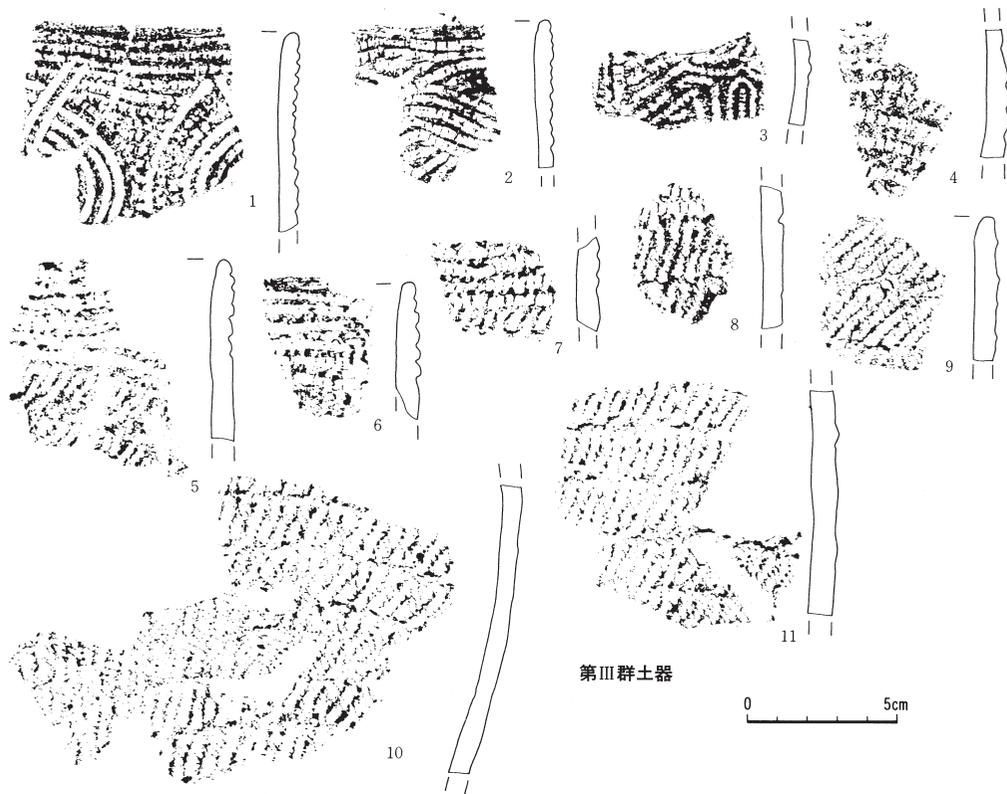
粘土帯の積み上げによる成形であるが、接合面の観察できる破片（図 25 - 7）からは幅 3 cm 程の粘土帯である。器厚は法量の大小にもよるが図 25 - 2、3 が小型で 0.5cm、図 24 - 4 がやや大型で 0.7cm である。個体の中での器厚の差はほとんどなく、均一的な成形である。

最終調整は器外面が文様施文となっているが内面は丁寧に磨かれている。この「磨き」は乾燥がある程度進行した段階で行われたとみられ、滑沢面が多く観察される。「磨き」の方向は口縁部内面が横位、他は縦位である。

（4）器 形

全体の形状は尖底の砲弾形をなす。平底は無い。底部先端から胴部への立ち上がりは緩く内湾し、図 24 - 4 が 17 度、3 が 16 度である。また、概ね、この傾斜角で口縁部に至る。

口縁部は平行縁と波状口縁がある。図 25 - 1、2、5、6 は平口縁であるが図 24 - 4 は緩い波状をなすようにも見える。意図的なものかどうか不明。図 24 - 3 は 2 個一対の山形突起を 4 単位有する。口唇部上面は全個体とも丸味のある成形を行っている。



第III群土器観察一覧

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	IIA-96・III層上	口縁	III C	竹管による押引沈線文	282
2	IS-96・III層上	口縁	III C	竹管による押引沈線文	285
3	IS-98・III層上	胴	III C	竹管による押引沈線文	288
4	IS-96・III層上	底部	III C	竹管による押引沈線文	287
5	IR-95・III層上	口縁	III B	押引沈線文とLRの縄端回転文(段状の帯縄文)	283
6	IR-95・III層上	口縁	III B	押引沈線文とLRの縄端回転文	280
7	IQ-97・III層上	胴	III B	押引沈線文とLRの縄端回転文	281
8	IQ-97・III層上	胴	III B	押引沈線文とLRの縄端回転文	284
9	IQ-97・III層上	口縁	III A	LRの縄端回転文(段状の帯縄文)	277
10	IS-95・III層上	胴	III Aor B	LRの縄端回転文(段状の帯縄文)	276
11	IS-95・III層上	胴	III Aor B	LRの縄端回転文(段状の帯縄文)	279

図25 遺構外出土土器(第III群)

(5) 施文文様

器表面の文様は縄文、竹管様工具による押引沈線文の2種類である。使用原体とその組合せにより以下の3類に細分される。

A類：口縁部から底部まで縄文が施文されるもの（図24 - 4、図25 - 9 ~ 11）。1個体

全面に0段多条のLRを帯状に施文したものである。特に原体の縄端を強く回転施文したもので帯と帯の間には2mm前後の粘土が紐状に盛り上がりを見せる。帯の幅は1.2cm ~ 1.5cmである。

B類：縄文と竹管様工具による押引沈線文の組合せによるもの（図24 - 3、図25 - 5 ~ 8）。2個体

図24 - 3は口縁部に3 ~ 4条の押引沈線文、胴部以下はLR縄文（0段多条）を施した略完形の土器である。口縁部には2個一対の山形突起が4単位用いられているが、押引沈線文はこの突起内にも充填されている。体部に用いられた縄文は縦位・横位の両回転を用い羽状を構成している。ただし、この羽状は整ったものではない。

図25 - 5の口縁部に6条の押引沈線文、体部にA類で見られたものと全く同一の縄端回転文が施されたものである。図25 - 4は底部片であるが図25 - 5と同一個体の可能性が高い。横位の段状の押引沈線である。

C類：器面全体に押引沈線だけを施文するもの（図24 - 2、図25 - 1、2）。2?個体

図24 - 2は器面全体に直径3.5mm程の竹管様工具の押し引きによる幾何学文様を描いたものである。文様は鋸歯状、大波状、弧状の組合せによるもので極めて整然としている。

（三浦 圭介）

第 群土器

縄文時代中期中葉に位置づけられる土器群である。円筒上層d式、円筒上層e式に相当する。

(1) 出土層位と出土状況

本群に属する個体数は第 群同様、極めて少ない3個体分より出土していない。このうち1個体は復原可能土器である。

分布は C ~ D - 108区（図26 - 2）、B - 108（図26 - 1）で出土層位は基本層序第 層中である。

(2) 胎土・焼成・成形

素地土の粒子は極めて均一的である。細砂の混入は認められるが植物性繊維の混入は無い。図26 - 1、2の2個体に混入された砂粒土には石英・雲母がやや多い。

焼成は2は良好で堅緻であるが1はやや軟質な仕上がりである。

成形は幅2.5cm前後の粘土帯の接合による。底部を下にした正立の状態での接合のため、各々の粘土帯では底部側で外方に粘土が延ばされている。

(3) 器形・文様

器形を知り得るのは1の1個体のみである。口縁部でやや外方に開くものの口径の割に高さがある。所謂「円筒形」をなす。

文様は縄文・粘土紐の貼付文・沈線文であるがいずれかの要素を欠くものもある。

A類：主体的文様が細い粘土紐の貼付により連続する凸レンズ状の文様をつくり上げている。

1個体

1は大突起を有する波状口縁の大型土器である。結束第1種による羽状縄文地に細い粘土紐を貼り付けて5段の連鎖する凸レンズ状の文様をつくり上げている。また外傾する口唇部上には撚紐の圧痕が施されている。

B類：主体的文様が沈線文によるもので文様は「胸骨」状をなすもの(図26-12)。1個体複節斜縄文地に2条1単位の沈線で「胸骨」状文様が構成されている。口唇部の外傾部分には小波状の粘土紐貼付文が見られる。

(三浦 圭介)



土器 観察 一覧

番号	地区・層位	部位	分類	外面文様施文の特徴	登録番号
1	II B-108・III層上	口縁	IV A	貼付隆帯・結束第1種縄文	No.19
2	II D-108・III層上	口縁	IV B	沈線による「胸骨文」・R L縄文	4

図26 遺構外出土器 (第IV群)

第2節 石 器

本遺跡から出土した石器は、大別して、剥片石器類113点、石斧類 6 点、礫石器類83点で、総数202点、このうち199点が遺構外からの出土である。その出土の平面的分布状態については図46～47に示してある。また、層位的な出土状態は、197点までが縄文時代早期末葉の遺物包含層である基本層序第 a 層中からの出土である。このほか、石器を作出する時に生じる剥片も約100点出土している。

剥片石器類

113点出土した。器種別では石鏃、尖頭器、石槍、石錐、石匙、石筥、不定形石器などがある。

A 石鏃 (図31 - 43 - 44 写真10 - 43 - 44) 以下、図版番号と写真番号は同一である。

2点出土した。いずれも柳葉に近い形状で長幅比が2 : 1以上の無茎鏃である。43は、火熱によって側縁の一部が焼けはじけている。2点とも欠損品であるが、長さ3cm以下、重さは3g以下である。石質は、いずれも珪質頁岩である。

B 尖頭器 (図31 - 40 - 42)

3点出土した。小形の石槍、大形の石鏃と似てその区分は難しく、分類にあたっては「北日本の石槍、石鏃について」(工藤 : 1977) のC類(長さ3.5～6.5cm、巾2.5cm前後、重さ4～8g)を参考にした。41は、縦長剥片の右側縁部に微細剥離調整を施し、刃部を作出している。主要剥離面は、無調整である。42は、背面に細かな調整剥離がみられるが、腹面調整は粗雑である。石質は、いずれも珪質頁岩である。

C 石槍 (図30 - 31 - 32 - 38)

7点出土した。うち完形品ないし略完形品は3点、欠損品は4点である。大形品(34～37)との小形品(32・33・38)があり、前者はすべて木葉形、後者は中間部残存品で形状は不明であるが、木葉形を呈すると思われる。34は欠損品であるが、長さは10cm以上、重さは40g以上で、剥片石器中最大である。器体の調整は、表裏面、両側縁とも他の4点よりは雑である。35は主要剥離面の調整が1側縁であり、背面も打瘤部分と基部周縁の調整が雑である。36は表裏面とも丁寧な調整剥離が施され器体を薄く仕上げているが、尖頭部に比べ基部の調整が新しい。これは、基部欠損後に再加工したと見られ、やや丸い刃部を作出していること、光沢があることから、石筥として使用した可能性がある。37は、前記3点よりはやや小形で、唯一有肩の石槍である。茎部分は約4.5cm、器厚も8mmと薄手でかなり丁寧な調整を加え、器体を薄く仕上げているが、先端部は打瘤の高まりを削除しきれずやや粗雑である。前者は工藤氏の石槍形態分類(工藤 : 1977)の2類に相当する。後者の32・33は中間部残存品で、割れ口を観察する限り人為的な折損と思われる。厚手の素材を使い、両面とも急峻な角度で調整を施している。石質は、いずれも珪質頁岩である。

D 石錐 (図33 - 51 ~ 52)

2点出土した。石鏃状の器体をもつものと(51)、縦長剥片の一端を細長く鋭利な刃部を作出したもの(52)がある。前者の刃部の主要剥離面には細かい調整剥離が施されている。後者は厚さ0.4cmと薄手で、刃部以外の周縁も調整している。ともに、刃部の摩耗は激しく、51は先端部を欠く。石質は、2点とも珪質頁岩である。

E 石匙 (図27 ~ 29 - 1 ~ 26)

33点出土した。完形品15点、破損品18点である、剥片石器の中では29.2%、定形石器の中では実に61.1%を占めている。石質はすべて珪質頁岩である。石匙は、つまみ状の基部と刃部の位置関係によって、縦型石匙と横型石匙とに分けられるが、本遺跡から出土した石匙はすべて縦型石匙である。その中で、刃部の形状により4類に大別できる。類：一側縁が内湾し、他の側縁が弧状に膨らむもの(1~10)である。10を除き先端部は鋭く尖っており、器体の背面調整もかなり急峻な剥離を施している。器体の稜線は中軸線より右側に片寄り、不等辺三角形形状を呈する。また、器体の左側、つまり弧状に膨らむ方の側縁には、真ん中より刃部先端にかけての中程に使用による刃コボレが見られるものが多い。本類では、13点中7点に見られる。また、弧状に膨らむ方の側縁の主要剥離面に調整を加えたものが2点(8・9)、腹面を全面調整しているものが1点(7)ある。つまみは中軸線からみて左側に反り気味につけられるものが5点ある。類：両側縁が弧状に膨らむもの(11~19・26)である。つまみと刃部先端がほぼ1直線になる。類と同様に断面形状は二等辺三角形形状を呈するが、器幅が類の平均16mmにたいし20mmと幅広である。また、類で観察できた側縁部の刃コボレは、本類ではやや位置を異にし、先端部において観察できるものが多い(15や19)、11は7と同じく腹面を全面調整している。つまみはほぼ中央につけられるが、若干左に反るものもある。類：両側縁が直線的であり、先端部が平坦なもの(20~25)である。ただし、本類は、いずれも先端部の折損後再調整を施しているものであり、本来は類の中に入るものもあると思われるが、幅広・扁平な点で区別した。つまみは中央につけられる。また、類に見られた主要剥離面の側縁に調整を加えたものが3点ある(20・23・24)。

F 石篋 (図29 - 27 ~ 31)

5点出土した。いずれも完形品であるが、石槍とした36と不定形石器の54は、石篋として使用された可能性が高い。5点とも形状は同じく、二等辺三角形であり、その底辺部に直線状の刃部が作出されている。いずれも、縦長剥片を素材としており、背面は全面調整、主要剥離面は、基部及び側縁部の調整がなされる。29は基端以外ほとんど無調整、他は両側縁に調整を施したものである。刃部は主要剥離面には、刃こぼれ(30)や光沢(28)など使用痕と考えられる痕跡をもつものがある。刃部角度は、40°~45°までであまり差はなく、平均は42°である。石質はすべて珪質頁岩である。

G 不定形石器 (図33～34 - 53～72)

不定形な剥片を素材として、これに調整を加えたものや使用痕の有るものを一括した。遺構内3点、遺構外58点出土した。これらは概ね3類に大別できる。類：連続した細部調整が施されているクレイパーの類で、24点出土した。この中で、39・53は石槍、54は石筥、55は尖頭器、56は石匙の破損品の可能性がある。類：剥片の形状をそのまま残し、周縁の一部に細部調整の見られるもので、22点出土した。類：使用痕の見られる剥片を一括する。肉眼観察では13点であるが、フレイク中にも含まれていると思われる。石質は、いずれも珪質頁岩である。

石斧類

H 石斧 (図32 - 45～50)

6点出土した。完形品2点、欠損品4点で、いずれも遺構外出土である。石斧は、類：磨製石斧と類：打製石斧に大別できるが、完形品の2点は後者、欠損品は前者で占める。45～48は、磨製石斧である。45は、断面が両凸刃で、極端な偏刃の縦斧である。基端を欠損しているが、研磨は入念におこなわれており、表裏面とも、面取りがなされている。稜をもった側縁には研磨後の潰し加工が見られ、着柄用に意図的に行われた可能性がある。46は片凸刃で、偏刃である。これも基部上半が欠損している。折損面は横斧的だが、刃縁右側のみに微細な刃こぼれがあり、縦斧として使用された可能性がある。器体は腹面が平坦なのに対して、背面は丸みをもっており、面取りの痕跡が著しい。石質は、輝緑凝灰岩である。47・48は、断面は楕円形である。これも刃部断面は両凸刃だが、48は偏刃である。両方とも粗い潰し整形のあとの研磨加工が刃面及び器体の一部にのみ行われている。49・50は、打製石斧である。49は、片面の両側縁及び刃部を剥離により整形しており、主要剥離面は左側縁のみの剥離調整である。筥のような形状で、トランシェ様石器にも似る。石質は、珪質頁岩である。50は、扁平礫の曲面の緩やかな部分を素材として打ち欠き、表皮面はほぼ無加工の状態で残し、破砕面を全面加工して斧としたものである。刃部先端には刃コボレ状の剥離がみられる。石質は、凝灰岩である。なお、表現の用語については、「石斧論 - 横斧から縦斧へ - 」(佐原：1977)から引用した。

礫石器類

遺構内2点、遺構外80点で総計82点出土した。大別して、敲磨器類、石皿・台石類、砥石に分けられる。

I 敲磨器類 (図35～41 - 1～56)

類：断面形状が三角形の自然礫の稜に細長い機能面(擦り面)をもつもので、三角柱状磨石と呼称されているものである。21点出土した。完形品7点、破損品14点である。石質は、安山岩15点、凝灰岩6点である。これらを、機能面の側縁部の調整痕によりさらに2分した。

a類：機能面の側縁に剥離を持たないもの(1～8)、b類：機能面の側縁に刃部を作出した剥離痕跡を持つもの(9～14)である。このうち、a類に属するものには、断面形状が三角形の

もの(1・3・5・7・8)や長円ないし楕円形状のもの(2・4・6)がある。b類に属するものには、機能面の1側縁に剥離をもつもの(13)、両側縁に剥離をもつもの(12・14)、図化できない位剥離が殆ど擦り減っているもの(9~11)がある。

類： 類以外で主要痕跡が擦りによるものを一括した。完形品28点、破損品2点の合計30点が出土した。石質は凝灰岩が1点のみで、他はすべて安山岩である。石器全体に占める割合は14.9%、礫石器中では36%である。形状および使用痕跡によりa~dに細分した。

a類：扁平ないし球形の自然礫の平坦面に擦った痕跡のみられるものを一括した。24点出土した。a₁類：片面のみ使用のものである(15~18)、5点出土した。このうち、側縁の一部に軽い敲打痕のあるもの(15・17・18)と側縁全面に擦りまたは軽い敲打痕があるもの(16)がある。

a₂類：両面使用のものである(19~32)、19点出土した。このうち、側縁部の使用痕跡から3タイプに分けられる。側縁の一部に軽い擦りおよび敲打痕があるもの(19~23)側縁の一部に擦りおよび敲きの複合痕跡があるもの(24・25)平坦面および側縁全面に擦りおよび敲打痕があるもの(26~32)である。この中で、26および27は、全面が擦りの機能面として使用された痕跡がある。

b類：扁平な棒状の礫の両端部に擦りの痕跡があるものである(33~35)、3点出土した。34の形状は、すりこぎ状である。

c類：やや分厚い円盤状の礫を用いたものである(36~38)、主要痕跡は擦りであるが、使用頻度は少ないと見られ、あまり摩滅していない。

類： 主要痕跡が敲きによるものを一括した(39~42)、4点出土した。39は、ハンマーにも似た形状で、かどばった稜に叩きの痕跡がある。40~42は、硬質の円礫を素材としている。40は、鉄石英、41・42はチャートで、敲きの主要面には擦った痕跡もあり敲き面が研磨された状態になっている。

類： 通常、凹石と称されるものである。16点出土した。凹のある面、個数、深さによって細分した。凹のある面は、片面のみ使用のものではなく、2面または3面である。凹み孔の個数は、1~2個であり、3個のものは無い、凹みの深さは、かなり深いものから敲打による荒れの状態で浅いものまでである。a類：両面使用で2個1対の凹部を有するものである。43の1点のみである。出土した16点中球形に近いものはこの1点だけである。第1号土壌から出土した。b類：両面使用で2個2対の凹部を有するものであり、両側縁の凹部とほぼ同位置に敲打痕か2条の線条痕を有するものである(44~49)、7点出土した。この中には、47のように明らかに擦りの作業によって、側縁に直交させて2条の凹みを作出した例もある。c類：両面使用で2個2対の凹部を有するものである(50~52)、4点出土した。b類のような側縁部に加工痕は見られないが、軽い荒れ程度の痕跡は観察できる。d類：3面使用で2個2対の凹部を有し、3稜に敲打痕ないし線条痕を有するものである(53~54)、2点出土した。いずれも破損品であるが、明

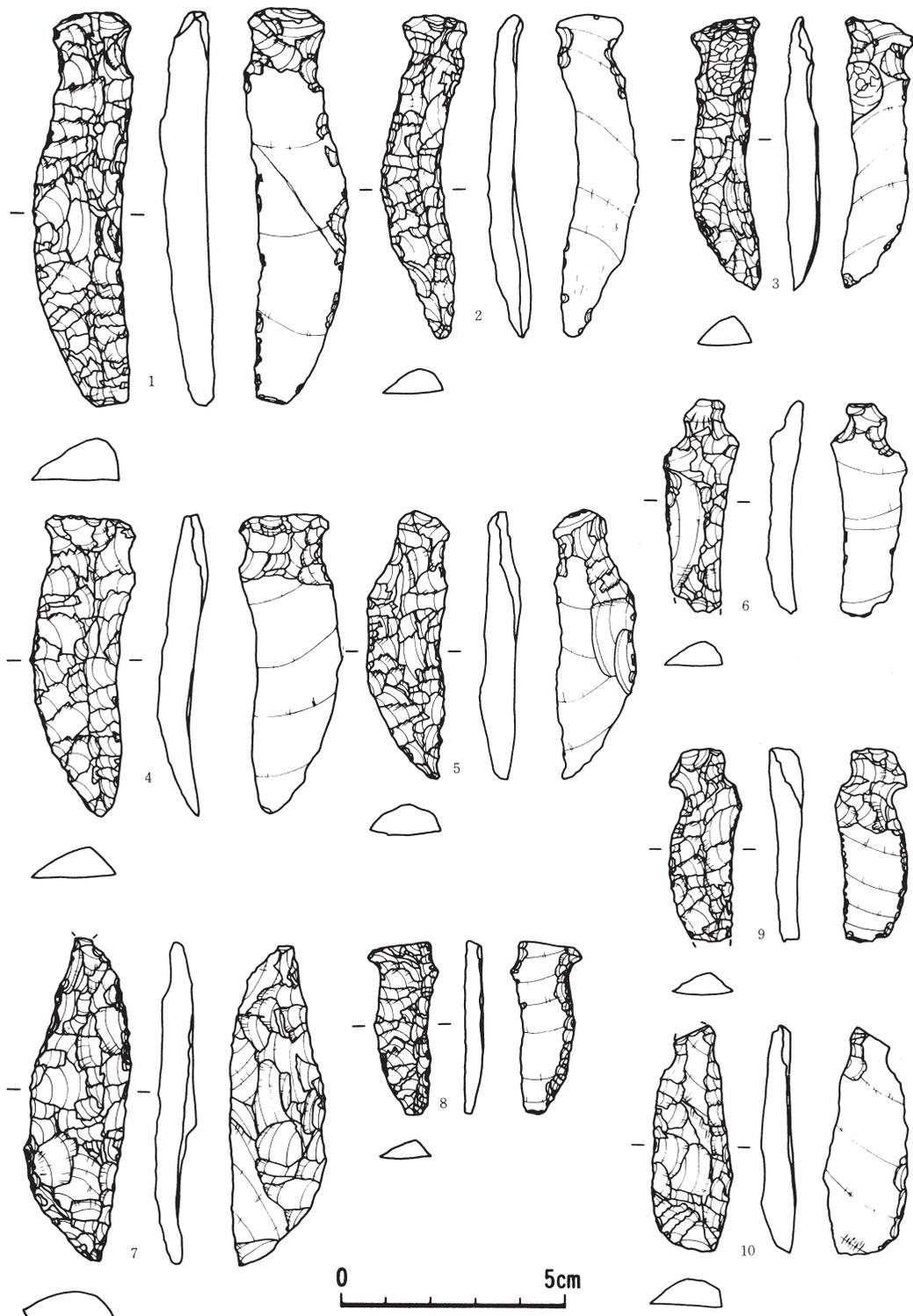


图27 石 器 1 (石匙 1~10)

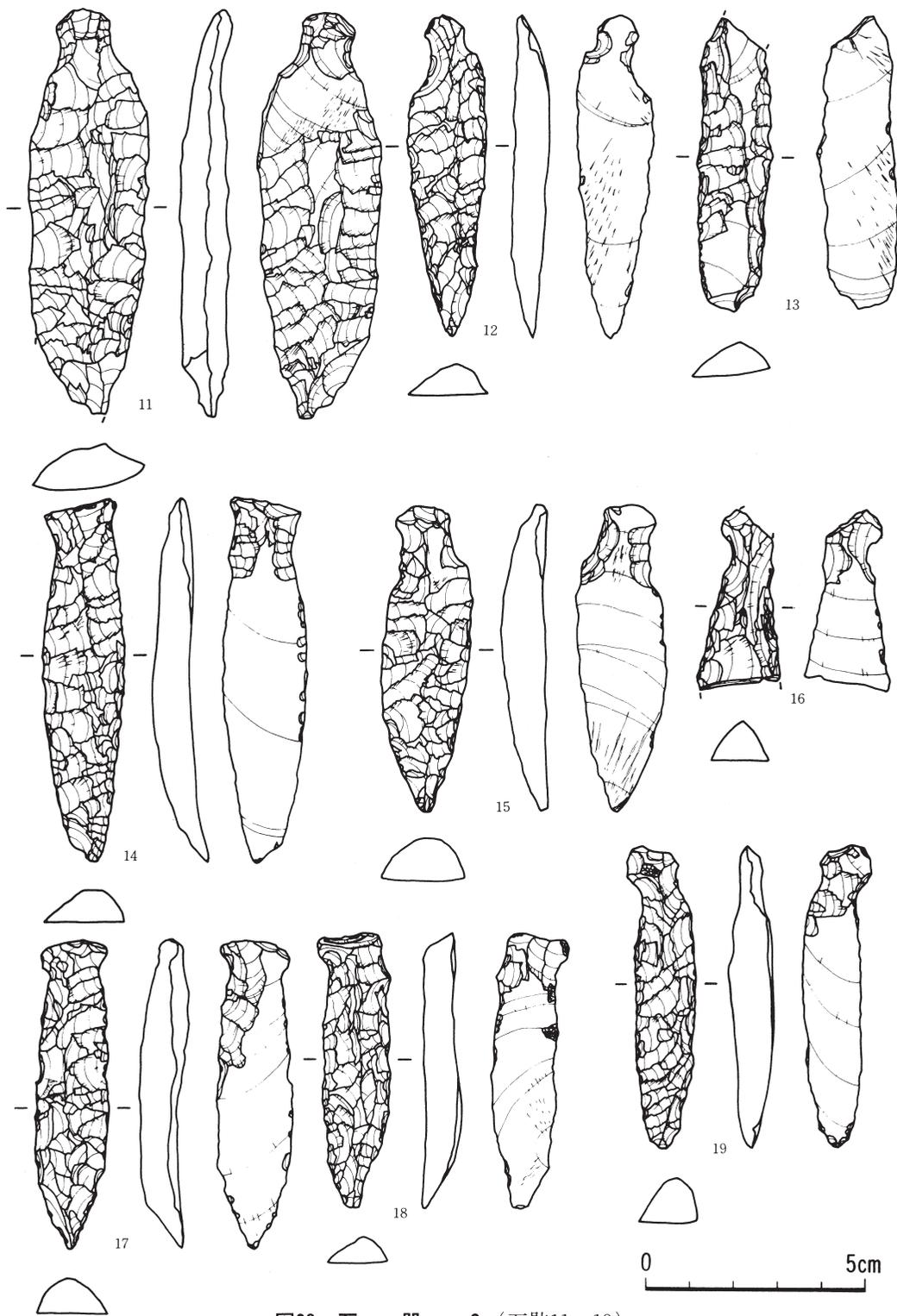


图28 石 器 2 (石匙11~19)

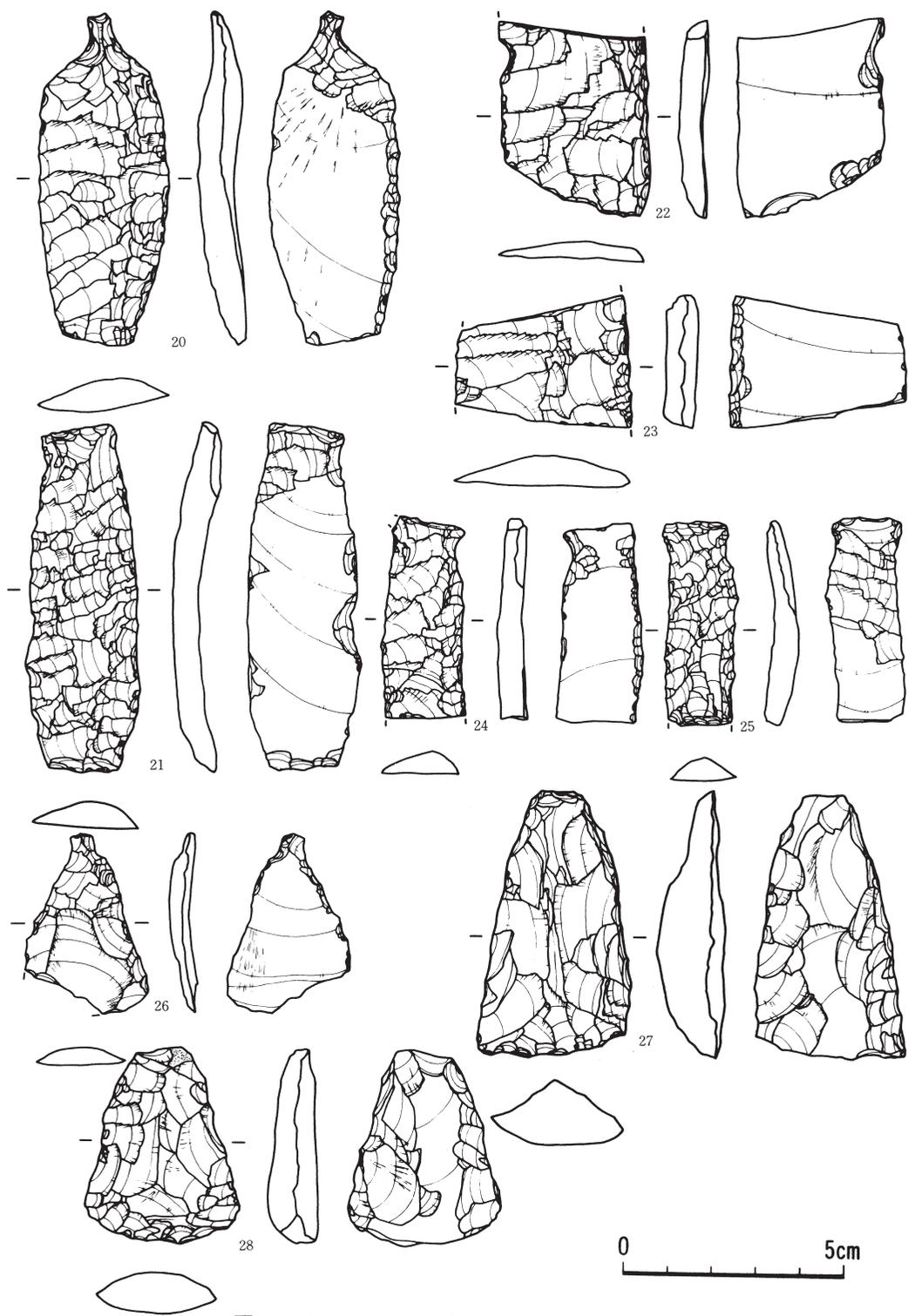


图29 石器 3 (石匙20~26、石篔27~28)

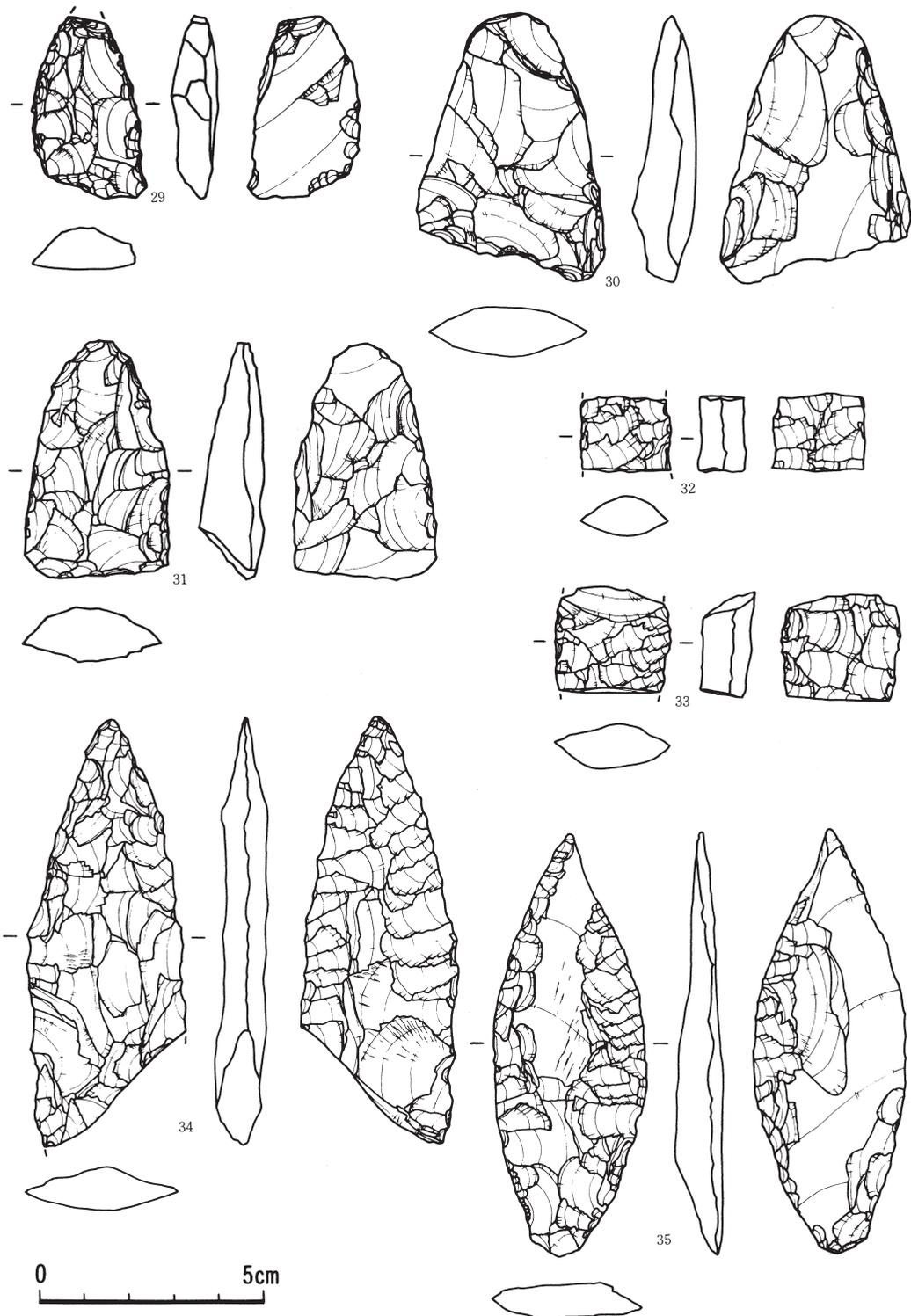


图30 石器 4 (石斧29~31、石枪32~35)

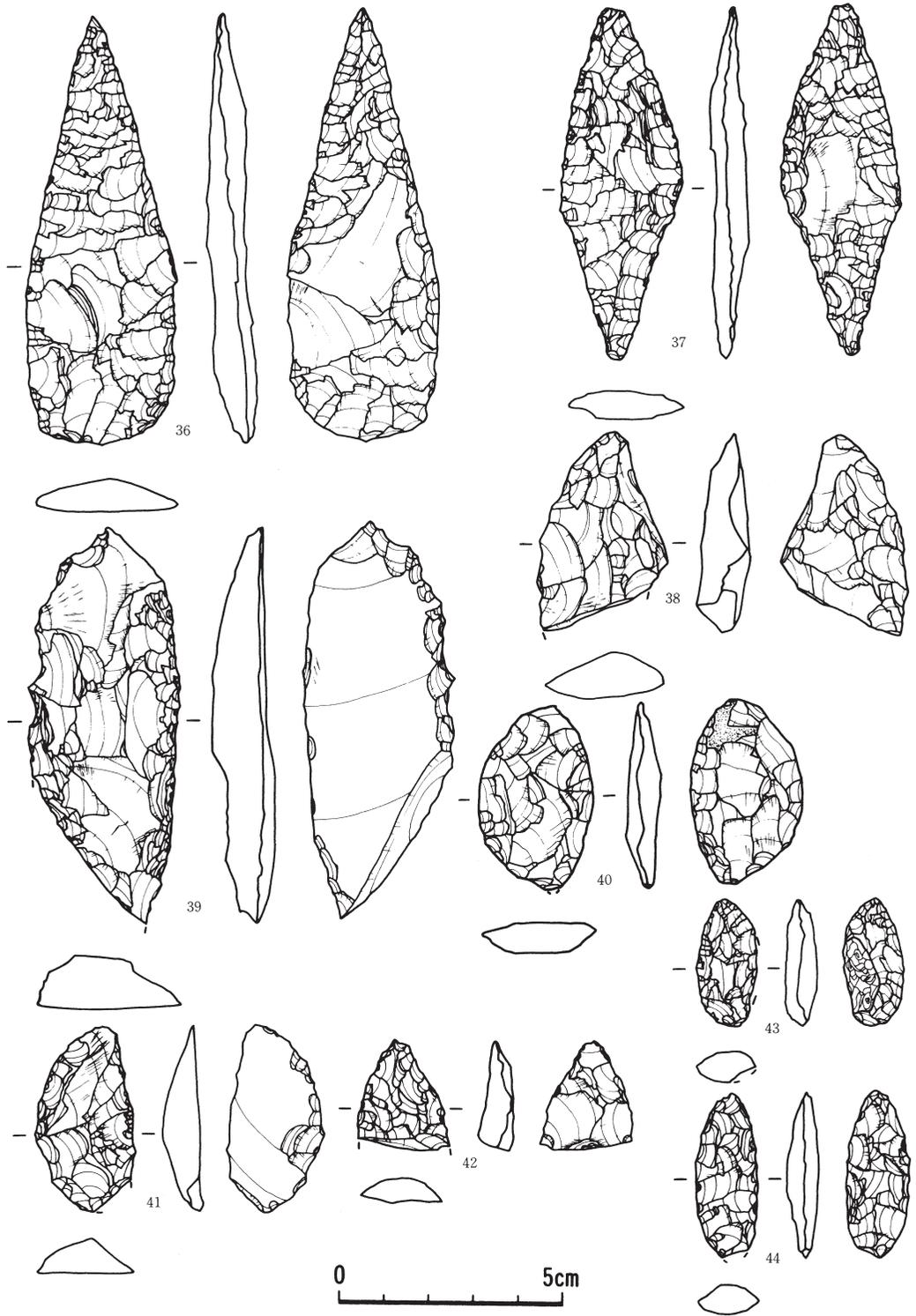


图31 石器 5 (石枪36~39、尖头器40~42、石斧43~44)

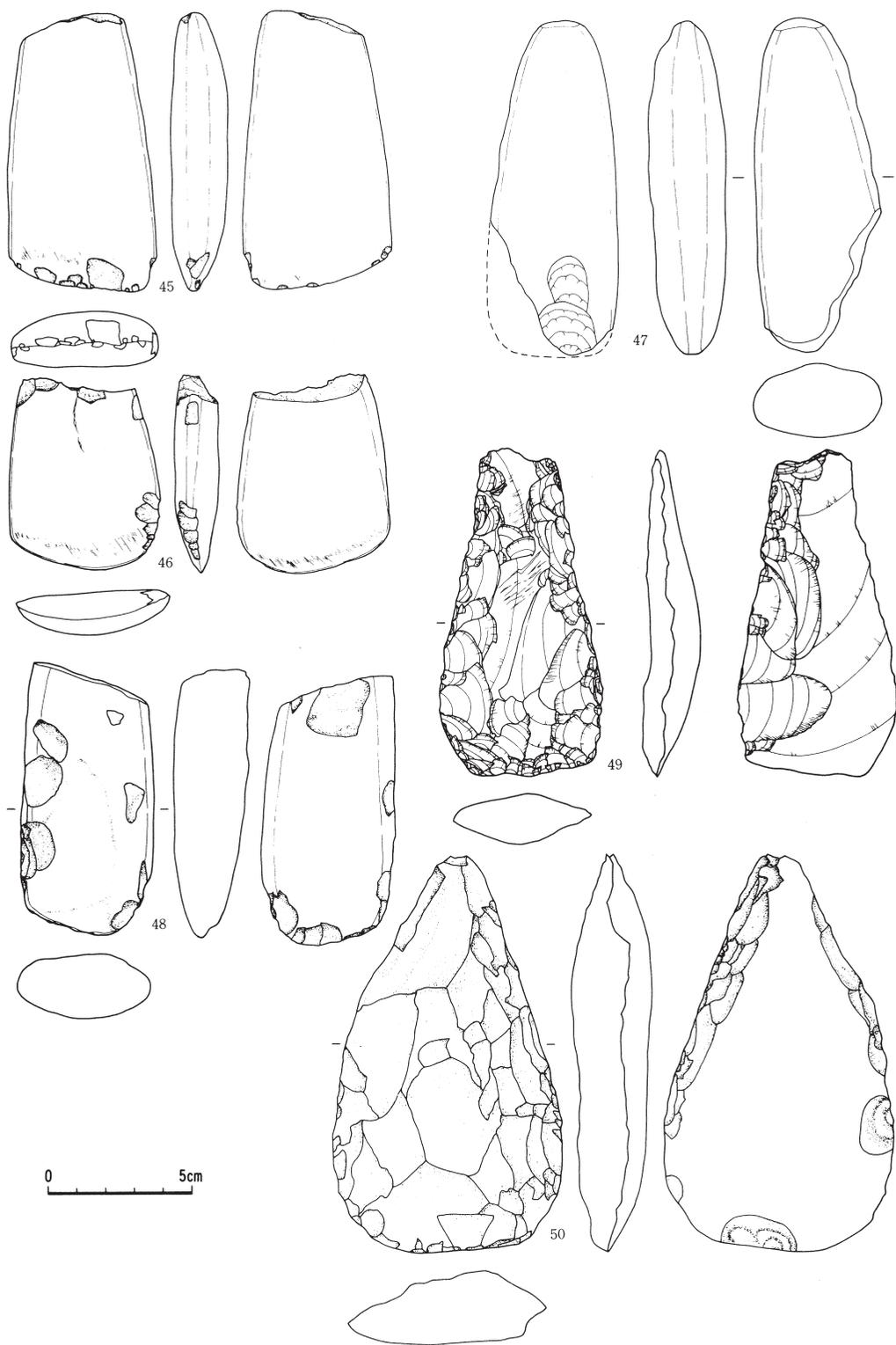


图32 石 器 6 (H類、石斧)

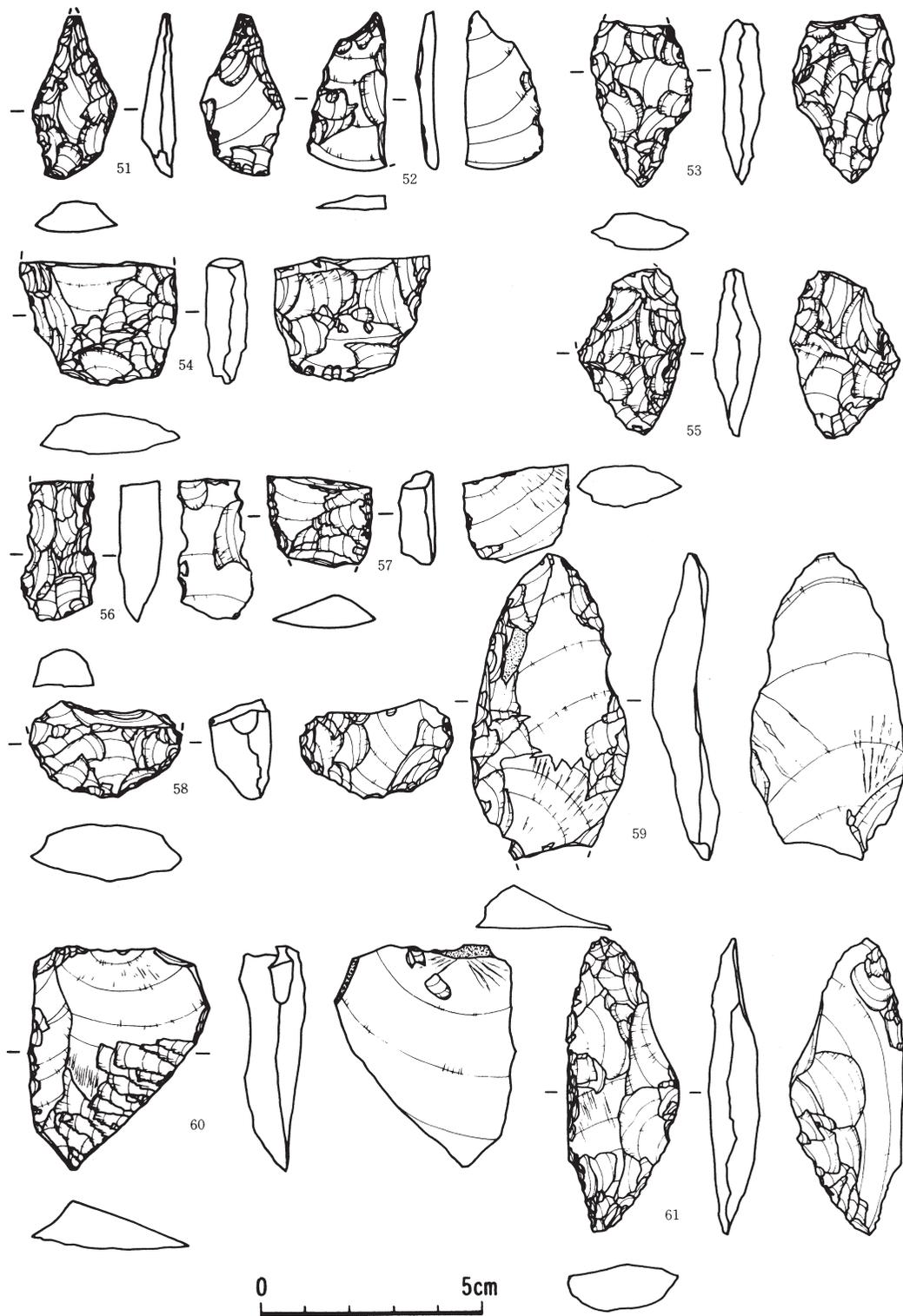


图33 石器 7 (石锥51~52、不定形石器53~61)

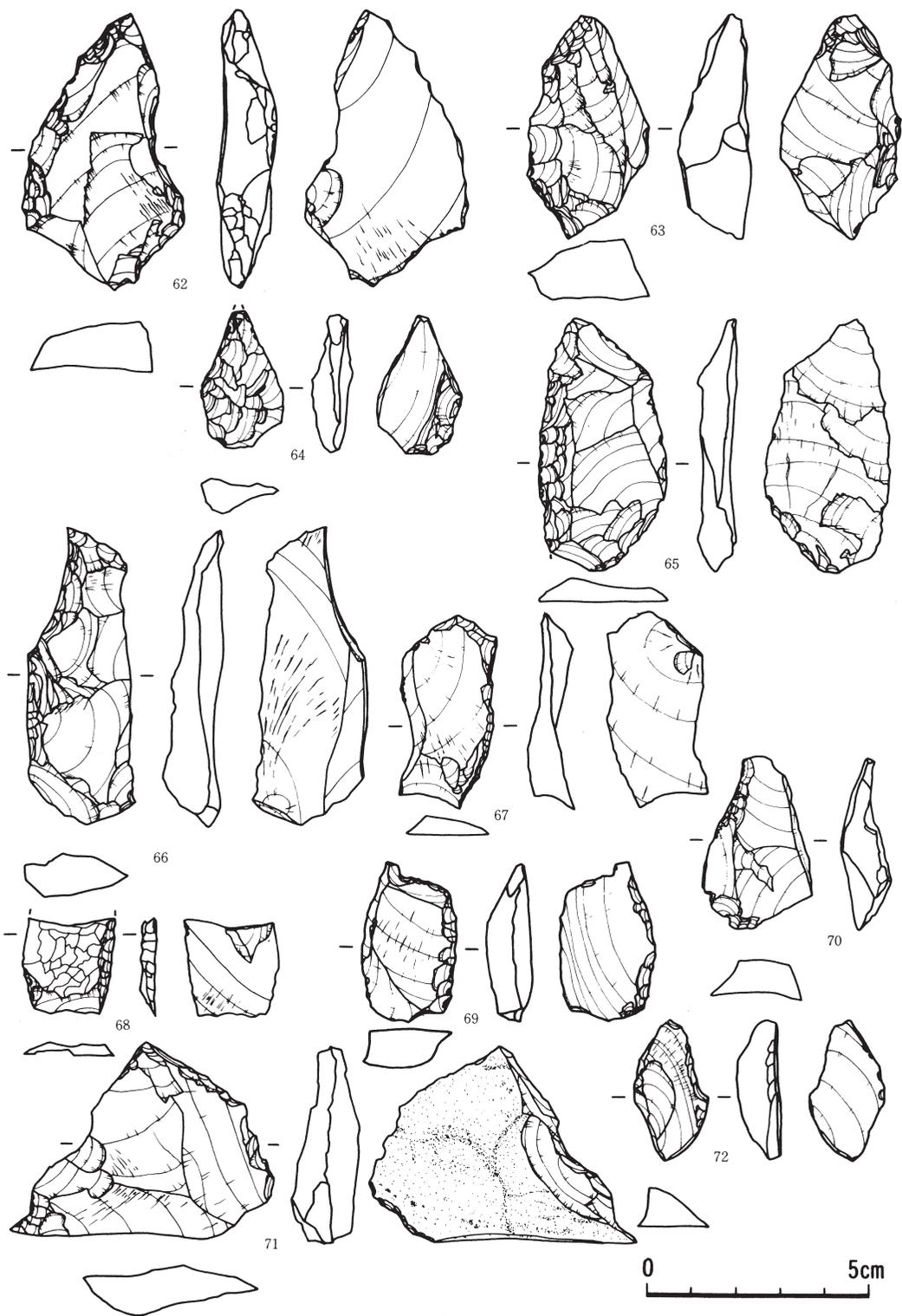


图34 石 器 8 (不定形石器62~72)

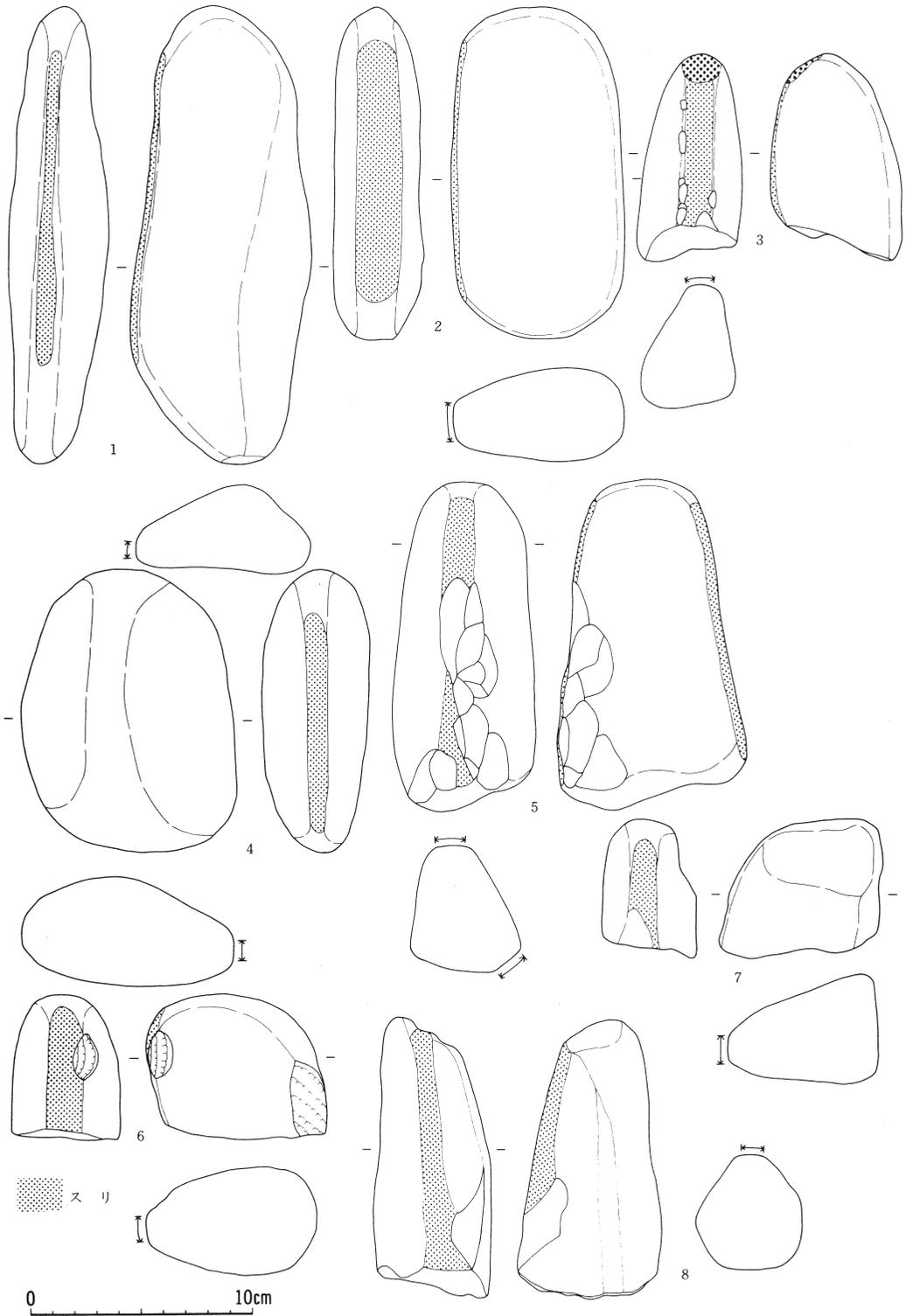


図35 石器 9 (敲磨器、IIa類)

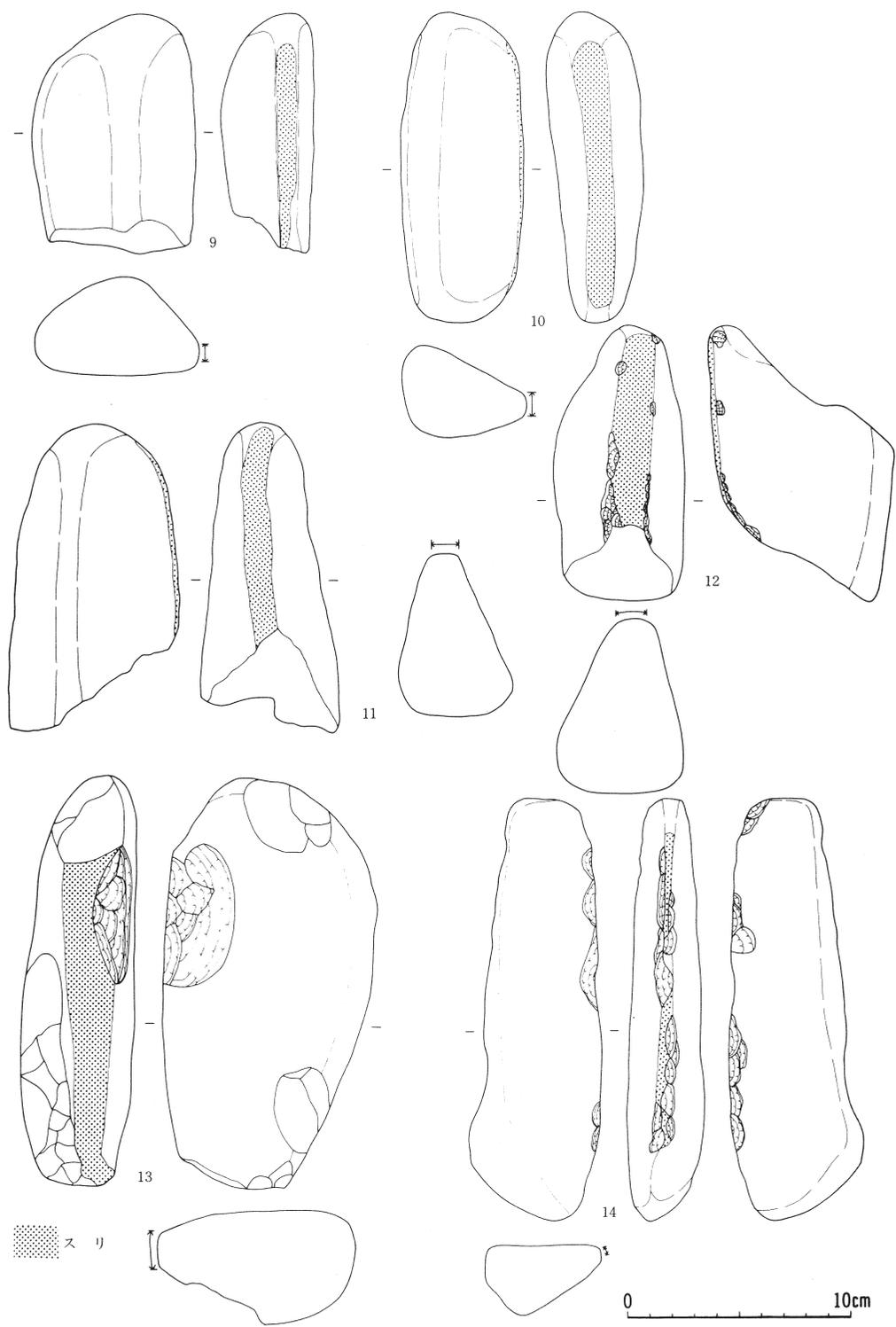


図36 石器 10 (敲磨器、IIb類)

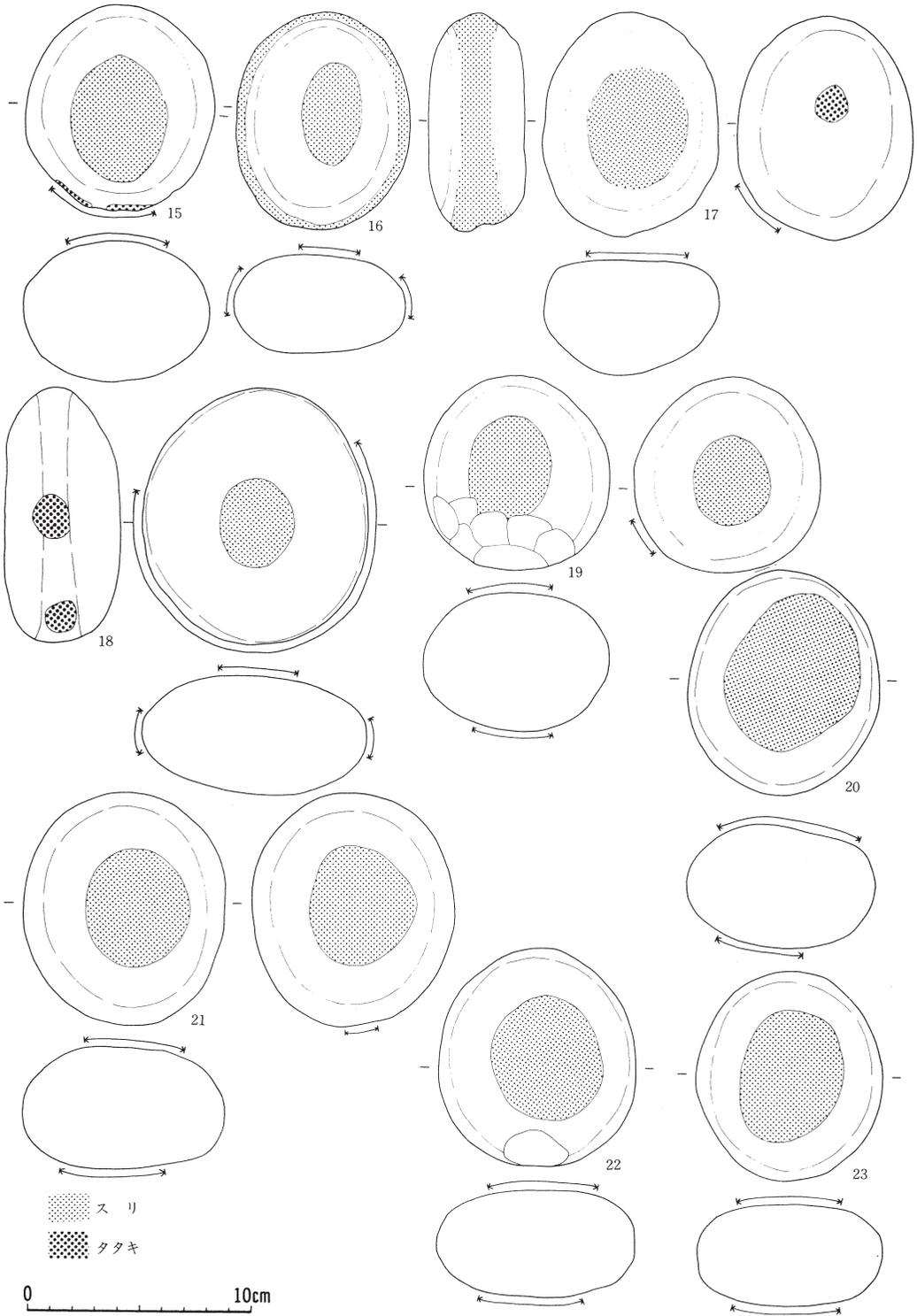


図37 石器 11 (敲磨器、IIIa類)

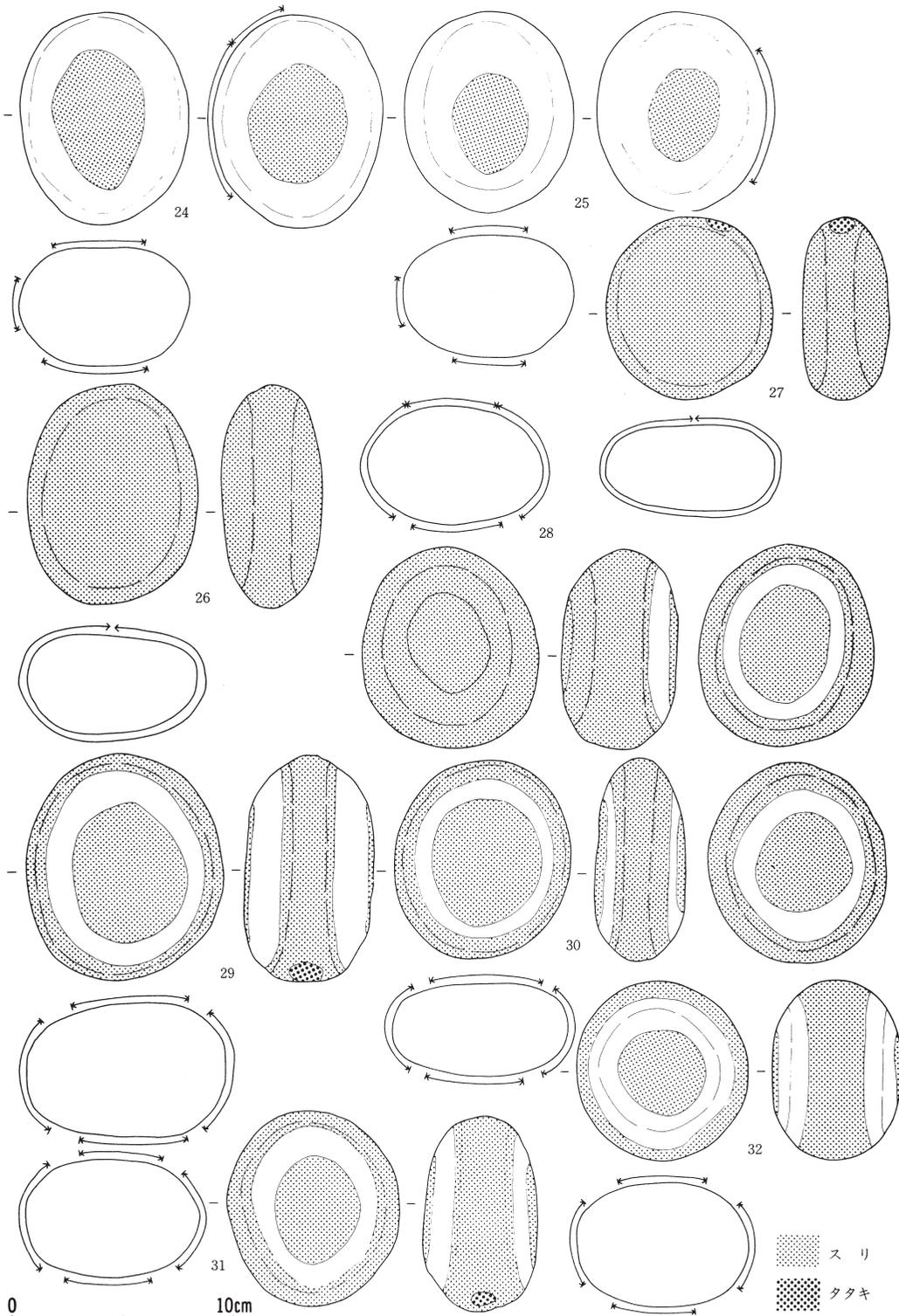


図38 石器 12 (敲磨器、IIIa類)

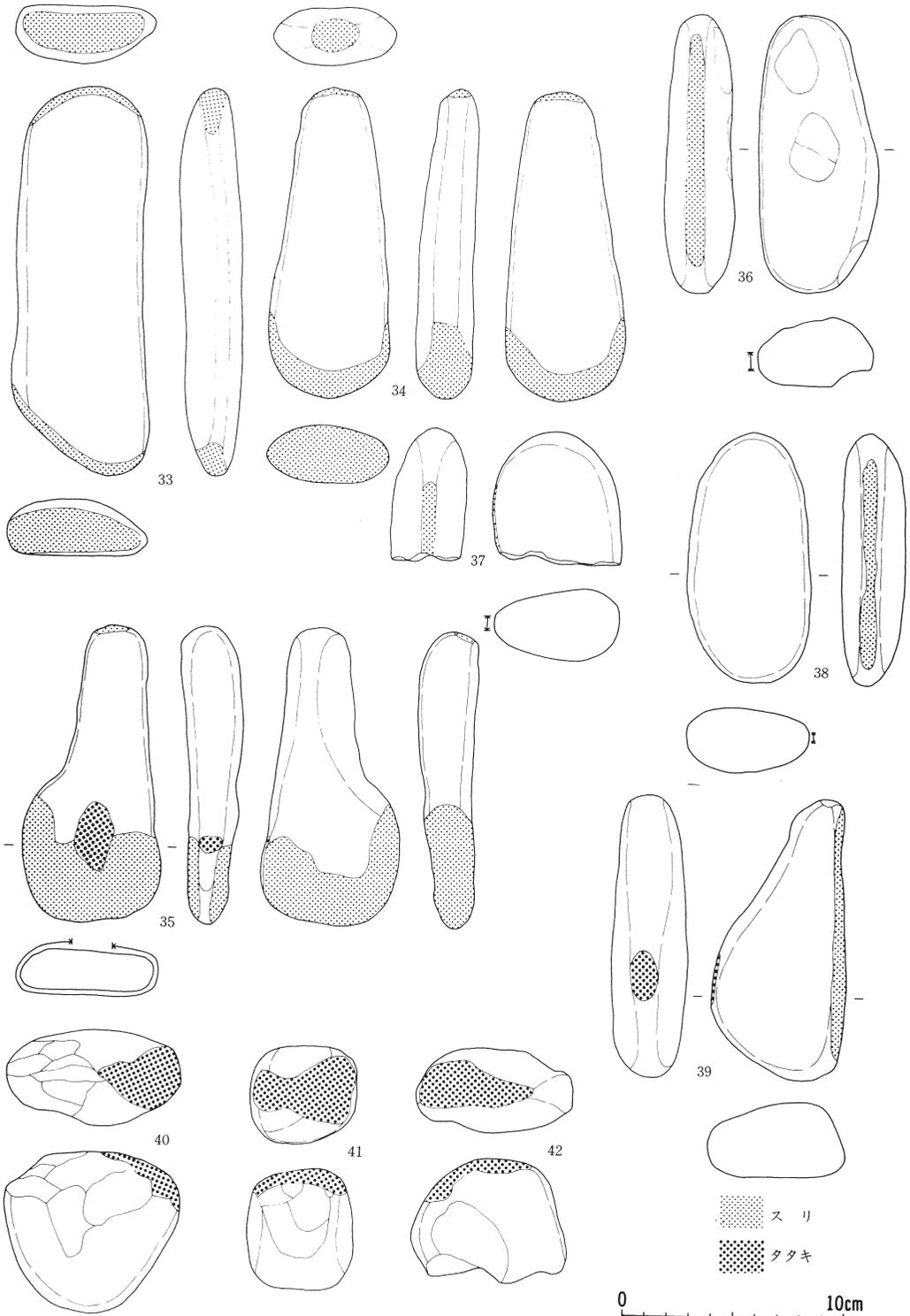


図39 石器 13 (敲磨器、IIIb・IIc・III類)

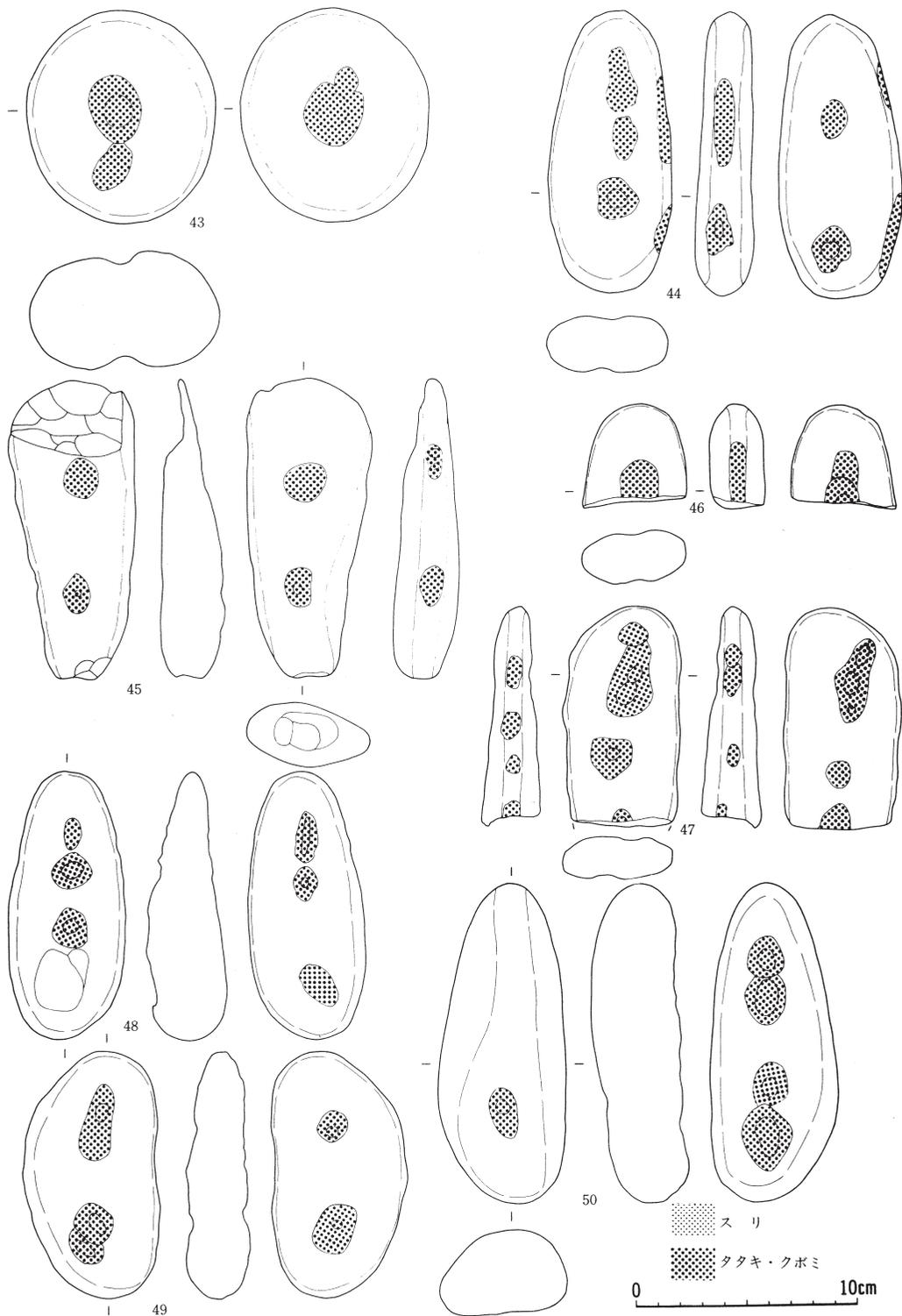


図40 石器 14 (敲磨器、IV類)



図41 石器 15 (敲磨器、IVI、K類)



図42 石器 (16) (J類、石皿、台石)

らかに3面3稜を使用している。e類：2面使用だが、凹部が浅く、敲打状の凹みであり境界がはっきりしない。その範囲も、前4類よりは広範囲に広がるものである(55~56)。これらの石質は、凝灰岩が10点、安山岩が5点、28のみ頁岩である。

J 石皿・台石 (図42~43 - 60~66)

遺構外から9点出土したが、いずれも破損品である。類：自然礫の片面または両面に、擦りの作業によって摩耗したとみられる広く深い凹がある石皿の類である(60~61)。いずれも、安山岩を使用しており、60は両面、61は片面の使用である。60は使用頻度が高かったと見られ、使用面は皿状に凹み、擦り面はつるつるしている。類：大型の自然礫を用い、平坦部分に凹の痕跡や器面の荒れが見られる台石の類で、6点出土した(62~66)。

K 砥石 (図41 - 57~59)

遺構外から3点出土した。57は、砂岩で作られた有溝砥石である。溝は5mm程度であり、断面形状はV字形をしていることから、玉類を研磨するために使用する玉砥石とは異種のものと思われる。磨製石斧等の刃部研磨用として用いられたものであろう。58・59はともに有溝に近いが、溝は浅く数mm程度である。石質は、安山岩である。

(赤平 智尚)

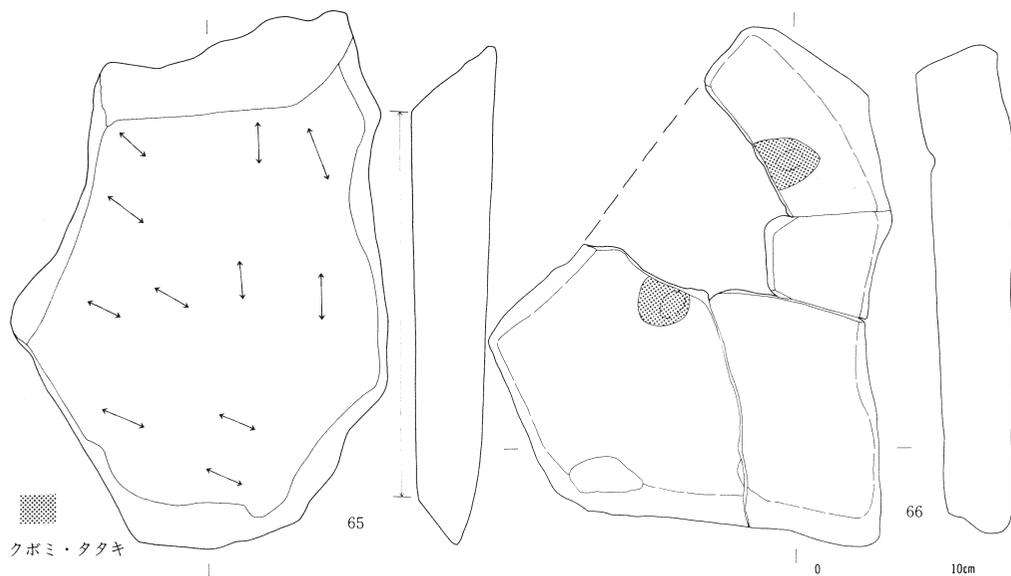


図43 石器 17 (J類、石皿・台石)

石器計測表

(石質凡例)

珪頁-珪質頁岩

頁-頁岩

鉄石-鉄石英

安-安山岩

凝-凝灰岩

緑凝-緑色凝灰岩

輝凝-輝緑凝灰岩

チャーチャート

砂-砂岩

図版	出地	土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
1	II B-100	III		89	20	10	19.8	珪質	E I	32	
2	II E-99	III		73	14	6	7.9	"	"	24	
3	II B-99	III		62	13	7	6.0	"	"	26	
4	II E-95	III		68	20	7	10.6	"	"	28	
5	II C-97	III上		61	17	8	8.3	"	"	38	
6	II E-96	III		48	16	7	4.5	"	"	40	
7	II B-97	III上	(73)	22	8		(13.8)	"	"	46	両面調整有
8	II A-99	III	(39)	13	4		2.6	"	"	56	
9	II A-99	III	(44)	14	7		(4.9)	"	"	45	
10	II C-97	III		51	18	8	7.5	"	"	20	
	II D-98	III	(36)	17	7		(5.0)	"	"	41	
	II A-96	III上	(50)	12	7		(4.0)	"	"	42	
	II D-99	III	(40)	16	6		(3.5)	"	"	39	
11	II G-97	III上	(98)	28	11		25.8	"	E II	33	両面調整有
12	II C-96	III上		76	18	8	11.7	"	"	27	
13	II C-97	III上	(68)	17	12		(11.2)	"	"	31	
14	II C-96	III上		84	19	9	13.1	"	"	21	
15	II D-95	III		71	20	10	15.0	"	"	22	
16	II C-97		(42)	19	10		(7.8)	"	"	54	
17	II A-99	III		71	17	10	12.9	"	"	23	
18	II E-99	III		63	15	8	10.0	"	"	29	
19	II E-95	III		70	24	9	9.8	"	"	30	
20	II A-94	III		76	30	7	17.7	"	E III	25	
21	I P-94	III		80	35	7	17.0	"	"	35	
22	II C-96	III上	(45)	33	6		(9.6)	"	"	11	
23	I T-95	III	(30)	40	7		(9.5)	"	"	57	
24	II B-98	III	(46)	20	6		(6.5)	"	"	16	

図版	出地	土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
25	II B-97	III		(42)	16	6	(5.7)	珪質	E III	36	
	I S-94	III		(29)	21	6	(6.0)	"	"	47	
	II B-100	III		(54)	23	6	(8.1)	"	"	37	
	II B-100	III		(21)	16	6	(3.4)	"	"	48	
	II B-97	III		(23)	18	7	(3.5)	"	"	51	
26	II B-99	III		(41)	(28)	5	(4.6)	"	"	34	
27	II D-97	III		61	33	15	26.0	"	F	6	
28	II E-98	III		45	35	11	16.2	"	"	7	
29	II D-99	III		(41)	23	10	(9.2)	"	"	4	
30	II C-97	III上		60	42	14	29.4	"	"	9	
31	II E-96	III		54	32	15	23.6	"	"	8	
32	II B-100	II		(16)	20	9	(5.1)	"	C	50	
33	II E-96	III		(24)	26	11	(8.6)	"	"	52	
34	I P-94	III		(97)	36	10	(32.2)	"	"	18	
35	II E-100	III		96	34	10	26.0	"	"	17	
36	II E-96	III		96	34	9	25.9	"	"	19	
37	I T-94	III		79	27	8	11.7	"	"	55	
38	II B-100	III		(45)	30	11	(10.7)	"	"	10	
39	I R-96	III		(90)	33	13	31.0	"	G	58	
40	II A-96	III上		42	26	8	8.2	"	B	5	
41	II B-97	III上		42	22	8	(6.2)	"	"	2	
42	II B-98	III		(24)	30	8	(3.1)	"	"	49	
43	II C-97	III上		29	(13)	7	2.8	"	A	15	
44	II F-96	III上		29	14	7	3.3	"	"	1	
45	I T-95	III		(98)	52	20	(151.2)	緑色凝灰	H I	2	
46	II A-97	II		(69)	53	15	(80.5)	輝凝	"	3	
47	II F-98	III		(117)	44	27	(197)	凝灰	"	37	
48	II E-95	III		(95)	46	26	(183)	安山	"	1	
49	II D-97	III上		113	57	17	99.4	珪質	H II	1	
50	II E-95	III		139	80	28	332.0	頁	"	2	
51	II E-96	III上	(3.7)	19	8		(5.0)	珪質	D	3	先端部欠損
52	II E-99	III		36	18	4	(2.3)	"	"	25	先端部の磨耗
53	II A-99	III		(38)	22	9	(6.8)	"	G	22	小形の石箱か
54	II E-95	III		(28)	35	9	11.6	"	"	13	
55	II D-97	III		(38)	24	10	(6.5)	"	"	23	
56	II D-97	III		(32)	16	9	5.9	"	"	53	石匙の可能性有

図版	出地	土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
57	II B-98	III		21	23	8	(4.4)	珪質	G	②	石匙か
58	II F-96	III上		22	34	14	9.1	"	"	③	
59	II B-95	III		70	36	10	25.1	"	"	14	
60	II F-98	II	(51)	40	14	21.2	"	"	"	12	
61	II E-95	III		67	25	11	16.9	"	"	⑬	
62	II S-96	III上		63	37	7	23.1	"	"	⑭	
63	II E-97	III		51	27	16	18.5	"	"	⑪	
64	II B-100	III		31	19	8	3.6	"	"	⑬	
65	II F-97	III上		58	29	9	11.7	"	"	①	
66	II C-98	III		68	24	12	16.6	"	"	44	
67	II D-95	III上		25	22	8	5.2	"	"	⑰	
68	II B-99	III		23	20	3	1.7	"	"	⑳	
69	II B-100	III		36	22	10	8.0	"	"	④	
70	II D-97	III		39	30	10	7.2	"	"	⑧	
71	II E-98	III		46	60	14	28.3	"	"	㉑	
72	II B-97	III		32	17	9	4.5	"	"	5	
	II C-97	III	(66)	23	14	17.4	"	"	"	43	
	II E-97	III上		23	32	9	6.9	"	"	⑩	
	II E-95	III		45	19	10	6.0	"	"	⑭	
	II B-98	III		19	16	3	0.9	"	"	⑮	
	II B-97	III		26	23	15	9.0	"	"	⑯	
	I H	77±		48	22	9	9.2	"	"	⑲	
	II D-97	III		33	39	16	18.3	"	"		
	II C-96	III		34	26	8	9.8	"	"		

礫石器類

図版	出地	土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
1	II F-96	III上		209	81	41	742	安山	I I a	64	
2	I Q-96	III上		151	78	39	827	凝灰	"	35	
3	II B-95	III上	(78)	46	61	(319)	安山	"	"	48	
4	II D-96	III上		130	93	50	865	凝灰	"	61	
5	II C-99	III上		143	65	78	1063	安山	"	57	
6	II C-98	III		78	65	50	(395)	凝灰	"	52	
7	II B-98	III		57	42	71	(268)	安山	"	67	
8	II C-99	III		86	64	52	(560)	"	"	55	

図版	出地	土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
8	I T-95	III上		60	55	63	(292)	安山	I I a	15	
	II D-99	III		89	46	82	(432)	"	"	44	
	II E-99	III上		61	60	59	(222)	"	"	53	
	II B-95	III		93	71	67	(462)	"	"	62	
	II B-95	III	(112)	51	70	(714)	"	"	"	66	
9	II E-95	III上	(109)	74	46	(507)	"	"	I I b	42	
10	II F-98	III上		141	56	42	397	凝灰	"	75	
11	II C-95	III	(141)	77	50	(673)	安山	"	"	50	
12	II D-99	III		125	84	58	(579)	凝灰	"	45	
13	II E-97	III上		187	97	53	(1230)	"	"	69	
14	II D-99	III		191	61	32	433	安山	"	58	
	I T-95	III	(93)	75	42	(384)	"	"	"	54	
	II G-100	III上		152	83	56	770	"	"	56	
15	I R-97	III上		93	84	64	659	"	I I a	9	
16	II D-95	III上		97	78	43	498	"	"	19	
17	II D-96	III上		99	79	52	548	"	"	11	
18	I Q-97	III上		116	101	53	958	"	"	16	
19	I R-93	III上		88	84	63	641	"	"	17	
20	II E-102	III上		102	86	58	682	"	"	2	
21	II C-100	III		106	90	58	794	"	"	20	
22	I S-98	III上		98	89	49	646	"	"	12	
23	II C-97	III上		95	83	45	530	"	"	77	
24	II B-96	III上		97	76	54	628	"	"	3	
25	II A-98	III		90	76	56	555	"	"	6	
26	II A-101	III		102	78	46	505	"	"	4	
27	I R-96	III上		84	76	39	357	"	"	1	
28	II C-100	III		92	80	54	548	"	"	7	
29	II D-95	III上		104	89	59	827	"	"	8	
30	II A-97	III		91	80	41	448	"	"	5	
31	II B-99	III		88	77	53	532	"	"	10	
32	II C-96	III		78	83	58	535	"	"	21	
33	II B-96	III上		173	60	28	440	"	I I b	68	
34	II E-96	III		140	54	25	259	凝灰	"	60	
35	II C-96	III上		133	61	27	234	安山	"	63	
36	II B-97	III上		125	53	32	296	"	II I c	41	
37	II F-96	III上		59	57	33	(163)	凝灰	"	71	

図版	出地	土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
38	II D-96	III上		114	56	28	279	凝灰	I IIc	65	
	II C-98	III上		86	(45)	(53)	(297)	安山	I II	13	
	II D-95	III		107	86	57	749	"	"	18	
	II C-95	III		106	86	55	750	"	"	22	
	II B-96	III上		87	75	47	456	"	"	76	
	II D-101	III上		106	80	49	607	"	"	78	
39	II D-97	III		127	61	34	345	"	I III	34	
40	II B-97	III上		73	79	44	315	鉄石英	"	26	
41	II D-95	III		54	48	44	169	チャート	"	23	
42	II D-98	III		(55)	70	39	(169)	"	"	25	
43	1 土	フク土		97	85	53	673	安山	I Va	31	
44	II G-97	III上		129	56	28	258	"	I Vb	74	
45	II D-98	III		137	58	30	(262)	凝灰	"	32	
46	II B-98	III		(48)	48	25	(78)	"	"	73	
47	II B-97	III上		101	54	28	(208)	"	"	27	
48	II B-96	III		187	57	30	(258)	"	"	32	
49	II D-102	III		113	63	30	268	"	"	30	
50	II B-98	III		147	59	44	403	安山	I Vc	43	
51	1 土	フク土		93	53	32	(303)	凝灰	"	29	
52	II E-96	III		(101)	53	24	(134)	頁	"	28	
53	II A-99	III		(99)	65	49	(376)	凝灰	I Vd	101	
54	II C-96	III上		(53)	56	39	(102)	"	"	40	
55	II B-95	III上		117	98	35	541	"	I Ve	36	
56	II F-97	III上		(61)	66	21	(134)	"	"	24	
	II C-100	III		123	54	34	286	安山	I IV	39	
	II D-97	III		105	53	34	262	"	"	51	
	II F-96	III上		100	51	33	197	凝灰	"	49	
57	II E-99	III		(48)	(47)	15	(31.4)	砂岩	K	103	
58	II C-100	III		(87)	82	75	(792)	安山	"	94	
59	II E-96	III		153	63	24	350	"	"	59	
60	II E-97	III上		(211)	250	83	(5080)	"	J I	90	
61	II E-96	III		(301)	(217)	62	(6080)	"	"	93	
62	II C-101	III		(206)	(156)	68	(269)	"	J II	91	
63	II C-99	III		(167)	(120)	32	(3340)	"	"	92	
64	II D-96	III上		(122)	(115)	34	(954)	"	"	97	
65	II B-99	III		(374)	(260)	52	(8740)	"	"	96	

図版	出地	土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
66	II E-99	III		(362)	(278)	69	(832)	安山	J II	98	
	II A-102	III上		(88)	(76)	40	(6840)	"	"	95	
	II D-97	III		(90)	(55)	21	(174)	"	"	99	

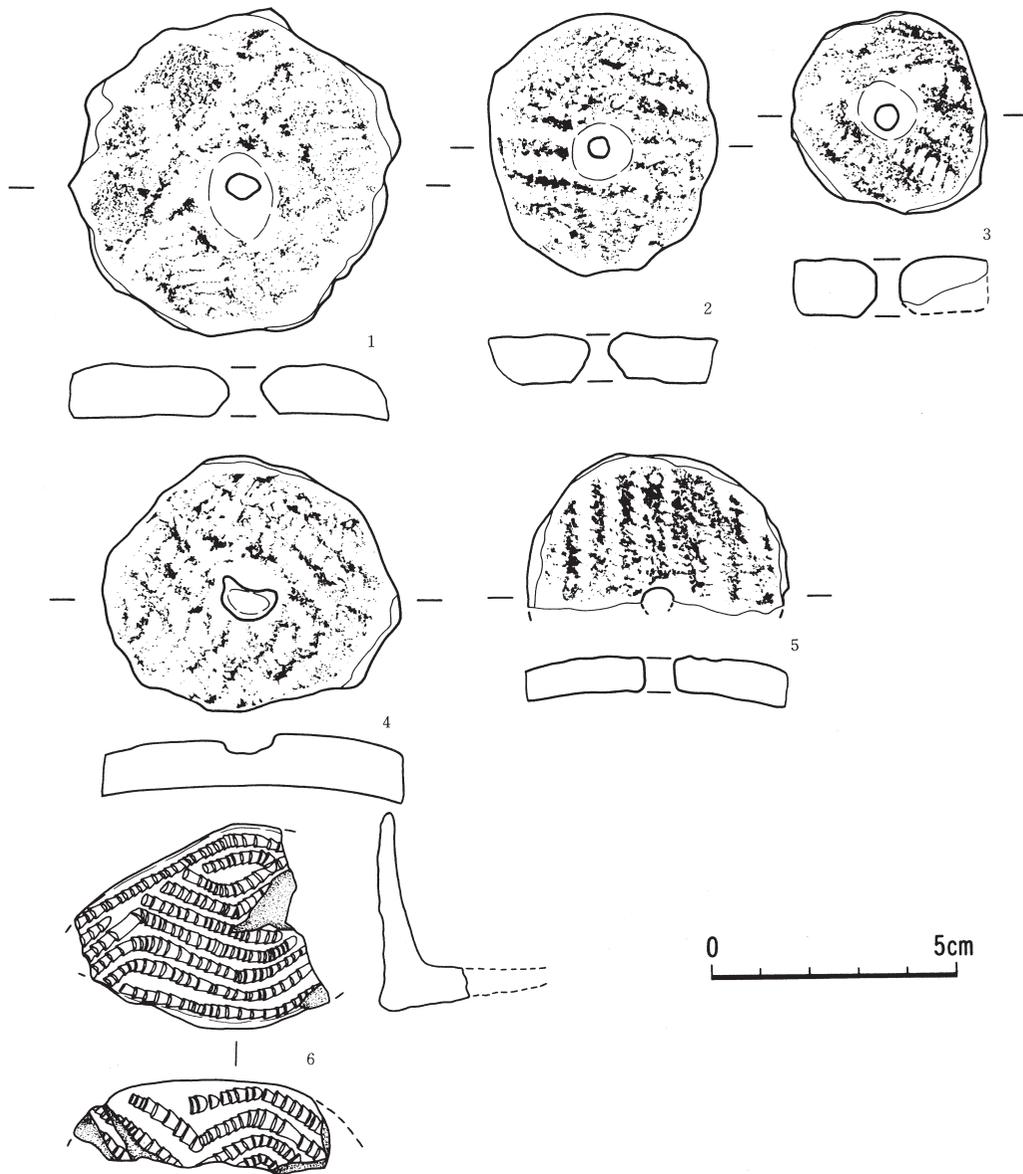
第3節 土製品（図44 - 1 ~ 6 写真15）

円盤状土製品（1 ~ 5） 第1号住居跡から2点、（図7 - 15、16）遺構外から5点の合計7点が出土した。いずれも土器片の一部を利用して作られた円盤状土製品や土器片利用土製品と呼称されているものである。このうち、中央に貫通孔のあるもの（有孔）と、貫通しないもの（盲孔）がある。径は43~68cmで平均は55cm、重さは16~50gで平均は31gである。また、孔には、両面からの穿孔と片面からの穿孔がある。いずれも、第 層からの出土で、早稲田5類に属する深鉢形土器の胴部片を再利用しており、早期末葉に位置づけられる。

性格不明土製品（6） 調査区IT - 95から出土した。形状から見て波状口縁の一部や袖珍土器（ミニチュア土器）の可能性もあるが、破損品のための本来の形状は判らず、その性格は不明である。全面、半截竹管状工具で長さ5mm程度の沈線を連続して弧状に施文している。胎土およびこの押し引き沈線の技法が多用される早稲田6類に相当する時期に位置付けられる。

その他、ベニガラと思われる赤褐色の塊（写真15 - 9）も B - 99、 層から出土した。

（赤平 智尚）



土製品計測表

番号	種類	グリッド	層位	大きさmm		重量g	備考
				長径×短径	厚さ		
1	円盤状土	IID-98	Ⅲ上	68×61	7~17	50.7	φ6mm
2	円盤状土	IIA-97	Ⅲ	53×45	9~15	27.1	φ5mm
3	円盤状土	IIC-97	Ⅲ上	43×40	11~13	16.3	φ5mm
4	円盤状土	IID-98	Ⅲ上	68×52	8~12	33.2	φ5×9mm
5	円盤状土	IIB-100	Ⅲ	52×-	8~9	(15.2)	φ5mm
6	性格不明	IT-95	Ⅱ	52×41	4~7	-	

図44 土製品

第 章 分析と考察

第 1 節 第 群土器の編年上の位置づけと課題

第 群土器は第 層上部に包含層（文化層）を有し、しかも出土量においては本遺跡の主体を占める土器群である。時期及び型式は早期末葉の早稲田 5 類に相当する。口縁部から類推した個体数は82個体であるが、同一個体においても、個体差を見分ける重要な基準の一つである器厚・口唇部の形状等異なるものがあるので、全個体数はこの数値よりやや下がる可能性もある。

この82個体の土器が同時に存在した可能性は少なく、ある時間的軸の中でとらえられるものであろう。しかし出土状況からは土器群の時間差やその流れを把握できない。従って本型式のものを一括して分析しその特徴を明らかにするとともに、他遺跡との関係や編年上の問題について概観してみる。

第 群土器の大きな特徴はその胎土・器形・文様施文の原体等に見られる。

胎土の特徴は、第 1 に極めて細かい粒子の素地土を用いていること。これは素地土選定の段階で細かい粒子の粘土採取の他に一般的な粒子の粘土を採取した後に、水を利用して粘土の精選を行った可能性も指摘できる。第 2 には他の縄文時代早・前期の土器群に比べて、極めて多量の植物性繊維が混入されていること。第 3 に細砂粒の混入が極めて少ないこと等である。少ない細砂粒の中でも白色凝灰岩の砂粒の混入がやや目立つ。

器形の特徴は、第 1 に底辺部が外方に張り出した平底であること。この前後の土器型式では尖底が一般的であることからみると極めて大きな特徴と言える。第 2 に口縁がほとんど変化のない平縁であること。第 3 に胴下部の径が口径や胴径の割に極めて小さく不安定な印象を受けること等である。

また、成形上の特徴は第 1 に粘土帯は幅が 5 ~ 8 cm、厚さ 1 ~ 1.5cmで接合では上位の粘土帯を内側に大きく引き下げて接合すること。第 2 に成形は円礫等の工具を用いず指腹・掌により強く押しつけることにより器内面には指腹・掌の圧痕（凹凸）がそのまま残る。

次に文様施文の特徴を見ると、第 章第 1 節に述べたように原体や文様構成において極めて多様性に富む。以下のその特徴を列記する。

(1) 口縁部文様帯を構成する類 (A) と口縁部から底部まで同一文様を施文する類 (B) の比は概ね 3 : 7 で、後者が前者の2.5倍である。

(2) 使用される施文原体は極めて豊富である。使用頻度の高い順にみると直前段合燃の縄文 (B 5・A 4 c・A 4 d・A 5 57.3%)、この中には直前段が 2 本 (29.2%)・3 本 (4.9%)

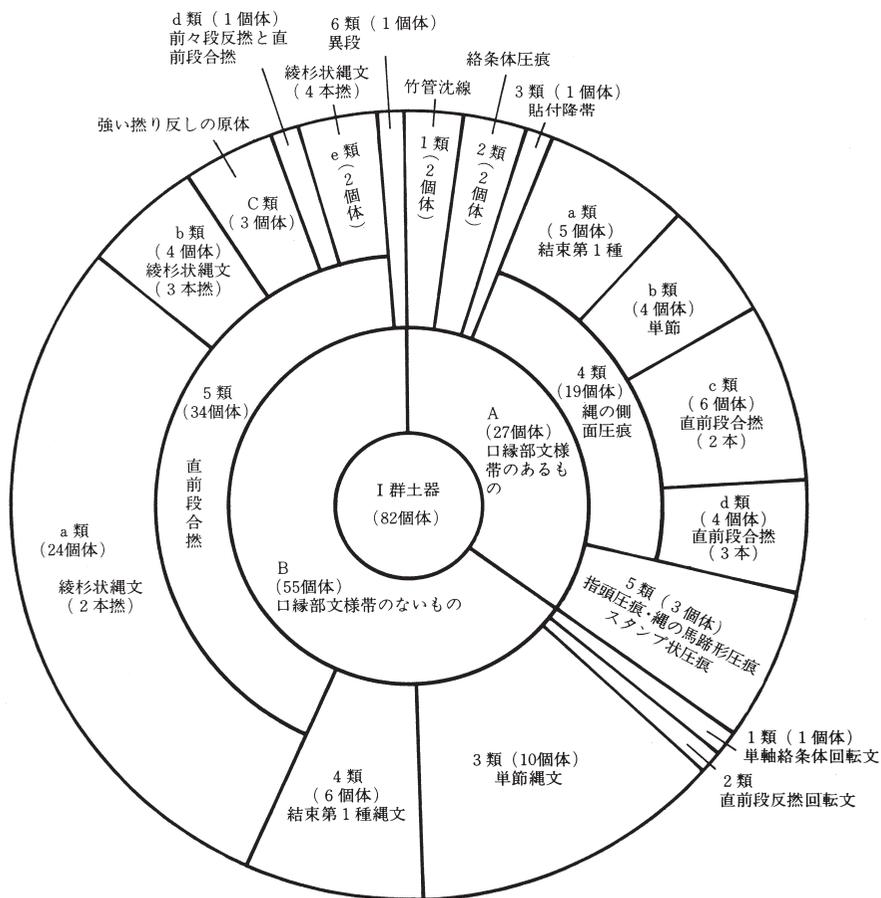


図45 第I群土器類別グラフ

4本(2.4%)の各場合と、前々段反燃のものと合燃したもの(2.4%)があり、単節縄文(19.5%)、結束第1種縄文(20.7%)、指頭・馬蹄形型・スタンプ型・圧痕文(4.9%)、竹管工具による沈線文(2.4%)、貼付隆帯(1.1%)、単軸絡条体回転文(1.1%)、直前段反燃回転文(1.1%)、異条縄文(1.1%)、直前段反燃回転文(1.1%)となる。直前段合燃の原体使用の文様の頻度が極めて高い。

(3) 直前段合燃の中でも片方に強い撚り反しを施したB 5 c類の3個体とB 5 d類の1個体を除くものは全て「綾杉状縄文」(佐藤他:1961)をなす。この特種な文様は佐藤氏によって命名され当該型式にみられる特徴的な文様とされている。全個体数に占めるこの比率は52.4%で、極めて高い値を示す。

(4) 綾杉状縄文をなす類は $R < \frac{L}{R}$ の2本の縄を使用するもの(B 5 a類)が主体で(29.2%)、3本及び4本の縄を撚り合わせたものは稀である。また2本縄の場合には、 $L < \frac{R}{L}$ の最後の撚

が「L」となるものは存在しない。

(5) 前型式でほとんど見られなかった結束第1種縄文(A4a類・B4類)は全個体の13.3%で比較的高い値を示す。

(6) 前型式で主体を占めた単節縄文(A4a類・B3類)は全個体の19.5%で使用頻度が低下する。

(7) 使用される縄文原体のほとんどが0段多条のものである。

(8) 早稲田5類を出土する他遺跡でこれまで発見されていなかった土器、あるいはあっても極めて稀な存在だった文様施文として、竹管沈線文(A1類)、絡糸体圧痕文(A2類)、貼付隆帯(A3類)、スタンプ状圧痕(A5類)がある。

第 群土器は以上のような特徴を有するが、これらのうちいくつかの要素はこれまでの研究でその成果が積み上げられたものもある。それは、(2)・(3)・(5)・(6)に係る問題である。

この問題は早稲田5類の型式設定時(佐藤:1958)に、その主たる特徴の一つとされる綾杉状縄文についてその出現・隆盛・衰退を通じ、内包される土器群の時間的流れを把握しようとする試みである。

この試みは佐藤達夫による早稲田貝塚・唐貝地貝塚・坊主沢遺跡の各出現率(佐藤:1961)に始まり、長七谷地2号遺跡出土の第 群土器の分析を通じ、その編年的な位置づけを明らかにした(村木:1982)ことで成果を見た。また長者森遺跡では第 a群土器の位置づけと、早稲田5類の型式細分の可能性が高いことが指摘されている。この一つに撚り戻し(直前段合撚)の原体が少ないことを上げ(岡田:1983)ている。

また当該型式期の良好な資料を豊富に出土した和野前山遺跡では、長七谷地2号及び長者森の両遺跡での成果を踏え「綾杉状の縄文は、赤御堂式の後半に使用され始め、早稲田5類のある段階まで盛行するが、以後減少・消滅する...」(三宅:1984)との見通しをたてた。

本遺跡での出現率52.4%で当該型式の直前の型式をになうであろう長七谷地2号遺跡第 群の14%、和野前山遺跡でみられた約40%をはるかにしのぎ、最も高い坊主沢遺跡の56%に近いものである。この結果を上記の時間的な流れの中にあてはめると、綾杉状縄文の最も盛行する時期、すなわち早稲田5類の土器型式期で、坊主沢例と共に最も標式的な遺跡とみることができる。

しかしこれは、「遺跡内における同時存在」を前提にした分析結果の数値であり、この分析からはあくまでも概略的な「見通し」より生まれにくい。縄文前期以後しばしばみられる大型住居を含む集落跡のように、半定住的な生活を営んだ場合には、遺跡内での同一型式における時間幅が極めて長くなり、遺跡間の前後関係が生まれてこない。特にこれは本遺跡のように遺物の量が豊富な遺跡に見られる現象であろう。

次に(8)の沈線による幾何学的な文様を構成する土器(A₁類)と、絡条体圧痕文(A₂類)について簡単に触れておく。

A₁類は胎土・器厚・成形時の粘土帯接合の特徴は全て早稲田5類に一般的な現象を示す。また、棒状工具による施文も稀にはあるが、それは長七谷地遺跡や和野前山遺跡のような口縁部に刻目のような縦位や横位の短沈線に限定され、しかも文様構成上においては副次的な一要素にすぎない。しかし本類は平行沈線を使用し、それらを組み合わせることによって幾何学的な文様を描き出しており、それが文様構成の主体をなす。したがって短沈線技法からA₁類のような文様構成が派生したとは考え難い。このような文様構成をとるものでは、早稲田5類の前々型式であるムシリ式がある。この型式ではA₁類に極めて近い文様構成をなすものが主体を占める。したがってA₁類はこの型式との関係も看過できない資料であろう。

またA₂類は、東北地方北部に極めて稀な存在である。従来の土器編年上では北海道東釧路遺跡を標式とする東釧路式、同式等にみられるものである。他の土器群との共伴関係は明らかでないが、胎土・粘土の接合、器面調整は在地の早稲田5類土器に酷似する。したがって道東との土器編年上注目される資料であろう。

A₂類と関連する問題として第Ⅱ群土器の出土状況と編年的な位置づけがある。第Ⅱ群土器は復元可能な1個体だけであるが第Ⅱa層上部で第Ⅱ群土器の集中する直上に腐植土層をはさまずに出土した。このことは第Ⅱ群及び第Ⅲ群土器が極めて近い時期の廃棄であることを示すものである。この第Ⅱ群土器は器壁が極めて薄く、外面文様は結節回転文と絡条体回転文の組合せによる。結節回転文や羽状構成の絡条体回転文を主体文様とする技法は東北北部の早期末葉の土器編年には存在しない。これは北海道編年の東釧路式に多用される技法である。しかしこの第Ⅱ群土器は胎土や製作技法から標式的な東釧路式とは言い難く、それに近い土器と言うべきかもしれない。したがって、上記の出土状況をもって、早稲田5類と、東釧路式そのものが併行関係になるとの即断はできない。この問題に関しては、昭和62年度に実施された表館(1)遺跡の調査で良好な資料を得ており、その整理及び分析結果を待ちたい。

(三浦 圭介)

第2節 出土石器について

本遺跡出土の202点の石器について若干まとめてみる。石器の分布について - 図46～47は、石器の出土分布状況である。剥片石器・礫石器そしてフレイクに至るまで載せてある。この図でその概略は把握できるであろう。明らかに、出土石器の9割以上がD-98杭を中心とする半径12mの円内に入る。そして、分布状態を見ると、ある特定の石器がユニットとしてのまとまりをもつものではなく、それぞれの石器が満遍なく出土している。この地点は、地形的には谷地形でやや窪んでおり、遺構が全く検出されなかった場所である。第1号竪穴住居跡からもやや空間をおいてある。これらの石器の出土層位はその殆どがa層中であり、この円内の同一レベルからは、早期末葉の早稲田5類期の土器が集中して出土した地点でもあることから、この石器の時期も該時期のものと思われる。また、図47に示すように同地区内からは100片のフレイク(一部碎片も含む)が出土している。この量は、剥片石器の出土量に比べても少なく、形状も小さいことから、今回の調査区内で石器が製作されたとは考えにくい。また、石核は1点も出土していないことからこれらの剥片石器は搬入されたものと思われ、当遺跡の性格もハンティングキャンプ地とするのは妥当であろう。石器の組成について - 本遺跡から出土した202点の石器の器種別および石質別組成について、図48 - ~ に示した。まず、剥片石器の器種別組成を見てみると、定形石器の中では、6割以上が石匙、それも縦型石匙のみで占められる。数量の面で縦型が古い時期に多く、横型は逆の現象を示すと見られているが(鈴木:1981)、本遺跡に限っては横型が1点も出土していない点で、該時期における石匙製作の特徴を示すものといえよう。また、狩猟具たる尖頭器類が12点、全石器中に占める割合が6%以下と少ない。このことは、本遺跡が1軒の竪穴住居跡しか検出されずそれも短期間の使用と思われること、前述のフレイク出土状況等からハンティングキャンプ地としての性格が強いのとやや様相を異にする。また、剥片石器中の不定形石器の占める割合が54%、全石器中でも30%と多いのも特徴といえる。次に、礫石器の器種別組成を見てみると、敲磨器類の中でも、主要面が擦りの機能をもつものが51点、61%を占めている。なかでも、I類とした三角柱状磨石及びa類とした断面が球状ないし楕円状の擦り石が多い。特に後者の石器の特徴は、擦るという機能面から考え、採集を生業としている当時の日常生活では頻繁に使用されたであろうが、これらの多くは、その擦り面の範囲が広い割には、摩耗が少ない。また、図48 - に示すように、大きさも78～116cm、重さ357～958g内におさまり、長幅比も1.0～1.3と実に規格性に富む。擦りとしての機能のほかに、別な用途があるのかも知れない。次に、石質組成であるが、剥片石器の全部が珪質頁岩を素材としている。当遺跡周辺では他に玉髓や一部黒曜石を素材とした石器がみられるが、それは1点もない。これに対して、礫石器の石質組成は、70%が安山岩、24%が

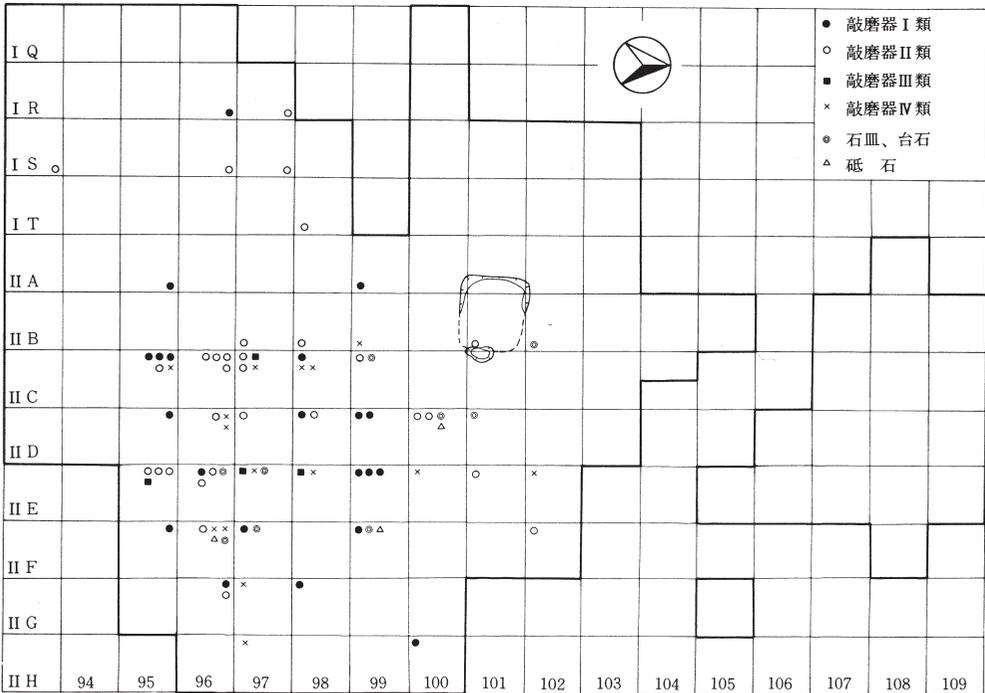
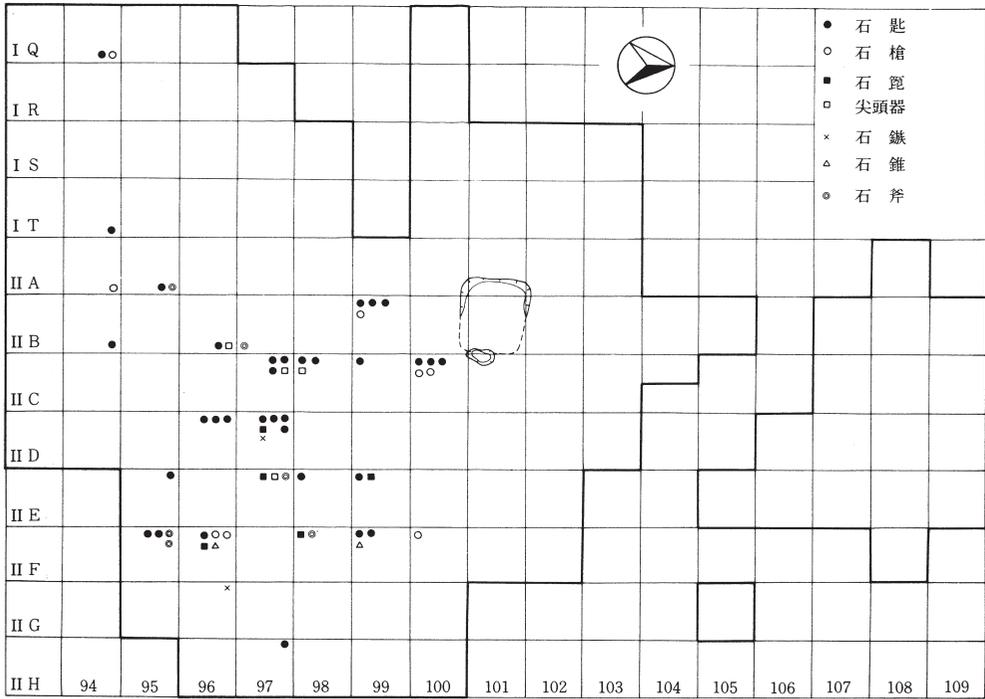


图46 遺構外出土石器分布图1 (剥片石器及び礫石器)

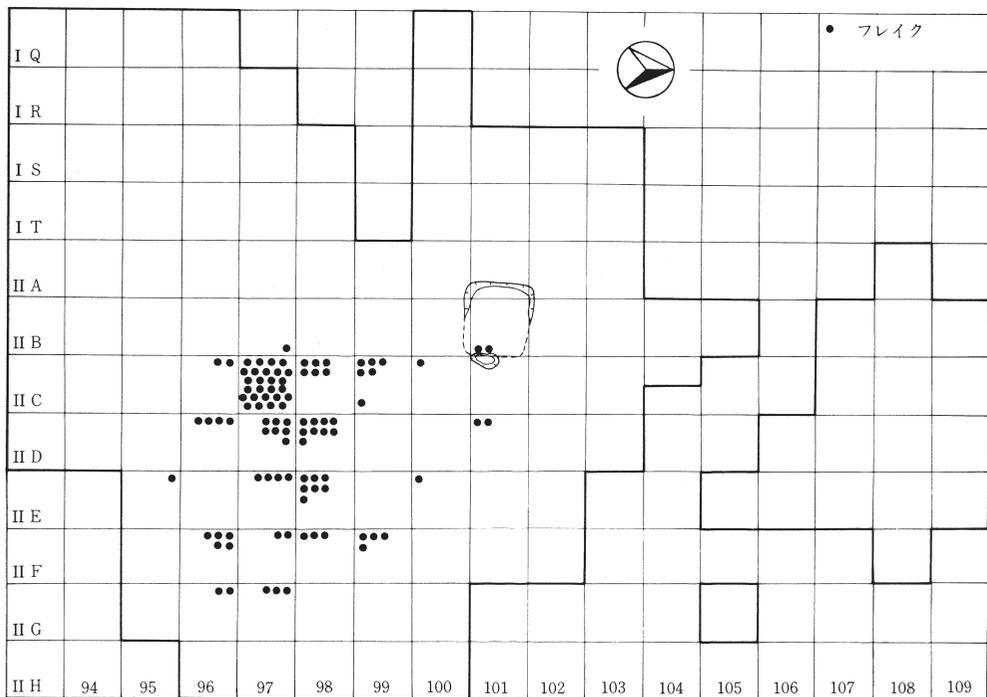
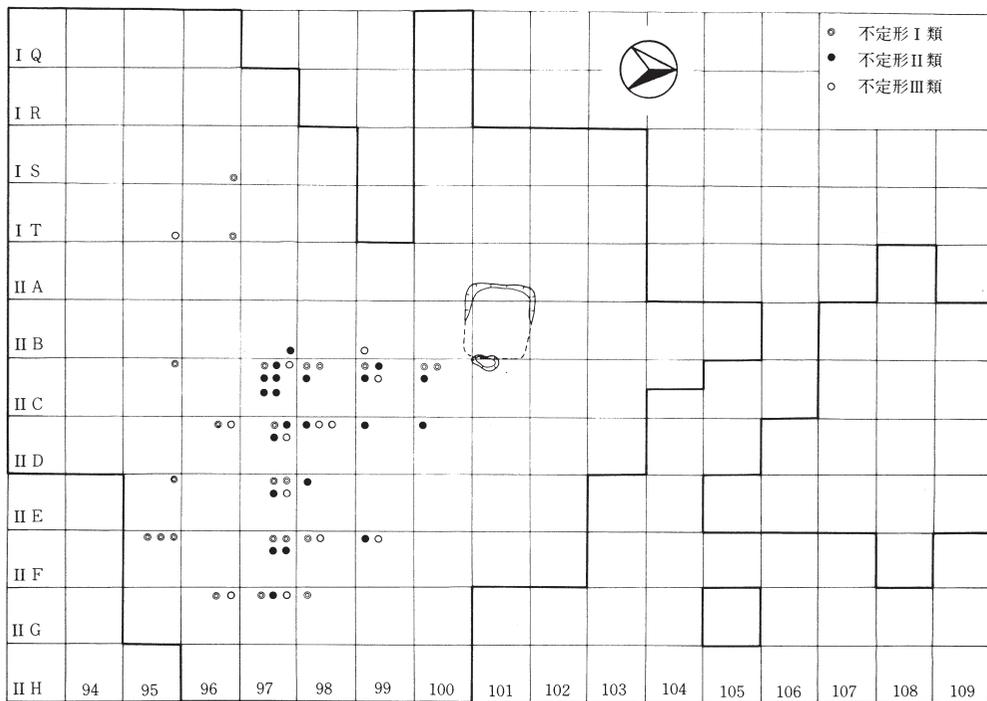


図47 遺構外出土石器分布図2 (不定形石器及びフリイク)

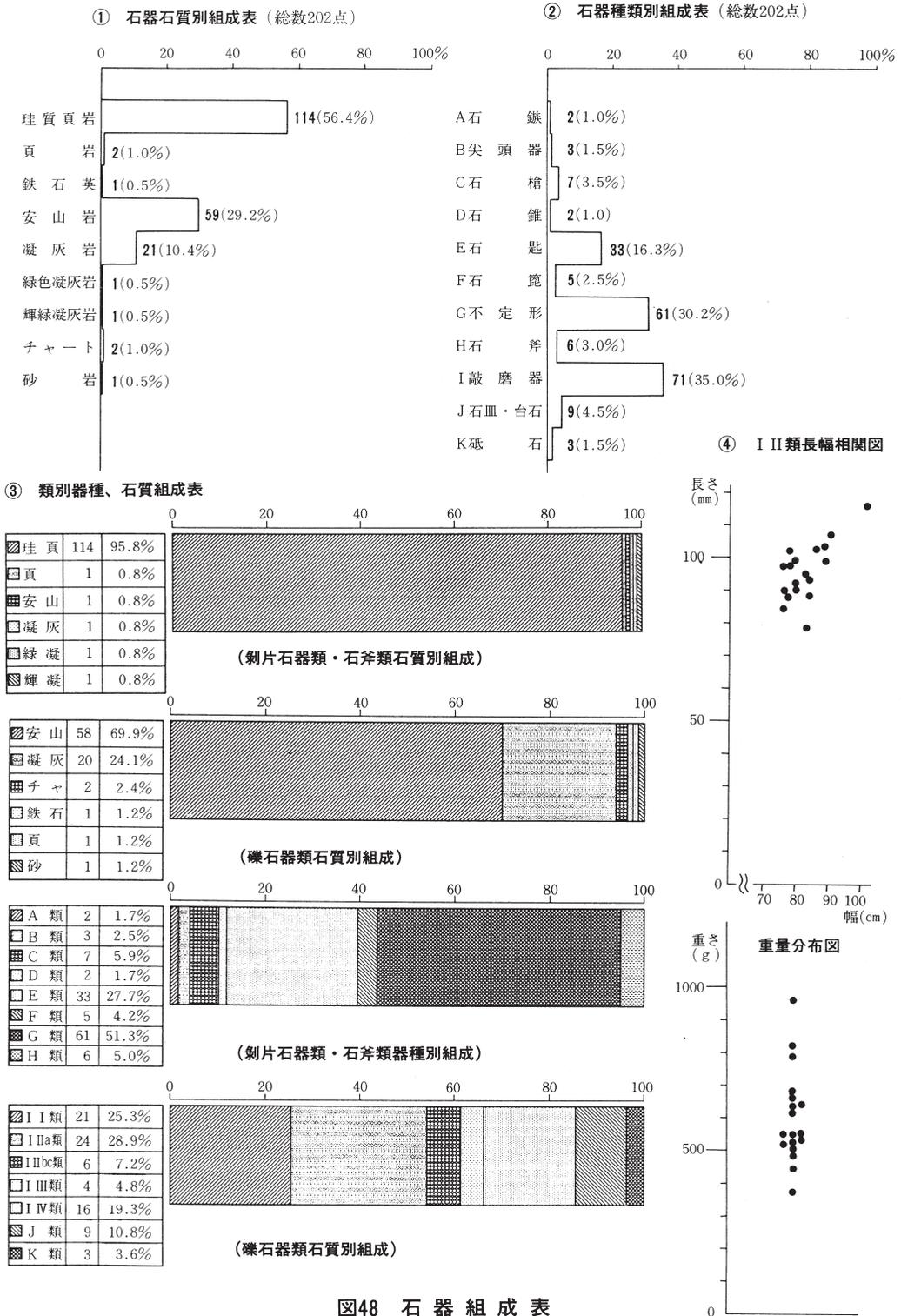


図48 石器組成表

凝灰岩であり、残りのチャート及び鉄石英はいずれも敲石に使われている。また、少量ではあるが、フレイクの中に産地不明の黒曜石片（写真11）が5点含まれる。石器の特徴 - 各器種別で特徴のあるものについてみる。まず剥片石器では数量が最も多い石匙は、そのすべてが縦型であり、該時期の他の遺跡に見られるような一部横型が製作されているのとは様相を異にする。その断面形状は二等辺三角形形状でその9割以上が頂点が長軸の右側にくる不等辺状を呈する。また、弧状に湾曲する左側縁に刃こぼれが有るものが全体の80%以上と多く、同部位に光沢が見られるものが多いことから、この石器の主な機能面がここにあったことが窺える。石槍は、7点出土したが、該時期には概ね木葉形が一般的な形状であったと思われる。石筥はその形状も多様であるが、本遺跡からは台形型のみが出土した。それも、主要剥離面の両側縁にのみ剥離調整が加えられているのが特徴である。礫石器の中では、三角柱状磨石と呼ばれている石器が礫石器中25%を占める。早期から前記にかけての特徴的なこの器種が本遺跡においても高い割合を示す。a類とした断面が球状の擦り石が多いのも目立つ。次に、b類の石器であるが、扁平な角礫であるから側縁は敲打に使用するには便利である。しかしながら、凹部とほぼ同位置に凹状の痕跡が残っているところに、意図的な加工が感じられる。もしも、そうだと仮定すれば、この部分には紐等をかけ石錘としての使用した可能性も考えられる。さらに、本類の石器は概ね規格性をもっており、従来いわれてきた使用法とは違った用途も考えられるが、資料も少なく今後の研究に期待したい。

さて、本遺跡と同時期の遺物を出土する遺跡となると県内に約10箇所ほど知られている。しかし、その多くは各時代の複合遺跡であり、出土する石器も各時期のものが混入している危険性もある。そこで、出土する土器も早期末葉から前期の初頭にかけて、しかも他時期の遺物の混入が少ない八戸市和野前山遺跡と比較してみたい。石器の組成は、剥片の定形石器中、縦型石匙が圧倒的に多く、次に石槍と続くのは本遺跡もおなじである。又、礫石器の敲磨器類中三角柱状磨石が多いのも似通っている。ただ、本遺跡には、「東北部における石器・石製品の出現と消滅」(村越：1988)によれば、縄文早期中葉の吹切沢期に現れ、以後、弥生時代中葉の田舎館式期まで続く石錘が1点も出土しなかった。該時期の器種として多くの遺跡で出土しているが、本遺跡の場合、太平洋および尾駁沼に近いという立地からして、この器種が全くないのは、やや特異な感がある。この石器には、錘つまり重りとしての用途があるといわれているが、生活様式の違いでもあるのであろうか。以上、概観したが、本遺跡から出土したこれらの石器は、早稲田5類期の土器に確実に共伴するものとして、その資料的価値は極めて高いものと言えよう。

(赤平 智尚)

第 章 ま と め

1. 上尾駁(1)遺跡は、千歳段丘から東方に傾斜する標高約55mの斜面上に立地するA地区と、南方に約1km離れた尾駁沼北岸の段丘上に立地するB地区に分かれている。A地区は縄文時代早期末葉を主体とした遺跡である。またB地区は縄文時代前期・晩期、平安時代の複合遺跡である。
2. 今回実施したA地区の調査によって、縄文時代早期の竪穴住居跡1軒、土壇1基、焼土遺構2基の各遺構と、多量の土器、石器を含む遺物包含層を検出した。これらの全ての遺構と遺物のほとんどは早期末葉の早稲田5類期に位置づけられ、しかも同期の生活面が本遺跡の基本層序第a層に存在し、ほぼ単純遺跡(単一型式期)の様相を呈していた。このことは土器群の内容と共に、伴出石器や他の文化遺物の所属も明らかとなり、当該期研究の上では貴重な資料を得た。

この他、縄文時代前期初頭(早稲田6類)や中期前葉(円筒上層a、b式)のものも散見するが、いずれも数個体分の土器のみで、ハンティング・キャンプ地としてだけの台地使用であったと考えられる。
3. 早稲田5類期の土器群は、約80個体分が確認され、施文文様の分析の結果、当該期の特徴的な文様である綾杉状縄文を施文したものが全個体数の過半数を占める数値を得た。他遺跡との比較から本遺跡の営まれた時期は、早稲田5類期の中でも中葉に位置づけられることが明らかになった。また、この中には従来出土例のなかった文様を有する土器も含まれ、同型式の内容が更に深まったものと言えよう。
4. 在地生産の早稲田5類土器の他に、北海道の道東にその文化の中心を有する東釧路式に比定できる土器が出土したが、その出土状況は両者が時間的に極めて近い関係にあることを示している。このことは、東北地方北部と、北海道における縄文時代早期の土器編年との比較研究で貴重な成果と言える。

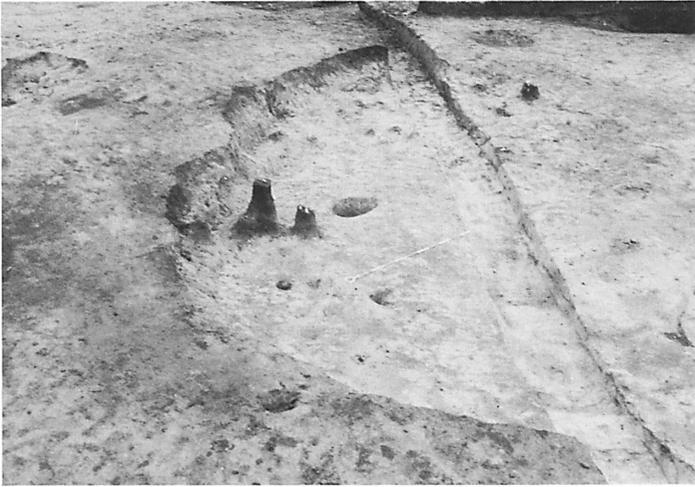
(三浦 圭介・赤平 智尚)

〔引用参考文献〕

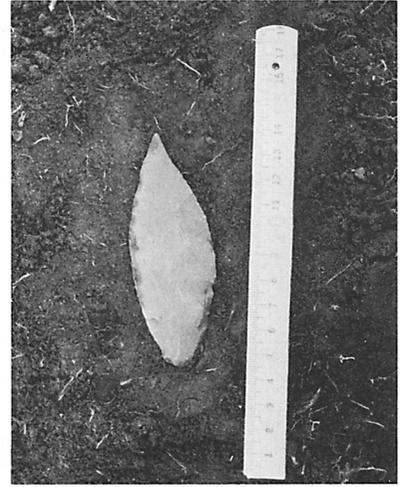
- 青森県教育委員会 1978 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」
- ” 1980 「永野遺跡発掘調査報告書」
- ” 1980 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書 - 昭和52年度第1次発掘調査」長七谷地貝塚
- ” 1980 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告 - 昭和53年度第2次発掘調査」長七谷地貝塚
- ” 1981 「表館遺跡発掘調査報告書」
- ” 1981 「新納屋遺跡(2)発掘調査報告書」
- ” 1981 「鷹架遺跡発掘調査報告書」
- ” 1982 「発茶沢遺跡」
- ” 1983 「長者森遺跡」
- ” 1984 「和野前山遺跡」
- ” 1985 「売場遺跡発掘調査報告書」
- 青森県立郷土館 1976 「下田代納屋B遺跡発掘調査報告書」
- 江坂 輝弥 1957 「三戸郡大館村十日市赤御堂貝塚調査略報」 奥南史苑 2
- ” 1962 「青森県八戸市長七谷地貝塚」 考古学年報 11
- 工藤 竹久 1977 「北日本の石槍・石鏃について」 北奥古代文化 9
- 児玉作佐衛門・大場利夫 1954 「函館市春日町出土の遺物について」 北方文化研究報告 9
- 笹津 備洋 1960 「八戸市日計遺跡調査報告」 三田史学 33 - 1
- 佐藤達夫・二本柳正一・角鹿扇三 1958 「青森県上北郡早稲田貝塚」 考古学雑誌 43 - 2
- 佐藤達夫・二本柳正一 1961 a 「六ヶ所村尾駁出土の土器」 上北考古学会誌 2
- 佐藤達夫・渡辺兼庸 1961 b 「六ヶ所村表館出土の土器」 上北考古学会誌 2
- 佐藤達夫・二本柳正一 1961 c 「六ヶ所村出土早稲田5類土器」 上北考古学会報告 2
- 佐原 真 1977 「石斧論 - 横斧から縦斧へ - 」
- 鈴木道之助 1981 「図録石器の基礎知識 縄文」
- 名久井文明 1971 「青森県芦野遺跡の土器群について」 考古学雑誌 57 - 2
- 八戸市教育委員会 1976 「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」
- ” 1980 「長七谷地貝塚発掘調査報告書」
- ” 1982 b 「長七谷地2号遺跡」 長七谷地遺跡発掘調査報告書、長七谷地2・7・8号遺跡
- 村越 潔 1988 「東北北部における石器・石製品の出現と消滅」 考古学ジャーナル287
- 山内 清男 1 1979 「日本先史土器の縄紋」 先史考古学学会



写真1 上尾駁(1)遺跡遠景 (1. 南から 2. 北西から 3. 標準土層)



第1号竖穴住居跡



石槍出土状況

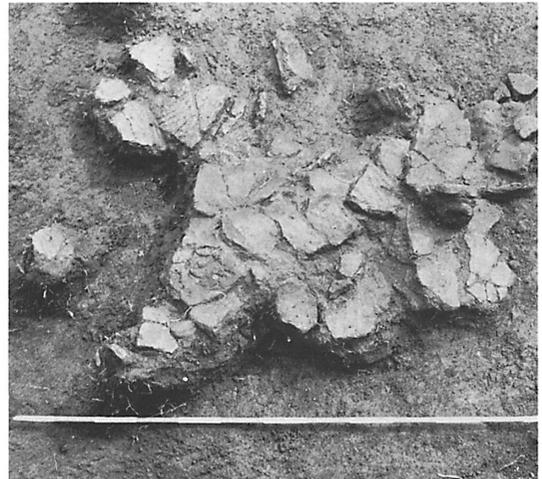
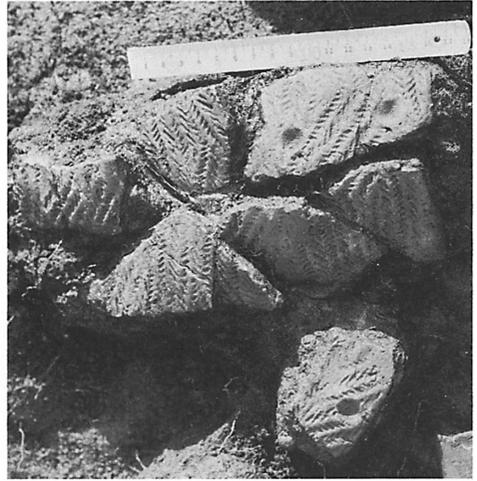


写真2 第1号竖穴住居跡及び遺構外遺物出土状況



写真3 第I群土器 (1-A 4b類、2~4-A 5類、5-B 4類)
6-B 5a類、7-B 3類

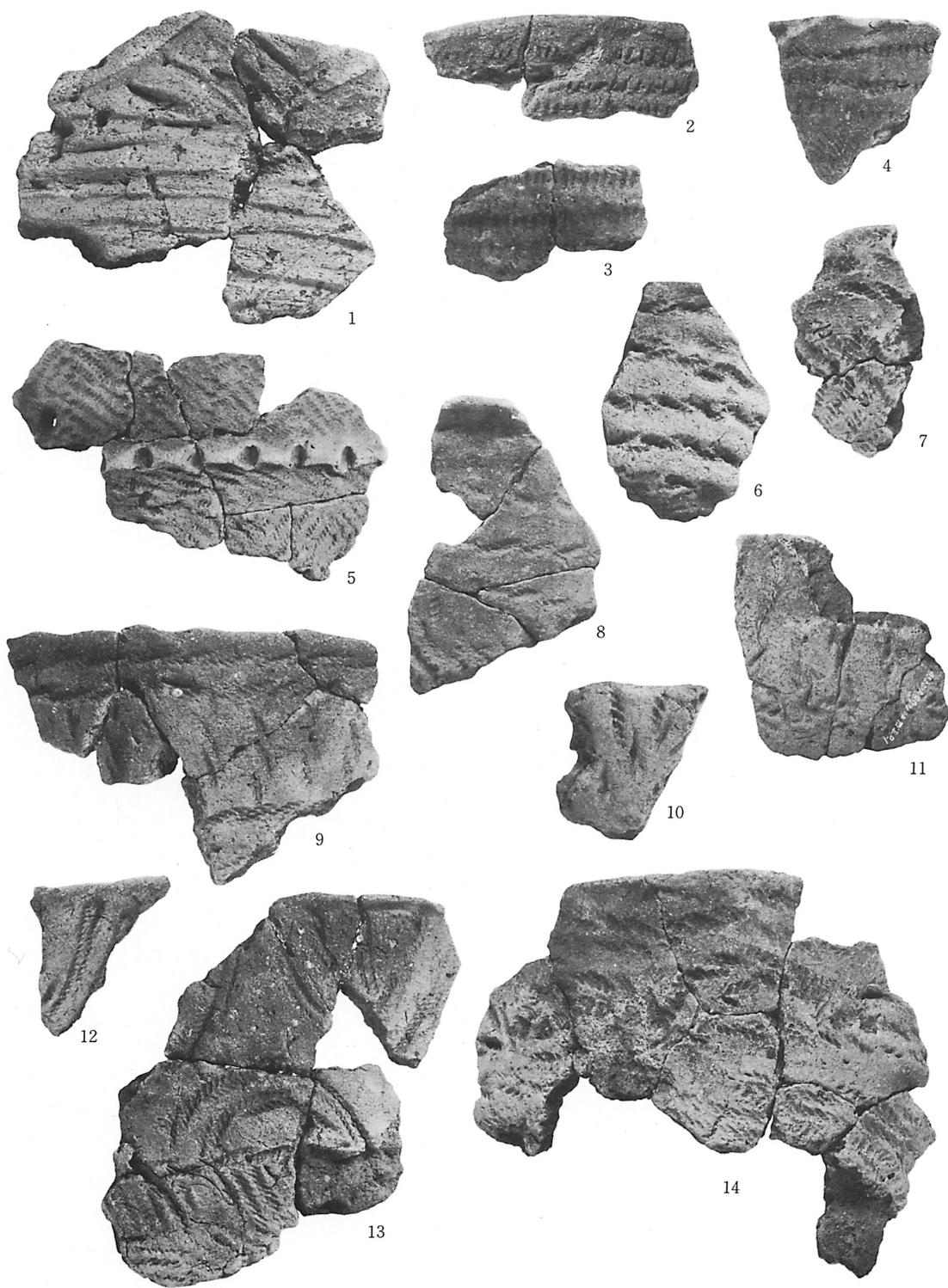


写真4 第I群土器 (1-A1類、2~4-A2類、5-A3類、6~7-A4a類)
 (8~9-A4b類、10~11-A4c類、12~14-A4d類)

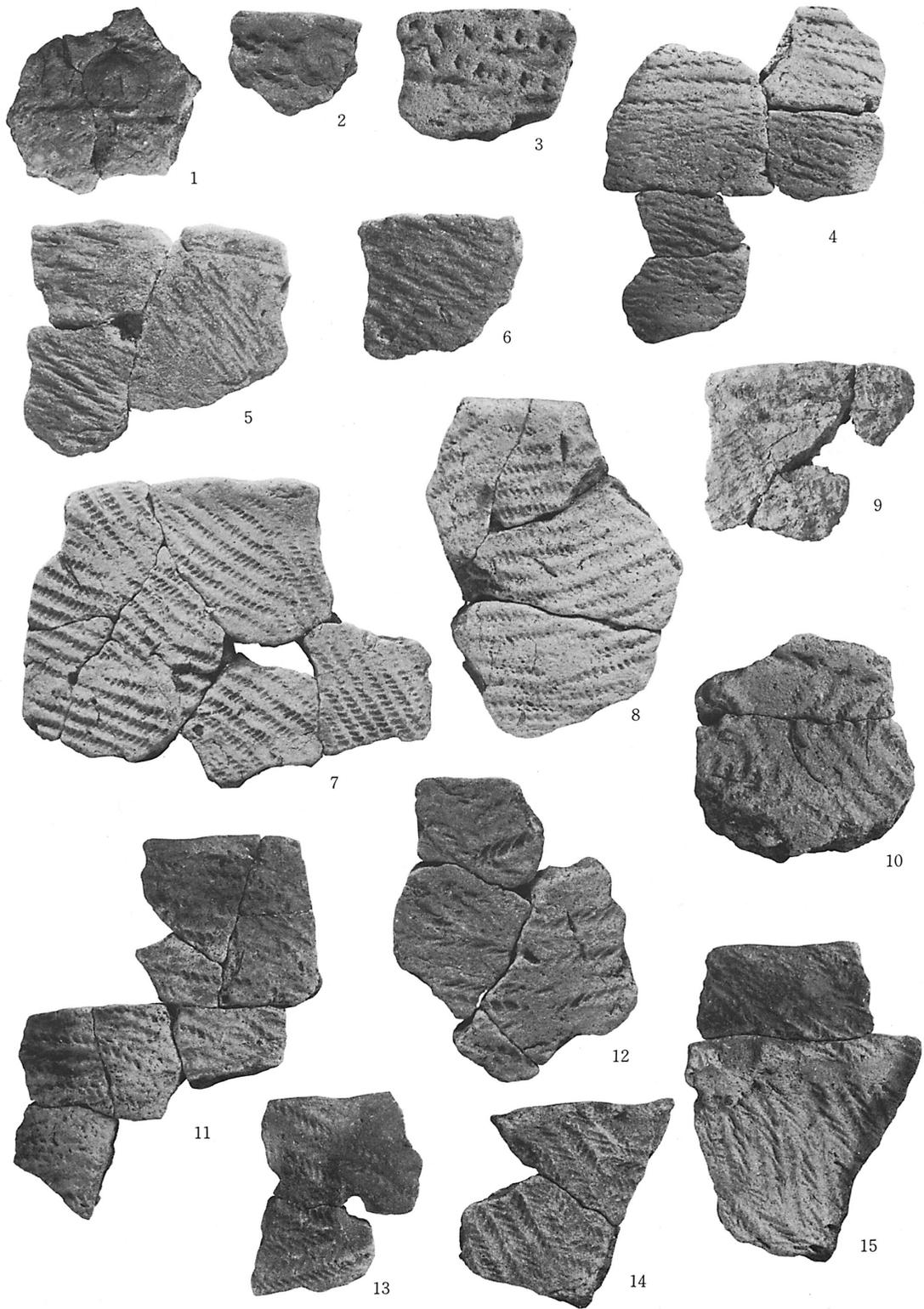


写真5 第I群土器 (1~3-A5類、4-B1類、5~6-B2類、7~9-B3類、10-B4類、11~15-B5a類)

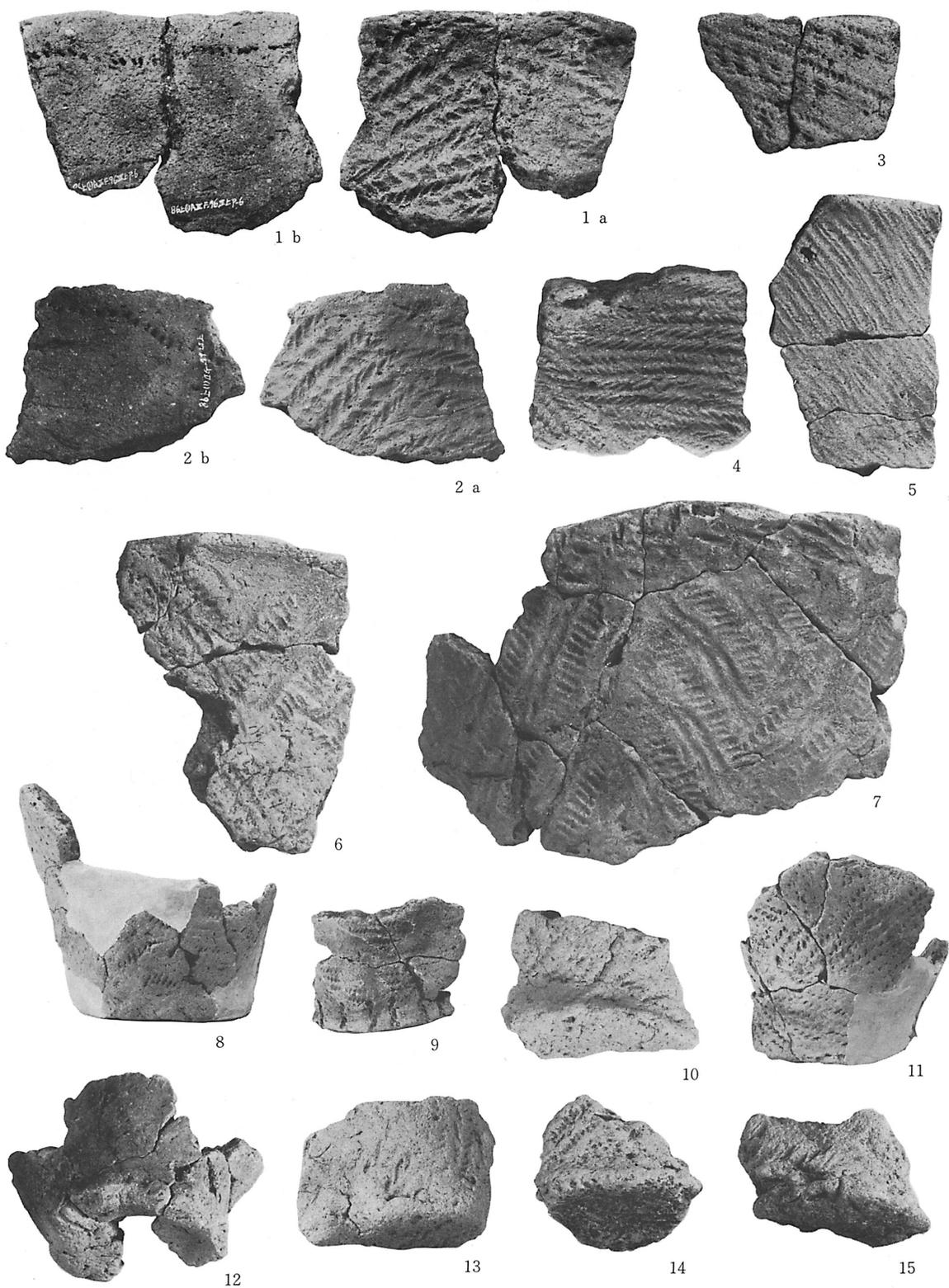


写真6 第I群土器 (1・2・4-B5e類、3・7-B5c類、5-B6類)
 (6-B5b類、8~15-底部)



写真7 第II群土器(1)、第III群土器(2~10)、第IV群土器(11~12)

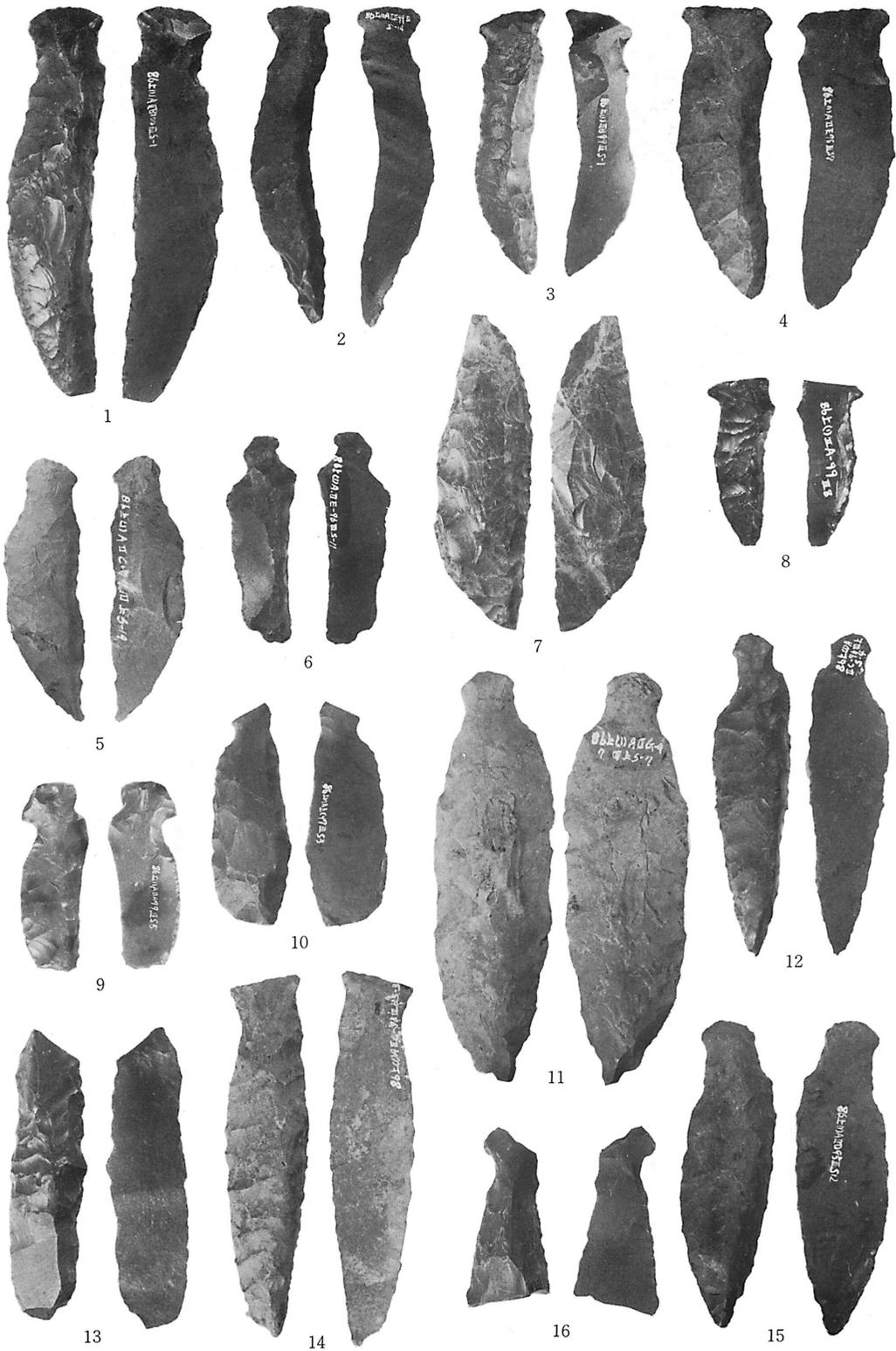


写真8 石器 1 (石匙)

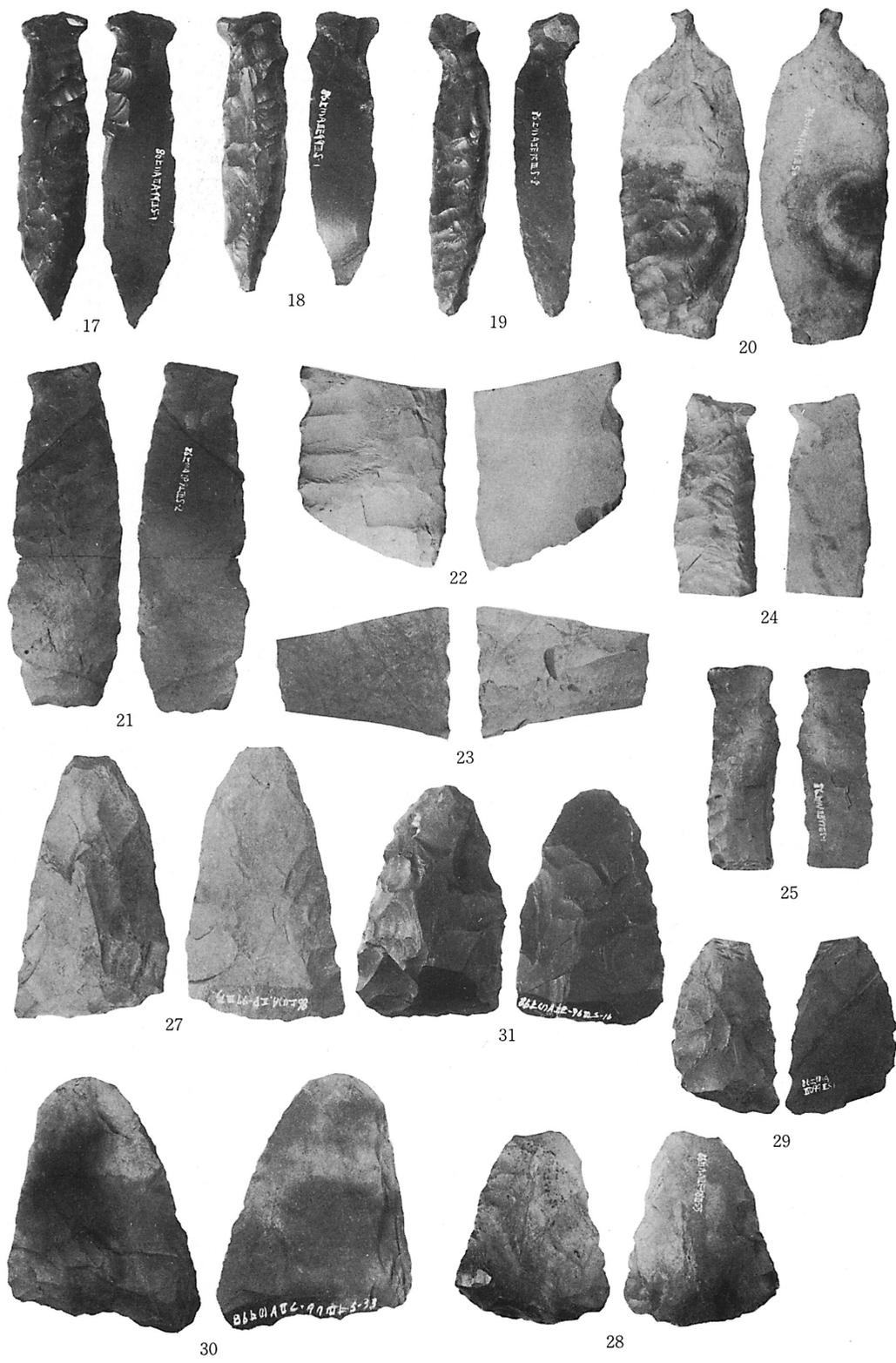


写真9 石器 2 (石匙・石筥)

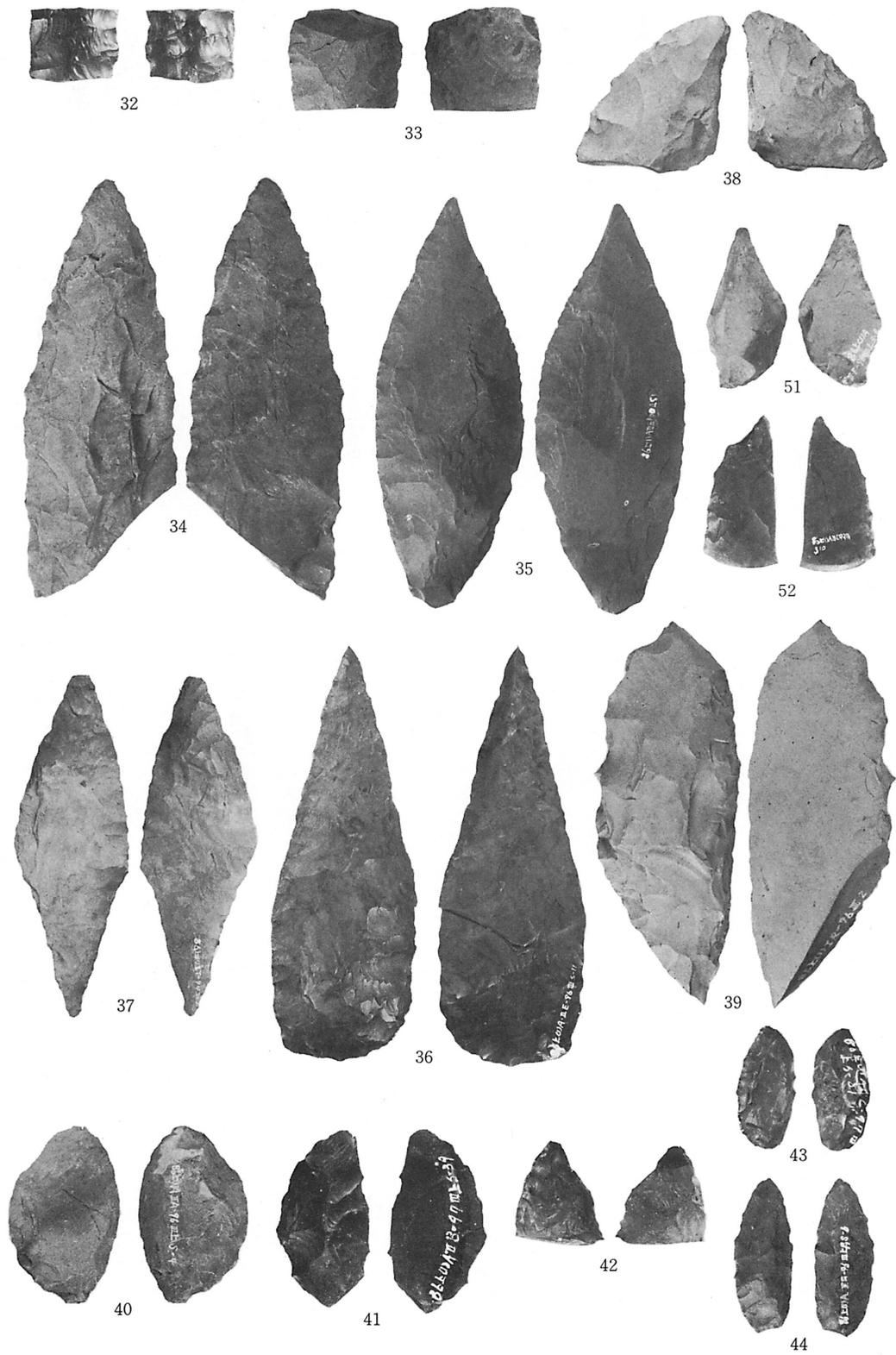
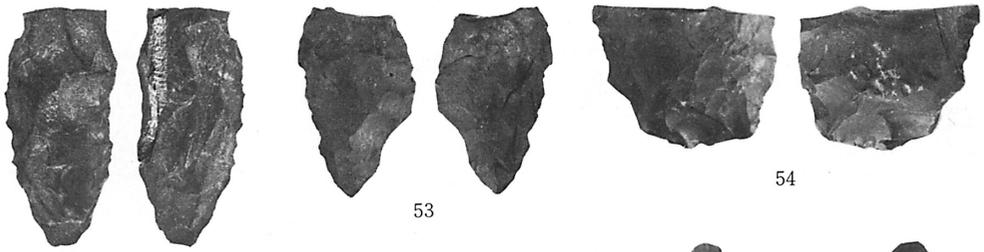
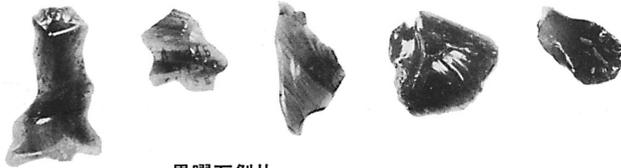
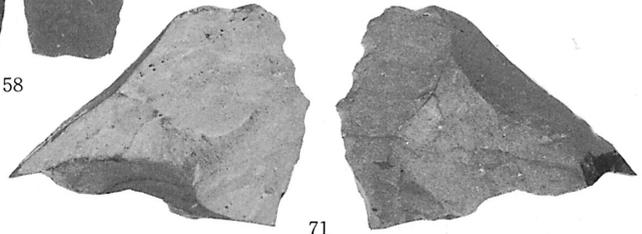
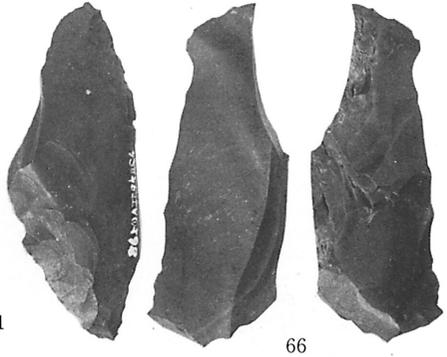
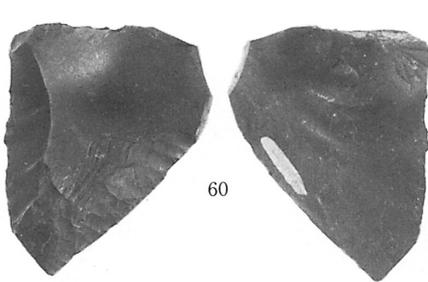
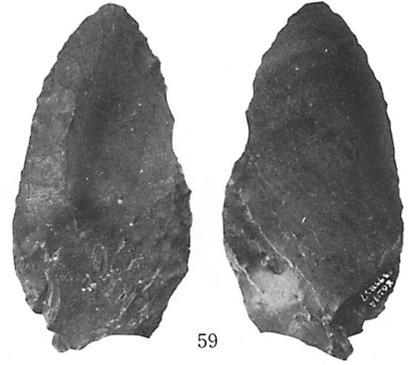


写真10 石器 3 (石槍・石錐・石鏃・尖頭器)



1号住居



黑曜石剝片

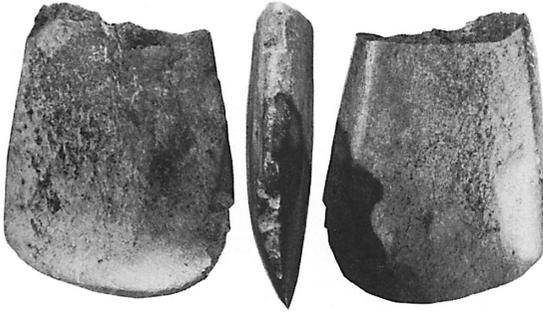
写真11 石器 4 (不定形石器)



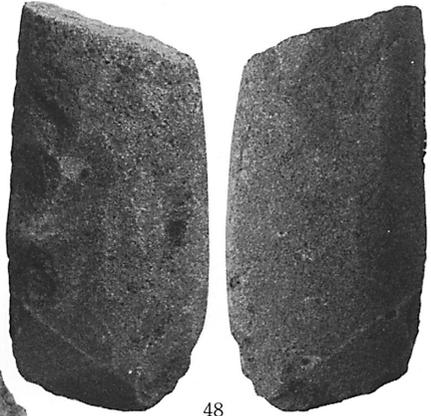
45



49



46



48



50

写真12 石器 5 (石斧)



写真13 石器 6

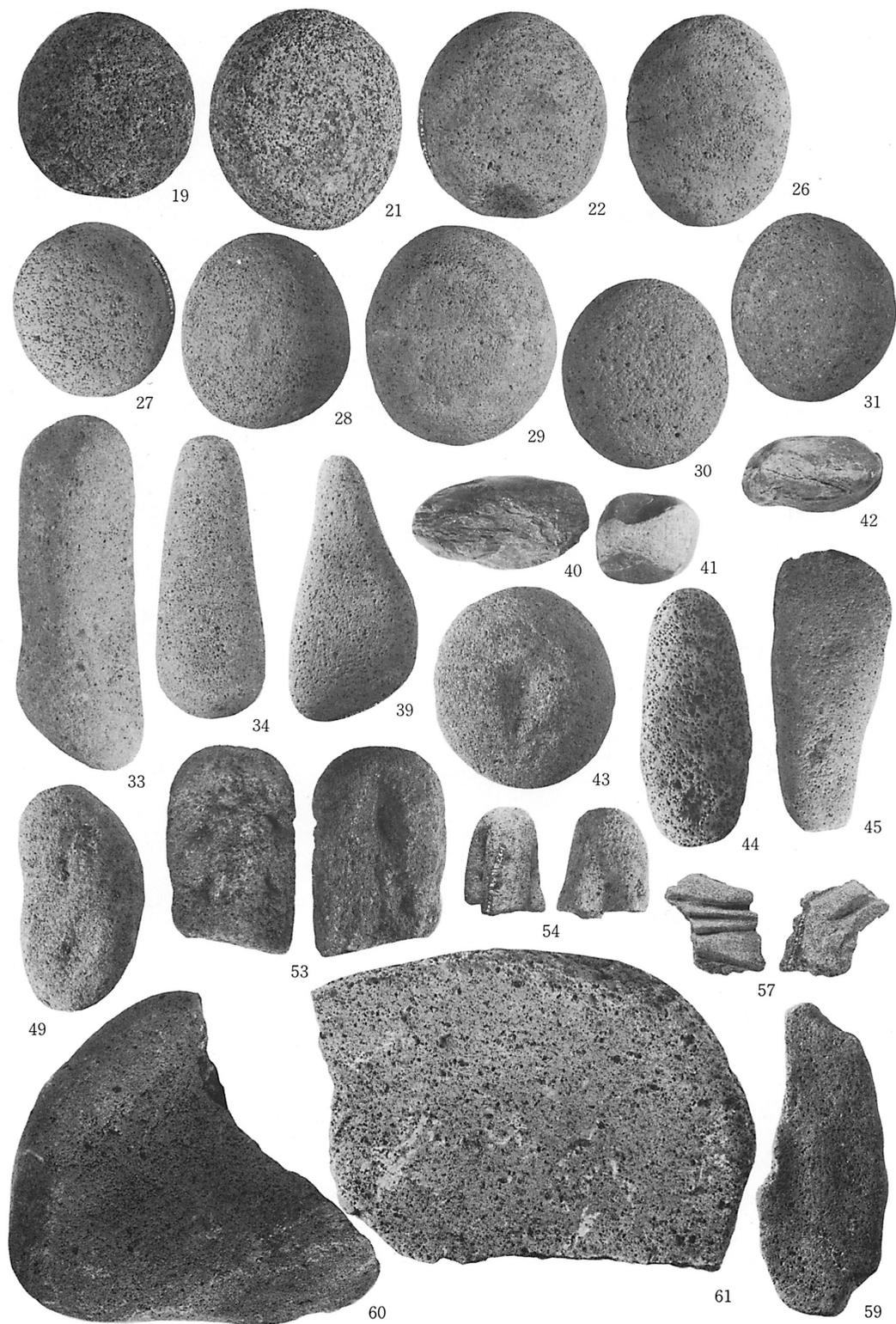


写真14 石器 7

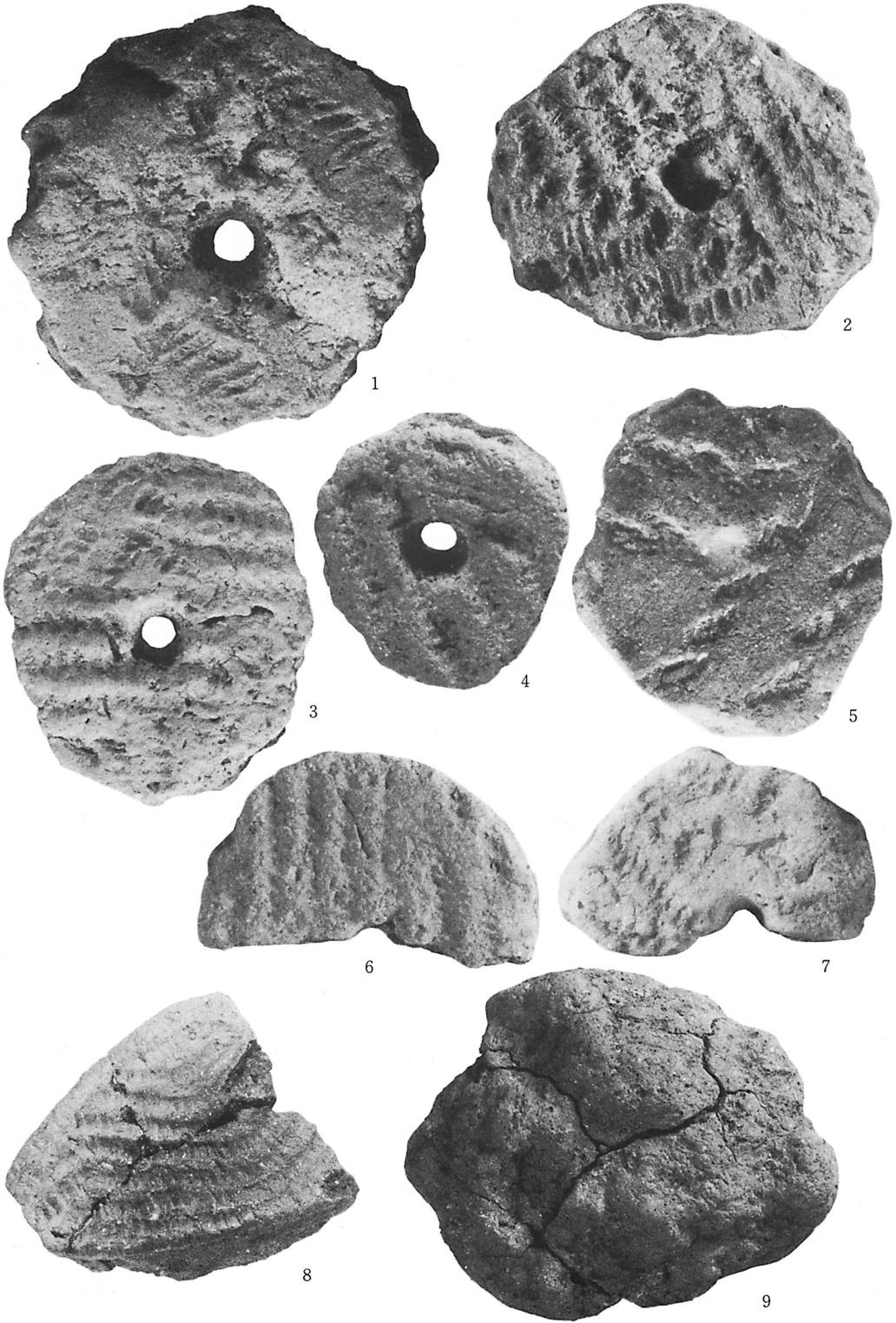


写真15 土製品 (1~4・7、遺構外、5・6、1号住居)
8、性格不明土製品、9、ベンガラ塊

青森県埋蔵文化財調査報告書第112集

上尾駮(1)遺跡A地区

—むつ小川原開発事業に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷発行 昭和63年3月31日

発行・編集 青森県埋蔵文化財調査センター
青森市大字新城字天田内152-15

印刷 青森市千刈二丁目1番30号
高金印刷株式会社

TEL (81) 0519・2244番
